
Sacred Flame of Darkness

雪龍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

S a c r e d F l a m e o f D a r k n e s s

【Nコード】

N 2 1 9 6 Q

【作者名】

雪龍

【あらすじ】

青年、カインは自分の事をまだ知らない。
カインはひよんな事から少女、リルと出逢う。
それが全ての始まりだった。

書き方は少しずつ勉強していくので最初の方は読みにくいかもしれませんが。読むときは軽い気持ちで読んでください。

処女作ってやつです。

それでも大丈夫という人はどうぞ！

作者は受験生なので投稿速度が結構遅いです。

第1話 激しき炎（前書き）

だいぶ変えました。

何をつて？

まあ色々ですよ。

第1話 激しき炎

この世界——シゼルディアス

この世界には『輝流』というものが存在する。

魔法の様なものと考えてもらいたい。

その輝流を操る者は『輝流士』と呼ばれ、大抵『セーブ』に所属している——

第一次闇転戦争時にて、闇を滅し、光を滅ぼさんとする者あり

其の者は全ての輝流士の上に立たんとした

闇も光も其の者を恐れた

いずれ彼らは其の者をこう呼んだ

「と――

「という事何やけどわかったか？」

「わかりました。カインには明日伝えます」

とある部屋で二人の女性が話していた。

一人は赤い服に眼鏡をかけた女性。

もう一人は肩ほどまである金髪の女性。

「はあ… 何でカイン来てへんねん」

赤髪の女性が溜め息をついて言う。

「どうせどこかで遊び呆けてると思いますよ」

「…… まあ、エエわ。それより明日は頼んだで」

「わかりました」

金髪の女性は部屋から出て行った。
赤髪の女性は棚から本を出し椅子に座って読む。

「これやっぱオモロいな」

読んでいたのはマンガだった。

「ヘックション！」

路地裏でくしゃみをする青年。

「風邪でもひいたか？いや、噂でもされてんのか？」

彼の名はカイン・クリーク。

容姿は黒い髪で右目が前髪で隠れており後ろはハネている。
さらに首には白と黒の模様がついた首巻？をしている。

「明日は仕事だし。家帰って早めに寝るか」

そうして歩き出したとたん――

「おい、あんちゃんここはワイらのシマやで。何しとんねん」

坊主の大柄な男に絡まれた。

だがカインはよほど早く帰りたいのか、その男を無視した
しかし男は無視されたので怒鳴り出した。

「あんちゃんエエ度胸しとるやんけ…ワイがここいらで「うつせえ
ハゲ！」」

ハゲは…じゃなくて男は額に青筋を浮かべている。

いつの間にかカインは男達約30人に囲まれてしまっていた。

「ぶっ殺してやらああ！！！」

そう男達の中の一人が叫んだとき一斉にカインに襲いかかった。

「しゃーねえな。風邪かもしんねえってのに…」

――数分後

「ほづ、やるじゃねえか」

そこに立っていたのはカインと最初の大柄な男だけだった。
他は屍と化している。

…別に殺してないけど。

「けどワイも同じように倒せる思っなや。ワイは輝流土や。ファイターやけどな」

輝流土には様々なタイプがあり、そのうちの一つがファイター。これは輝力を体に纏い攻撃する単純なものだ。

「せやから降参するなら今のうちやで。まあ謝っても許さんがのう」
「別に良いよ」

「ああ？」

「俺がためえをぶつ飛ばすだけだから」

「ほう…じゃあやってみるや!!」

走って向かってくる男を見ながらカインはニヤツと笑った。
そしてその瞬間――

――ボオオオオオオ

カインの腕が燃え始めてその炎は徐々に大きくなっていく。

「なっ、まさか!!」

「そのまさかだ、俺も輝流土だ」

「しかも原流土やと…!!」

「そうだ、そして見て分かるだろうが性質は【炎】だ」

男は驚きが隠せない。

「な、あ、そ、そんな…」

「燃え尽きる…」

「う、嘘やろ…？」

「灼熱の火炎によつて…！」

「ぎいやあああああああ…！！！」

男の断末魔が路地裏に響いた。

——数秒後

そこには黒焦げの男と男達の山と1人の青年がいた。

「やべえ、もうこんな時間だ」

空を見るともう陽がだいぶ沈んでいる。

「さっさと帰ろう」

こうしてやっとカインは帰れることになった。
カインが帰っていくと同時に炎のようだった空は、
炎が消えていくようにだんだん暗くなっていった。

第1話 激しき炎（後書き）

皆様初めまして雪龍です。

1話目なんでちよつと短めです。

えーと、とりあえずすみません。

なんか結構ぐだぐだで…なにぶん国語が苦手なもので

まあこんな感じで続いているので応援よろしくお願いします。

第2話 謎のおっさんの侵入大作戦！

ここはとある山の中にある城の前の茂みの中
何故こんな所にいるのかと言うと仕事だからである。

内容は、

『最近この付近で暴れまわっている盗賊コーライ・カッツェル及び
コーライ率いる盗賊団の退治』
である。

「やつ、やつと着いた…」

「ほ、ほんとだ…」

そう言っているのは、黒髪の青年カインと金髪の女性だ。
この金髪の女性の名はエリサ・スレット。

「ていうかよくこんな地図で来れたよな…」

「そうね…」

そう言いながらカインは、手に持っている紙切れをひらひらさせて
いる。

そしてその紙切れには、手書きで山の絵とココと書かれているだけ
だった。

「あのアホだけは…」

カインは地図を描いた本人、つまり前回の赤髪の女性に怒りを込め
ながら紙切れをビリビリ破いていった。

「おかげで来るのに1日かかったじゃねえか…」

「まあ、無事着いたんだから良いじゃない」

そう言うエリサも心なしに怒っているように見える。

「まあまあ、嬢ちゃんの言う通りだよ青年。怒んなよ」

「……！」

カイン達はその声に驚いて後ろを振り返った。するとそこにはいたのは、

「そんなあからさまに驚かなくても良いんでねーの？」

そう、見た目は30代後半位の男性だった。

いくらか落ち着いたところでカインが口を開いた

「おっさん、いつからいたんだ？」（全然気付かなかったんだが…）

その前にまず名前くらい聞いとこーよ。

「えー、いつからってーと」

話は数時間前に遡る――

「おい」

「何？」

数時間、下手したら半日ほど山の中を歩き続けていて疲労しているためテンションただ下がりである。

「あっちの方が近そうじゃね？」

「でも道はあつちしか無いわよ？ってカイン！？」

エリサが話し終わる前にカインは茂みに入って行った。

「どこどこ？」

案の定道に迷った。

「やつ、やつぱあっちだったかな…？」

カインはこっそり逃げ出そうとする。

だが――

「待て…！！！」

ビクッ！！！！

カインはとても分かりやすくビビっていた。

（後ろからとてつもない殺気が…）「は、はい」

カインが後ろに振り向くと、目の前にエリサの拳があった。

「やっぱ違ったじゃねえかああ！！！！」

「ごふうああ！！」

この時カインは直感した。

エリサを怒らせるのは本気でヤバイ…。

――
時間は戻り現在

「つてところくらいからかな」

「そんな前からいたの！？」

「おう！いやゝしかし青年が殴られた時は死んじやったかと思ったわ」

「だろ？そう思っただろ？」

「ああ、嬢ちゃんありゃあすごかった、へこっ！！」

男性はエリサにぶつ飛ばされた。

「おいおい何やってんだエリサ…」

「ちゃんと手加減くらいしてます!!」

「今のもか…?」

「ご冥福をお祈りいたします。」

「いや、俺別に死んでないから!」

「で、こんな所で君達は何してたの?」

男性は、真っ赤な頬を擦りながら言った。

「実はどうやって入るか考えてたんです」

ちなみにこの城には門があり、その門には2人門番がいる。

「えっ? そんな話俺初耳だけど…?」

「あんたに言ってもどうせ『正面突破だ!』とか言うでしょ?」

「……確かに」

「入る方法ね…」

ピーン

「俺閃いちゃった… 入る方法。しかも入る人に危険はほぼ無し」

「えっ！？どんな方法ですか？」

「うーん、口で説明するより見せた方が早い… まあ、見てな」

そう言い残して男性は門番の所まで行き、何か話していた。

そして話の途中で1人の門番が城に入って行った。

その門番が完全に城に入りきったところで

バゴッオ！！

男性は残った方の門番を殴り気絶させ、こちらを向いて来いと合図して入って行った。

その頃カイン達サイドは

「あの人一体何者なの？」

「そんなことはどうでも良い、行くぞ！」

「えっ、あっうん！」（これって結局正面突破じゃない？）

カイン達は城に入ろうと走った。

そして城に入る直前に先ほど入って行った門番が帰ってきた。しかも仲間を3、40人程引き連れて。

「え、えーとこれ、どういう事？」

エリサはかなり焦っている。

「ほんとに来やがったぜ。あのおっさんの言うとおりだ！..！」

「おっさんの言うとおり？..まさか」

「あのおっさん...」

「「俺達（私達）を囿にしゃがったなあああ！..！」」

一方男性は――

「さて、『アース』の子達はどうするかねえ」

そんなことを言いつつ不敵な笑みを浮かべていた。

第2話 謎のおっさんの侵入大作戦！（後書き）

さて第2話、どうでしたか？

あのおっさんの正体とは？そしてカイン達は無事に仕事出来るのか？

始まりの炎編今後もう少しだけ期待して待っていてください。

さてここからは能力紹介

【能力の名前】：能力を使う者の名前

【原流】：原流士

輝力を体などを通して様々な性質に変化させ放つ能力。1人につき1つの性質を覚えられる。

カインの【炎】など…

【魔術】：魔術士

輝力を詠唱を通して具現化させる能力。これは1人につき15～20ほど覚えられる。
次回出る予定。

【魔錬具】：武具士

輝力で武器を変形させたり、強化する能力。本人が使いやすい武器でないと思えない。

登場はまだ先になる予定。

第3話 黄色い魔術士

「結局こうなっちゃった…」

只今廊下を走っているカインとエリサ。

何故こうなったかと言うと第2話を見たら分かります。

「あのクソ親父…次会ったらしばいてやる…」

カインは先ほどからそればかり言っている。

先ほどから何人の盗族達を倒して来ただろうか。

1人で向かってくる奴もいれば、数人で来る奴もいる。
その度にカインが倒している。

「ああクソ！！キリがねえじゃねえか！！！！」

「うるさい！また来たわよ！！」

今度は3人だ。

「うぜえ！消えろ！！」

「ぐわっ！」

「へぐっ！」

「がはっ！」

カインはどんどん倒していく。

「てか何で俺ばっかザコ達の相手しねえといけなんだよ！！」

「いいじゃない、戦闘大好きカイン君」

「誰が戦闘好きだ！！っーかい加減走るのやめようぜ」

そう、カイン達は城に入ってからずっと走っている。
今止まったけど…

「あら？もう疲れたの？情けないわね」

「うっせえ！こっちは全部相手やってんだぞ！！」

「そついうのは男がするもんなの」

「お前も似たようなもんだろ…」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

ヤバい…またやっちゃった。

つい言っちゃうんだよねあ、いつも言ってるから。

「天誅！！！」

「しょうがない、そろそろ変わってあげますか」

「はい…よろしくお願いします…」（こいつ輝流無しでも余裕だろ…）

そんな事を思っていた、その時――

「来た…1人、2人…嘘…？」

一気に30人くらい来た。

「お前変わった途端これかよ…運無えな（笑）」

「う、うっさい！」

「とりあえずがんばれ…」

カインは話し終わると少し離れる。

「まだ距離はあるわね…いける！」

エリサは敵との距離を確認すると、手を前で合わせた。

「神聖なる雷よ^{いかづち}」

詠唱を始めるとエリサの手が光りだした。

「地獄の闇をも照らすが如く全てを今此処に解き放て、」

詠唱が最終段階まで進むと、エリサの前に黄色い円の魔術陣ができた。

「ほとばし進れ、ジャッジメント・サンダー裁きの閃電！！！！！！」

詠唱が終わると同時に、エリサは手を離した。
すると魔術陣から雷が出てきて盗族達を包んだ。

「魔術士の名の元に沈め……」

「さて行くわよ……あら？」

「てめえ……お、俺まで……巻き、込むな……よ……」

「あはっ、ごめんなさ……い」

「わざ……と……だろ……ガクッ」

カイン H P O

なんとあの電撃にカインも巻き込まれていたのだ。

「これはさすがにやばいわね…」

「妖精の名を以ちて傷を癒せ」

フェアリーナース
「妖精の光」

詠唱が終わるとカインを光が包んだ。

決して雷では無いのでご安心を。

「ふう、てめえなんてことしやがる…」

「生きてたんだから良いじゃない」

「そういう問題じゃねえだろ！」

「ああ、うつさい」

カッン、カッン――

廊下に足音が響いた。

そしてその足音はどんどんカイン達に近づいてくる。

「今度は何だ？」

「気をつけて、敵かも…」

「すいませーん！」

「…？」

「敵にしちゃ随分軽く話してきたぞ？」

「誰かいますかー？」

「敵…じゃないようだな」

「そうかしら…」

「聞いてますかー？」

「はいはい、何？」

だいぶ近づいてきて話しかけてきていた人物の顔がようやく見えてきた。

そして顔を見て2人は驚いた。

話しかけてきていたのは長く白い髪の少女だった。

歳はカイン達とそう変わらないだろう。

「えーと…良ければ助けてもらえますか？」

「はい？」

少女は話し終わるとニツコリと微笑んだ。

その時カイン達は、

（どちら様ですか！？）

そんな事を思っていた。

第3話 黄色い魔術士（後書き）

第3話ようやく出来ました。

さてどうでしたか？

あの少女の正体は？それからおっさんはいつ出るのか？

これからもどんどんごちゃごちゃした展開になると思います。
ですがこれからも応援お願いします！

第4話 カインの隠し事

「助けて…もらえますか?…」

「……………」

(えーと、こういう場合どうするべきなんだ?)

(とりあえずどうしてほしいか聞くべきじゃない?)

(そ、そうか)

「助けるって言っても、何すればいいんだ?」

「ここから私を出してください」

「?、出りゃいいじねえか」

「出来るわけないでしょ…」

エリサはカインのアホさに呆れている。

そりゃそうだ。

周りには盗族だらけ、さらに外には門番がいたのだ。
今はいないが…

「まあ、それは良いとして何でこんな所にいるの?」

「えーと、私、家が無くて放浪してたんですけど…」

((放浪て…))

「それで知らないおじさんが家をあげるからって言うからついてきたら…」

「つまり…誘拐?」

「まあ、そうなりますね」

良い子の皆は知らない人について行っちゃ駄目だよ！

「じゃあ助けたとしても行く所無えじゃねえか」

「…そう、ですね…」

（バカ！へこんじゃったじゃない）

（その通りなんだから仕方無えだろ、まあ任せろって）

「だからさ、良かったらうち来いよ…俺の家」

「「えっ！…！」」

エリサは驚愕のあまり口が閉じない。

だがカインは、なんか変な事言ったか？と言わんばかりに2人の驚いた顔を見ている。

（ちょっと、大丈夫なの？）

（大丈夫だろ）

（大体あんたの家じゃないし、それに…）

（それに？）

（あの子が許すの？）

（…大丈夫だろ、たぶん）

あんな事を言っておいて少し不安になりだすカイン。
おそらく許されないと思っっているのだろう。
にしても自分の家ではないらしい。居候でもしているのだろう。
なのに勝手に見ず知らずの人を招待するというのはどうなんだろう
か。

「分かりました」

「「えっ!？」」

「行かせていただきます」

「それ…本気で言ってる?それにこいつの家じゃないわよ?」

「はい、聞こえてました」

「聞こえてた?」

「私、昔から目と耳がとても良いんです」

へえ〜と普通に感心するカイン。

それを見て呆れるエリサ。

とそこでカインが急に何か思いついたのか「あっ!」と声をあげた。

「そう言えばまだ名前聞いてないよな」

「そうでしたね、私はリル…リル・コークレインです」

「俺はカイン・クリークだ」

「私はエリサ・スレット」

「よろしく願います、カインさん、エリサさん」

「おう、よろしくな」

「こちらこそよろしく、リル」

エリサは思った。

えっ?これで良いの?――

「ところでリルはコーライを知ってる？」

「はい、エリサさん達はコーライに会いに来たんですか？」

「会いに来たってーか、倒しに来た」

「ちょっ、カイン!!」

「ん？言っちゃ駄目だっけ？」

「はあ、当たり前じゃない…」

エリサは呆れて何も言えそうにない。

先ほどから呆れてばかりだ。

「見つけたぞ、侵入者共!!」

その声に反応して3人は後ろを振り返り声の主を見た。
声の主は男でニット帽を目が隠れるほど深くかぶっている。

「お前がコーライか？」

「ん？違うけど」

「良いのか？俺を殺さなくて」

「別に…隊長からは会って来いとしかなわれなかったし、それに…」
「何だ？」

「お前の居場所も分かったしな」

そう言つて男は手を振りながら帰ろうとした。だが――

「おい、ユ―レンに言つとけ…仲間に手え出したらぶっ殺すってな」
「あれ？俺の正体分かつてる？」

「ああ」

「そうか、仲間ね…元仲間はどうでも良いわけだ」

「てめえらのやり方は俺には合わなかったんだ…それだけだ」
「言い訳なんざどうでも良いんだよ…」

そう言つと男は黒い霧もやに包まれ消えた。

エリサがカインを見てみると、怒っているようでどこか悲しげな顔をしていた。

（カインさんとさっきの人との間で何が…）

リルが考えていると、黙っていたカインが静かに言った。

「ごめん…いつかちゃんと話す…でも今はまだ言えねえ」

「カイン…」（あなたは一体…）

歩き出したカインを見てエリサは俯いた。

リルは何を言えいいのか分からずただついて行くだけだった。

「あんな事言わなくても分かってんだよ…」

カインは誰にも聞こえないようにボソツと呟いた。

「言い訳、か…」

ただ、リルにはカインが言った事が聞こえていたが…。

第4話 カインの隠し事（後書き）

重い！！まだ第4話なのに急展開過ぎる！！
あと会話多過ぎる！！… すいませんでした。

今回コーライを出すつもりだったんですけど、次回に回します。
理由は聞かないでください。

第5話 コーライ現る

「何…これ…」

エリサとリルは目の前の光景を見て青褪めている。
そうなるのは仕方がない。

何故ならそこには、血まみれで倒れている盗族達がいたからだ。
血の海、という表現が最も正しいだろう。
すでに全員息絶えている。

「これ…さっきの奴が?…」

「…だろうな」

「ひどい…」

カインはその情景を見てかなり怒りを浮かべている。

「あの野郎…!…」

カイン達はその場を少し早足で後にした。

そして、ここはコーライの部屋――

「コーライ様!!」

「何だ？」

「侵入者です！」

今話しかけられている者はコーライ・カッツェル。
カイン達の標的である。

「侵入者だと？ 門番はどうした」

「倒されました！」

「何だと？」

コーライが驚くのも無理はない。

カインとおっさんがあっけなく倒してしまったが、実はあの門番の2人はコーライ盗賊団の中でも結構な腕利きだったのだ。本当にあっけなく倒されたが…。

「そうか、面白い…」あれ”をしろ！」

「分かりました、直ちに”カラクリ城”を発動します！」

”あれ”で通せ…」

果たしてカラクリ城とは？名前の通りなのか？――

戻ってカイン達サイド――

カイン達は先程からずっと黙っている。
だがその沈黙を破るサイレン音が急に廊下に鳴り響いた。

「何だ？うつせえな、耳が痛え」

「ほんと、鼓膜が破れそう…」

音量を間違えているのではないかと思うくらい大きな音だ。
そこでエリサはふと思い出した。

「リル大丈夫？あなた耳が良いんでしょう？」

そう、さっき会った時リルは自分で言っていたのだ。

「ふいまへん、無理れふ…止へれ」（すいません、無理です…止め
て〜）

「リルー！！！！」

リルはあまりの音量に目を回していた。
この音量を耐えるのはリルには不可能だったのだ。
だが少しすると、リルの願いが通じたのかサイレンが止まった。

「ふうー、助かりました」

「にしても、何だったんだ？」

『ようこそ、我がコーライ城へ』

「「「！」「」」」

サイレンが止まったかと思うと、今度はスピーカーから人の声が聞こえてきた。

ちなみに今度は普通の音量なのでリルにも大丈夫だった。

『早速だが、これよりこのコーライ城はカラクリ城へと変化する』

「コーライ城で…ネーミングセンス無さ過ぎ」

「「確かに」」

『ネーミングセンスについてはほっとけ！！』

こっちの声も聞こえるのか、と驚くカイン。

それに対してコーライは少々キレながらも説明を続けていく。

『まあ良い、では画面越しだが楽しく見させてもらおうぞ』

「？、何をだ？」

『カラクリ城化スタート！！』

「まだ話は終わって」

まだ話は終わってねえ！と続けようとしたがそれはやめた。
なぜかって？それは…

「なんだこの音？」

「ゴゴゴゴゴって音でしょ？私も聞こえるわ」

「だんだん近づいてきてますね…」

「いやな予感しかしねえんだけ——」

そこまで言ってカインは黙ってしまった。

何故なら音の原因が分かった気がしたからだ。

「おい、後ろに本気でダッシュしろ」

「何で？」

「いいから！」

カインの気迫に押されてかエリサとリルは走り出した。

「早く！！ダッシュだ、ダッシュ！！」

「ねえ何で？」

「それはな…」

「それは？」

カインはそこで一呼吸置いて続けた。

「壁が迫ってきてるからだよっ!!!」
「えっ!!!!」

そう言われて2人は後ろを振り返ってみた。
すると先程までは気付かなかったが確かに壁が迫ってきている。
しかも結構な速さで、だ。

「何でー!!!!!!」
「!、そこ曲がれ!!」

エリサとリルはカインの言うとおりに左に曲がった。
左に曲がったことで何とか助かった。
曲がっていなければかなりヤバかっただろう。

「はあ…はあ…そういえばカラクリが何とかって言ってたわね」
「今のがそのカラクリですかね？」
「だとしたらまだ大量にあるんじゃないかねえか？」

カインがそこまで言い終わると3人から冷や汗がダラダラ出てきた。
今みたいなのが…大量…？

「とりあえず気をつけながら進もう」

その案に残る2人が納得して、歩き始めた。
だが――

「うわあああああ！……！！！」

天井から槍が降ってきた。

「おい…この城どうなってるんだ…」

「変な所に金かけてるわね」

「ほんとですね…」

さつきからカラクリという名の罠にハマってばかりの3人。

例えば落とし穴があったり、壁に火炎放射器があったりと易しい物から下手したら死ぬんじゃないか？ってのまで色々あった。

まあ、生きてたから良かったが…。

「つーか、何でこんな広いんだよ！城に入ってから3話目なのにまだコーライに会えてすらねえじゃねえか！！」

「そんな事言うな！」

精神的にもかなりきついだろう。
だが、まだ終わってはいなかった。
目の前から人影が近づいてきている。

「おい、もうこのパターン飽きたよ」
「確かに…ワンパターンね…」

キーガシャン、キーガシャン
それは今までに聞いた事のないタイプの音だった。
何だ？とよく見てみると、近づいてきているのはロボットだった。

「コー…ライ？」
「なわけねえだろ、ロボットだぞ」

珍しくカインが突っ込んだ。
ボケたわけではないのだが突っ込まれたのはエリサだった。
こういうパターンもあるんだ。素直に感心するリル。

「にしても何だ？これ…」
「気をつけて、また罠かも…」

カインがロボットに触れようとした瞬間、突然ロボットが飛んで行った。

「ちよつ、待て！」

「いや、あんたが待て！」

エリサの注意も虚しくカインは飛んで行くロボットについて行ってしまった。

「待てー！ー！！！」

必死に呼びかけるがカインはまったく止まらない。
そのままついて行くと、カイン達は広い場所に出た。

「おっ！やっとな廊下じゃなくなつたぞ」
「ようやく来たか」

前から男の声が聞こえてきた。

カインは、今度は何？という感じで声のする方を見た。
そこに立っていたのは、スキンヘッドで左目の下に入れ墨を入れて
いて背中に剣を2本差している男だった。

「お前がコーライ？」
「ああ、そうだ！」

カインが面倒臭そうに聞くと、妙にテンションの高い男
コーライが返してきた。
その時カインは思った。

この声、どこかで聞いたことがあるような…。

「あつ、お前さっきのスピーカーの声の…」

「ああ、そうだ、なかなか面白かったぞ！」
「へえ、お前がなあ…」

言い終わると、カインは下を向いた。
少し肩が震えている。

「カインさん、大丈夫ですか？」

「心配しないで大丈夫よ、それに私もあいつにちょっとイラツとき
てるからカインにぶっ飛ばしてもらっわ」

はあ、とあまりよく分かっていない状態のリルはカインの方を見て
いた。

「テメ…だ…は…」

「何だつて？」

「テメエだけは…」

「？」

「ぜってえぶっ飛ばす……!!」

こうして戦いの火蓋は切って落とされた。

第5話 コーライ現る（後書き）

第5話どうでしたか？

いつもは短いんですが、今回は結構長かった気がします。

さて、この前紹介しきれなかった分の能力を紹介したいと思います。

【召喚輝獣】：召喚士

契約している輝獣（主に動物）を召喚する能力。輝獣1匹に1つの召喚用の道具が必要となる。

【破動】：破動――

輝流の能力を強化させたり、原流士ならば通常より強い能力が使えるようにさせることができる力。だが、破動の素質を持った者でないと、使う事が出来ない。

第6話 カインvsコーライ そして発動せしリルの能力

私は夢でも見てるの？リルは前に立っている青年を見て思った。
何故なら青年の手に――

炎が灯っていたからだ。

「てめえなんか…てめえなんか…」

「てめえなんか…何だつて？」

「1話で終わらせてやる！！」

畏のことについて怒っているのだろう。たぶん…

1話で終わらせる？…どうということだろ？

頭の上に疑問符が浮かびそうな表情の少女がぽつんと立っている。

「お前も輝流士か」

「お前もって事はあんたも輝流士なのか？盗賊団のボスさん」

「ああ、武具士だ」

背中に差していた双剣を構えて喋り出すコーライ。

「武具士？変形させれんのか？」

「そこまでは出来ねえよ」

「そりゃそうか、出来てりゃこんなことしてねえか」

（輝流士…？カインさんがホントに…？）

リルは困惑していた。

（じゃあエリサさんも…？）

下を俯いて、肩を震わせていた。

その様子に気づいたエリサが声をかけた。

「リル大丈夫？」

「輝流士…カインさんも…」

——も？

エリサは語尾が気になった。

だが、リルの異常な状態の方が気になったエリサはリルの近くに行った。

「どうしたの？リル」

「ほんとに？…ううあああ！！！！」

リルはしゃがみこんで叫び出した。

するとリルから野球ボールくらいの大きさの泡が7個出てきた。

エリサはそれに驚いて少し後ずさった。

「!!、リル!?」

カインは気になって後ろを振り返りどうしたのか尋ねようとしたが、リルの周りにある泡を見てやめた。

そしてカインは、リルの方に歩きだした。しかし――

ザシュッ!という音と共に背中に激痛が走った。

「敵に背中見せちゃ駄目だろ、若い侵入者君よ」

コーライはカインの背中を?字に切りつけていた。

「敵はこつちだぜ?」

「うるせえ……」

ギロツ――

カインは後ろでニヤニヤ笑っていたコーライを睨みつけた。

その気迫に圧おされてかコーライは後おずさった。

それを確認するより早くリルの方に歩き出した。

そしてリルの前に立つと、優しく話しかけた。

「どうしたんだ?」

「!!、うあああ!!!!」

リルが叫ぶと泡が一斉にカインに向かって飛んで行った。
そして泡がカインに当たった時、
パンツ!!という破裂した。

「ぐっ!!」

「カイン!!」

混乱しているリルは周りが見えておらず、さらに泡を生み出す。
そして当たって破裂する。

だがいくら当たってもカインは倒れなかった。

いくら破裂しようと、いくらボロボロになろうと決して倒れなかった。

それどころか逆にリルと同じ目線までしゃがみこんだ。

そして――

「安心しろ…大丈夫だ」

「…!!」

抱きしめた。

強すぎず、かといって弱すぎないくらいの加減だった。

「何があつたかは知らないけど、今此処には俺とエリサがいる」

「…カインさん」

「辛くなったら俺達が慰めてやる、傷ついたら俺達が守ってやる…」

「俺たちは仲間だからな」

その時、リルの目から1粒の雫が落ちた。

その雫は2粒、3粒と増えていき最後には滝のように流れた。

「ごめんなさい…ありがとうございます…」

（チャンスだ！死ねえ！！！）

コーライは動き出していた。

そしてカインの真後ろまで近付いてきていた。

「カインさん！！後ろ！！！」
「遅い！」

鋭い刃がカインに近づく。
しかし――

「なにっ！！ぐわああ！！！！」

カインの背中から炎が噴き出した。

「待つこともできねえのかクスが！！空気読め！！」
「はっ、知ったことではない！」

コーライは右腕をひどく火傷していた。

「そうかよ……」（やべえな……時間がねえ）

時間というのは最初のあたりを見てもらえば分かる。
カインがコーライに「1話で終わらせる」と言ったことについてだ。

「ちゃっちゃと終わらせてやる！」

だが、そうは言ったものの内心焦っていた。
何故なら先程の、泡での攻撃と背中への傷が痛むからだ。

血もかなり出ている。

（ちとまずいな…）

そんな事を考えているとコーライは切りかかってきた。
それを避けたつもりだったが少し左肩に掠ってしまった。

（あつぶねえ…あれ？）

掠っただけのはずが予想以上に傷が深かった。

（そついやあ、武具士だって言ってたな…）

そう、武具士というのは自分に会った武器を輝力で強化できるのだ。
つまりコーライは剣の切れ味を上げていたのだ。

「どうした？動きがとろくなってるぞ！！」

その後も少し掠っては血が飛び散りの連続だった。

先程からまだ1分ほどしか経っていない。
なのにカインの体は切り傷だらけになってしまった。
普段のカインなら全てかわせるだろうが…。

（やっぱり私のせいで…）

先程自分のしてしまったことを思い出し俯いてしまうリル。
それに気付いたのか、エリサが話しかける。

「安心してリル、あいつは負けないから…信じましょ！」
「…そう、ですね」

少し安心したのかリルは顔を上げた。

（とは言っ たものの… 大丈夫かな？）

今度はエリサが心配になる番だった。

「はあ…はあ…」

「さっきまでの威勢はどうした？」

「うつせえ…クソ…」（かなり強めにしたから時間掛かっちゃまった）

カインは何かの準備をしていたようだ。

そしてその準備が整ったようだ。

「そろそろ楽にしてやろう」

「いや…もう良いよ」

「何がだ？」

「俺がおまえを倒すから」

その言葉に少し反応を見せたコーライ。

「それじゃあ…やってみろやああ！！！」

そう言って双剣を構えなおし、突っ込んでくるコーライ。

これで勝負を決めるようだ。

だが、カインは両手の炎を大きくし低く構えた。

「燃え尽きろ…」

「？」

「灼熱の火炎によって！！！」

「狼炎烈衝撃！！！」

カインが両手を前に突き出すと、狼をかたどった炎がコーライを襲った。

「ぐわああああ！！！！！！」

コーライはそのまま吹き飛ばされ、壁に激突した。

「なんとか…間に合ったな…」

そのままカインは倒れそうになったが、誰かが支えてくれた。リルだった。

「お疲れさまでした」

「ああ…」

3人は完全に安心しきっていた。だがコーライからどす黒い靄^{もや}が出ていた。そう、まだ終わりではなかったのだった。

第6話 カインvsコーライ そして発動せしリルの能力（後書き）

第6話終わりました。

みなさんどうでしたか？

（カイン）「どうでしたか？じゃねえよ」

（雪龍）「なんで来てんの！？」

会話の場合は、上様になります。

（力）「何でって…暇だったからだよ」

（雪）「駄目でしょ！！てか何しに来たの！？」

（力）「次回予告に決まってるだろ」

（雪）「そなの？まあそれくらいなら良いや」

（力）「えーと次回はなんとあのおっさんの正体が明らかに！」

（雪）「おっ、良いじゃん！」

（力）「てことで今後もよろしく！」

（雪）「えっ、終わり！？」

第7話 新たな敵

最初に気づいたのはエリサだった。

気になったから…という理由で近づいてみた。

それに気づきカインとリルもそちらを見た。

そしてエリサがコーライの前まで来た時

ボゴォッ！

「かはっ！！！」

「エリサッ！」

エリサは何者かに腹を殴り飛ばされた。

飛ばされたエリサをカインがキャッチしコーライの方を見る。

すると中から左目の下にコーライと同じ入れ墨が入った白髪の男が現れた。

「誰だデメエ…」

「気になる力？」

クスクスと笑いながら歩み寄ってくる男。

だが次の瞬間――

「ヤナこった…教えてやんネエよ！」

「なっ！ぐあっ！！」（速え……！！）

瞬間移動でもしたのか？と錯覚してしまうスピードでカインの背後に迫りそして蹴りをくらわせた。

そしてそのまま吹き飛び壁に激突した。

「カインさん！！」

「カイン？そうか……お前がカインか……」

男はリルの言葉に何故か納得したようにそう言った。

（いってえ……）

「まあ良いヤ……もうチョット遊ぼうぜ！」

そう言うときまたカインに近づき蹴りを何発も喰らわせた。

やがて何の反応もしなくなったカイン。

「アレ？死んでねえヨナ？」

「うぐ……がはっ！」

男はカインの首を掴みそのまま持ち上げた。

一瞬苦しそうな反応を見せたがまたぐったりしてしまった。

「そんな…カインさんが…」

リルは先ほどとは違う感じの涙をこぼしている。

「チエツ！終わりかよ」

「影縫い！！」

突如誰かの声が響いた。

そして男の影から槍のようなものが何本か出てきた。

男は驚いてカインを落とす、その場をジャンプして離れた。
落ちた衝撃でカインは再び目を覚ました。

「まったく、良い雰囲気ハイランクゲルティアの少年少女の邪魔しちゃ駄目でしょ？」

「おっさん！？」

そう、声の主は先程城の前で出会ったおっさんだった。

そしておっさんはこの男について何か知っているらしい。

「こんな所であんたと会えるトハネ」

「俺を知ってるってことは、上級閻族？」

「ご明答、よく分かったナ」

「まあ、見りゃわかるんだけどね」（誰が封印を解いたんだ？）

知り合いなのだろうか…そんな考えを抱きつつ2人を見るカイン。

「あんたら閻族ゲルティアが出てきてるってどゆこと？」
「ちよつと待って！」

割って入ったのはエリサだった。
よく入っていく勇気があったなと感心してしまう。

「おっさんもだけど、急に出てきて何なの？閻族ゲルティアって何？ていうか
おっさは何者なの？」

そんな一遍に聞かれても…と少し考えているおっさん。
だが先に口を開いたのは男の方だった。

「閻族ゲルティアてのは俺達の種族のコトだヨ」
「嬢ちゃん、気をつけときなよ、こいつはその閻族ゲルティアの中でも10人
しかない上級閻族ハイランクゲルティアの1人だから」
「そゆコト、覚えトキナ、俺様の名前はグルーセルだ」

閻族ゲルティアというのは分かったがもう1つ、エリサには謎があった。

「で、おっさんは何者なの？」
「ん…言っても信じてもらえないだろうし…自分で言うのもなあ」
「？」
「じゃあ俺が言ってやんヨ」
「マジ？言ってくれんの？じゃあ頼むわ」

おっさんはそんなに自分で言いたくなかったのかとても安心してい

る。

エリサは男——グルーセルの言った事を聞き逃さないようにしっかりと耳を傾けた。

「こいつはナア」

グルーセルはわざとらしく溜めた。
その時間が妙に長く感じた。
実際長かったのもあるんだけど…。

「こいつの名前はレイウス、俺達から言っと”宿敵”、お前ら人間からすると”英雄”ダ」

「……はい？」

「ま、そゆコトなんだわ」

この胡散臭いおっさんが？英雄？
エリサは耳を疑った。かなり疑った。

「シャイニングソディアック大地を照らす13星座のリブラ天秤座なんて言われたっけ」

やっぱ信じられない…。

あのおっさんが英雄？大爆笑だわ。
案外失礼な事を思っているエリサ。

「つーかこんな所に何しに来たの？」

「探し物だったんだケド…召集命令掛かっちゃった」

「何？帰ってくれんの？」

「ヘッ！また今度遊んでくれヨ！」

そう言うところグルーセルは消えた。

「さて、少年大丈夫？」

「大丈夫に…見えるか？…」

「それもそうだな」

それを聞いておっさんは指を鳴らす。

すると何処からか白衣の男が出てきた。

丸いサングラスを掛けていて、鼻の下と顎に少し髭がある。

作者の勝手な印象だが中国にいそうである。

「紹介しよう！こいつは大地を照らす13星座の1人！蠍座のDr、

シャイニングソディアック

スコーピオ

ジェットだ！」

「おい…毎度のことながら面倒な所に呼んでんじゃねえぞ」

「まあまあ、怪我人治すのが仕事でしょ？」

「…まあ良い」

Dr、ジェット（以下ジェット）はカインの傍まで寄って詠唱を始めた。

「出でよ神秘の女神よ聖なる光で傷を癒せ」

「ゴッドスナース
女神の光」

部屋を光が埋め尽くし全員の傷を癒した。
と言ってもカインとエリサだけだが…。

「すごい…傷がみるみる治っていく…！」

「さて、治療も終わったし…帰るか」

「帰るって家何処にあるんだ？」

「いや、帰るっつーか今から行くんだけど…」

「何処に？」

レイウスは大きく息を吸って続けた。

「えっ？ああちよつと『アース』に用事があつてね」

レイウスがそう言った瞬間、カインとエリサの後ろに電撃が走ったように見えた。

きつと幻覚だろう。てゆうかそうであってくれ。
だが1人だけ何を言っているのか分からない。

「『アース』って何ですか？」

「あつ、えつと『アース』っていうのは…」

そんなに言いにくいことなのかな？
リルはそう思った。

「私達のセーブの名前よ…」

「？…そうなんですか…」（驚いてただけか…）
「ということであつたねえ」

そう言うとレイウスとジェットは消えるように去って行った。

「さて俺たちはゆっくりに帰るか」
「そうね……」

そうしてカインとエリサは本当にゆっくりに歩き出した。

お兄ちゃん、お義母さん私は元気だよ！
今日カインさんとエリサさんっていう優しい人達に出会ったんだ！

これから楽しくなりそうなんだ！
だから――

――見守ってね。

「どうしたんだー！置いてくぞー！」
「あっ、待ってくださいーい！」

此処はとある建物の会議室。

「何をしていた？遅かったじゃないか」

「悪かったナ」

グルーセルは誰かに話しかけられている。
既に7人集まっていた。

「俺が最後力、もう始まつテタ？」

「今からだよ〜ん」

「で、例のものは？」

「悪い、邪魔が入ってナ」

「邪魔？」

「ああ、シャイニングソディアック大地を照らす13星座ダ」

「！！！！」

その名前を聞いて全員妙に驚く。

「ほう、動き出したか」

「ンで、あとの位掛かんノ？」

「まだ、掛かる…その前に仲間達の封印を解かねば…」

誰も気づかない所で、不穏な影が動き出していた。

第7話 新たな敵（後書き）

第7話どうでしたか？

（エリサ）「いつもそれで始まるの？」

（雪龍）「今回はエリサ!？」

（エ）「カインが面白いから行ってみろって……」

（雪）「ここは遊び場じゃないんだけどな……」

（エ）「聞いてるわ！予告なら任せて！」

（雪）「では、どーぞ」

（エ）「お楽しみに〜!!」

（雪）「予告じゃないよそれ!!」

第8話 Welcome to our home

俺達は帰ってきた。

ゆっくり歩いて来たにしても近かったので2時間くらいしか掛からなかった。（余計な道草を食わなかったというのもあるが…）とにかく帰ってきたのだ。

俺の（居候だが）家に。

俺は玄関を開け開口一番に言った。

「ただいまー！」

「おかえりー！ー！！！」

「うぶっ！！！」

「ただいま」と言っただけなのにとてつもない威力の抱きつきという名の突進を見事にくらってしまった。

まあこんなことするのは1人しかないんだが…。

「ミラ、痛いんだけど…」

「だって遅かったから…すっごく心配だったんだよ？」

彼女の名前は天城^{あまぎ}ミラ。

黒い髪を彼女から見て左側で結んだいわゆるサイドテールという髪

型の少女。

そしてなにより一番重要(?)な事、それは…。

めちゃくちゃ「かわいい」のだ。

もう一度言っておこう。

めちゃくちゃかわいい。

100人が見たら95人ぐらいがかわいいというぐらいに。

「ちょっと離れてほしんだけど…」

「そんな事言わずに」

そう言つて頬を擦りつけてくるミラ。

だが俺の後方を見た瞬間彼女は固まった。

気になって俺も見してみたが、ただ少女が1人いるだけだった。
そう、リルだ。

「……………誰？」

「あつ、リル・コークレインと言います」

「ま、まさか…!!」

「？」

「恋敵!？」

いや違うぞ!!、俺はそう叫びたかった。

だがしなかった。今思えばなぜしなかったんだろう。

まあリルが否定するだろう…そう思っていた。
しかし――

「えっ！いや…あの…その…」
（何で俯くの！？しかも顔赤いぞ？）

カインはただ単に心配になった。
でも大丈夫かは聞かなかった。
こちらの方は言わなくて良かっただろう。

「たく…玄関で何いちやついてんのよ」

そう言いながら奥から出てきた女性…といっても年下だが。
彼女の名前はリリカ・ショーンズ。
栗色の髪の「かわいい」というより「綺麗」の方が似合う女性だ。

「いちゃついてなんかねえ」
「でもそうにしか見えないんだけど？」
「あつ、リーフ！」

リリカの後に来た青年。
彼の名前はリーフ・クリーク。
名前で分かる方もいるかもしれないがこいつは俺の弟だ。
だが髪の色は黄色で、顔以外はあまり似ていない。

少ししてリリカとリーフも気づいたようだ。
リルに、だ。

「おいカイン、その子は誰だ？」

リーフは俺の事を「兄さん」ではなく本名で呼ぶのだ。

「こいつはリルだ、今日からここで一緒に暮らすんだ！」
「「「は？」」「」」

驚くのも無理はない。

なんせ居候の分際で見ず知らずの子を連れてきて一緒に暮らすなど
と言い出したのだから。

（やっぱり断られるかな…）

リルはそんな事を考えていた。
しかし――

「私はリリカ・ショーンズよ、よろしくねリルちゃん！」

「俺はリーフ・クリークだ」

「私は天城ミラよ！」

皆案外すんなり受け入れた。
順応早すぎる。

「まあ、とりあえず入って」

リリカさんに家の案内をしてもらった。
ちなみに2階建てで結構広い。

そして最後に案内されたのは2階の手前から3番目部屋、それは――

「ここがあなたの部屋よ」

私の部屋となる場所だった。
シンプルで案外広い。

「じゃあ、後でリビングにおいで」

そう言っ
て彼女
は行っ
てしま
った。

10分ほどして私はリビングに降りて行った。
するとそこではリリカとミラが待っていた。

「おっ来たね、じゃあ始めますか」

（何が始めるんだろう?）

「第1回！リルちゃんに質問コーナー！！！」

こうして質問コーナーが半ば強引に始まった。
だが思っていたよりかは普通の質問だった。
その中から1部分だけ紹介しよう。

「年齢は？」

「16歳です」

「好きな食べ物？」

「うーん…シュークリームですかね」

「じゃあ嫌いなのは？」

「あまり無いですね」

などである。

在り来たりなものばかりであった。
だが最後の質問だけは違った。

「これで最後、あなた…輝流士？」

「…はい」

リルは急に俯いてしまった。

（あれ？…聞いたらずかつたかな？）

妙な重圧がのしかかった。

だが沈黙を破る救世主が現れた。

「晩飯できたぞー！」

もうそんな時間かと時計を見るともう7時だった。

「はい！今行くー！さっ、リルちゃんも行くっ」

そう言われて私はついて行った。
だが歩き始めてやっとなつた。

（そつえばカインさんが言いに来たような…）

そう、確かにカインが来た。

ということは、だ――

「これ全部カインさんが作ったんですか!？」
「おう、そうだぜ!」

ということである。
かなりたくさんあったが…。

「早く食べよ」
「それもそうだな、では」
「」「」「いただきます」「」「」

「いただきます」

パクッ

とても美味しい。
いつ以来だろう、こんな美味しい物を食べたのは。
そんなこんなで夕食の時間は終わっていくのだった。

ここはカインの自室

「んっ？メールだ…^{ボス}団長からじゃねえか」

送られてきていた内容はというと

《明日本部に来て。（リルちゃんと一緒に。）》

「まあ良いや、俺も言いたいことがあるし…リルに伝えに行くか」

そうしてカインは部屋を出た。

第8話 Welcome to our home(後書き)

どうも雪龍です。

第8話どうでしたか？

あんま関係ないんですけどサブタイトルの横に(改)ってめっちゃあるんですよ。

今後はこれの数をなるべく増やさないように頑張りたいと思います。

何で決意表明をしたかって？何故でしょうね。

まあ次回もお楽しみに。

…今回は誰も来なかった。…ふう。

第9話 新たな始まり

コケコッコー

外から鳥の鳴き声が聞こえてくる。

（もう朝か…）

まだ眠いのでカインは二度寝しようと思いを閉じた。
だが目を閉じる前に見てしまった。

というより見えなかったという方がおかしい。

何故なら――

「また潜り込んでやがる…」

そう、カインの横に少女が寝ていた。

寝る前は確かに誰もいなかった。

ということは寝ている間に入ってきたんだろう。

鍵はちゃんと閉めた筈だ。

だが少女の能力の前ではどんな鍵も意味を成さない。

その少女の正体は――

「ミラ…」

そう、ミラだ。

最近、といっても数ヶ月前からこんなことが3日に1回位の頻度であるのだ。

（起こさないようにこっそり出よ…）

カインはそろりと後ろに下がっていった。
しかし何かに当たった。

前言撤回、1人ではなかったです。

「リル!!?」

「……ん、はい…」

「何でいんの？」

「起こしに来たら…」

「寝ちゃったと…?」

「…はい」（寝顔に見惚れてました…）

リルは下を向いてしまった。

「まあ良いや、とっど行つてこようぜ」

「それって昨日言つてた…」

「『アース』だよ——」

カインとリルは準備を終えて今とある建物の前に来ていた。

「ここですか？」

「ああ入ろうぜ」

中に入っていくとカウンターに眼鏡を掛けた長い赤髪の女性がいた。
マンガを読んでいる。

「^{ボス}団長来たぞー」

「ん？ああ、カイン君！中に入っというて」

「あんたも来るんだよ」

「待って、これ読み終わったら…いだだだだだだ」

カインは女性を引っ張って奥に入っていった。
なのでリルもそれについて行った。

「じゃあ、自己紹介から、私はスウェル・マクシード、ここの団長ボスやってまーす」

「あつ、えーと私はリル・コークレインです」（女性が団長なんだ…）

スウェルは強引に連れてこられてマンガを没収されたのでふて腐れている。

「早速やけど私から任務出したいと思つとるんよ」

「もしかして…私にですか？」

「せや、天秤座リブラ…やのうてレイウスから新人が来るって聞いてたんやけど——」

「ちよつと良いか？」

スウェルはまだ続けようと思っていたらしく、話の腰を折られてまたふて腐れてしまった。

「おっさんはここに用事があるって言つてたんだけど、あんたもしかして…」

「さすがカイン君！察しが良いやん」

少し機嫌が直つたらしい。

リルはスウェルがいまいち分からなかった。

さらに何を言ってるかも分からなかった。

だが次の言葉でようやく分かった。

「せや、私は大地を照らす13星座ビスクスの魚座や」

「やっぱな」

これでカイン達は3人の大地を照らす13星座シャイニングソディアックに会ったことになる。

天秤座のレイウス

蠍座のDr. ジェット

そして魚座の我らが団長スウェル・マクシードだ。

「俺からはこんだけだ」

「じゃあ、続けるで…でリルちゃんはここに入るんか？」

「私は…」

リルはこの前カインを傷つけてしまった。

今後そういった事が起きないと言い切れない。

「この前の事なら気にすんなよ？」

「！！」

心の中を見られていたのかと思った。

カインはこういう面で妙な鋭さを発揮する。

「で、どないするんや？」

スウェルは頬杖をついて聞いてきた。

「…入ります、入りたいです！」

「よっしゃ！決まりや！という事でリルちゃんには決めてもらいたい事1つと守ってもらいたい事が2つあんなん」

「何ですか？」

「決めてもらいたい事は決め台詞や！」

「えっ？」

「まあ、それはとりあえず置いといて…」

リルは思わず声を上げてしまった。
ちなみにカインとエリサの決め台詞は既に出ています。

「で、守ってもらいたい事は、ってゆーても掟みたいなもんなんやけど」

「何ですか？」

「1つ目は仲間を大切にすること、それが守れれば喧嘩でもなんしてもええから」

確かにそれは重要である。

リルはもう1つはなんだろうと気になっていた。

「2つ目、こっちの方が重要や…」

スウエルは一呼吸置いて続けた。

「絶対に生きて帰ってくる事や！」

生きて帰ってくる――

それは簡単なようで意外と難しかったりする。

それだけ任務と言うのはいつも死と隣り合わせなのだとか。

「分かりました！！…で任務って何するんですか？」

「せや！言い忘れるとこやったわ」

「…まさか、あれか？」

「そう、そのまさかや」

リルはまたしても何の話をしているか分からない。
置いて行かれることが多いな、とつくづく思うリル。

「任務は決め台詞を決めてもらう事や」

「…そういえば何で決め台詞がいるんですか？」

何か重要な理由があるのだと思ったが…

「それは…あつたほうが格好エエからや」

案外どうでも良い理由だった。

「ほんでな、急に決める言うたって無理や思うねん、そこでや…」

「？」

「挨拶がてら、他のメンバーと一緒に任務行って参考にしてほしいねん」

「で、俺はその付き添いだと？」

「ピンポーン！当たりやカイン君」

そう言うとなかの紙をカインに渡した。

「そこに、一緒に行ってもらうメンバー書いといたから」

「あいよ、で話は終わり？」

「終わりやで」

「リル、ちよつと外で待っててくれるか？」

「？…はい」

リルはカウンターで待つことにした。

「ハイランクゲルティア上級閥族と戦ったんやって？どやった？」
「手も足も出なかったよ」

カインはすんなり答えた。

「久しぶりに会ってみよかな」

「誰に？」

「聖冠団の団長さんや」

「もしかして、そいつも…」

シャインングソディアック

「大地を照らす13星座や、確か…双子座ジミニやったかな」

「そうか…じゃあ、終わったしもう帰るわ」

「最後にカイン君、分かってると思うけど…」

「ああ、仲間がいる所じゃこれは外さねえよ」

そう言ってカインは首巻を指差した。

それを聞くとスウェルは安心してバイバイと言った。

「罪を犯した者には必ず罰が下る…か」

そう言つて立ち上がるスウエル。

「若い子に任せるのも良いけど、大人しか出来ひんこともあるからなあ…あと今度リルちゃんに力の使い方教えてあげなあかな」

カインとリルは家に帰って来ていた。

そしてカインはスウエルに渡された紙を見ていた。

「んで、最初は誰だ？…げ、こいつからかよ」

カインは最初に書かれている名前を見て溜め息をついた。

「レックス・セルベシア…」

第9話 新たな始まり（後書き）

第9話いかがでしたでしょうか

（スウエル）「ヤッホー」

（雪龍）「今回はスウエル!？」

（ス）「せやで、リルちゃんより先に来てもうたわ」

（雪）「まあ、良いんだけど」

（ス）「せやけど次回からはここ人物紹介になるから来れへんやん」

（雪）「…まあ、リルは当分出れないけども…」

（ス）「次回からはリルちゃん中心やもんな!」

（雪）「そう!次回からは『セーブ』『アース』編【です!」

（ス）「お楽しみにな〜」

第10話 不敵な大剣使い

私達の待ち合わせ場所は噴水のある広場だった。

「おつせえなあ」

「今日来る人ってどんな人なんですか？」

私は期待に胸を躍らせていた。

「そんな期待すんな、悪い奴じゃねえけど良い奴でもねえ」

「そんな事言うなんて、僕悲しいな」

「うわあっ！！」

後ろから急に話しかけられたのでかなり驚いた。

そこに立っていたのは、金髪で背中に大きな剣を背負った青年だった。

「おせえぞ、レッ君」

「レッ君？」

「そ、本名はレックス・セルベシア、皆レッ君って呼ぶから君もそう呼んでね」

あまり喋っていないからよく分からないが、第一印象は軽い人だった。とにかく軽い人だった。ただの印象だが…

「私はリル・コークレインです、よろしくお願いします」

「うん、よろしく！ところで…」

まだ続けるようだったので黙って聞いていた。
だがあんな事を言われるとは思わなかった。

「リルちゃんかわいいね！付き合って」

「えっ……！」

「おいおい……」

まさかの発言である。

生まれてから一番驚いたのではないだろうか。

「そんなことよりどんな任務なんだ？」

「えーと…山賊退治」

レッ君はすんなり切り返した。

本気ではなかったのだろうか？

ちなみに後で聞いた話だが『かわいい子にすぐに告白する』これは
レッ君の真骨頂らしい。

「じゃあ、さっさと行こうぜ」

こうして私達3人は山賊退治に出向くのだった。

「で、カインとはどうなの？」
「ひえっ!？」

レツ君が小さい声でこんな事を聞いてくるので、思わず声を上げてしまった。

「そ、そんな…何でもないで…す…」

「はっはっはっ！！リルちゃん面白いねえ」

完全にからかっている。

でも面白い人なんだろうと思った。

そう思わないとやっていける気がしなかった。

「まあ、こういう話題で僕からは逃げられないよ」

どうやらこの手の話は대가10個ほど付く位好きらしい。
というより、かなり敏感なんだろう。

だがここであの人が助けて(?)くれた。

「気をつけるよりル、そいつの言う事の半分はデタラメだから」

「はい…」

「ありゃ、元気がないね…どったの？」

「お前がなんかしたんだろ？」

「やだなあ、まだなんもしてないってば」

「まだってことはなんかするつもりだったんだろ」

「…カイン君鋭いねえ」

そんなやり取りを見て少し羨ましくなった。

(私にもこんな風に言い合える友達が出来るかな…)

「こんな所で…」

「おでまですか…」

カインとレッツ君の言葉に気になって周りを見ると、数十人のいかにも怪しい人達に囲まれていた。

「お前らが山賊さん？」

「そうだ！てめえら！！金目の物全部置いていけ！！」

「うわぁ…ふりいな、脅し文句が」

「なんだとガキ…！！なにもんだ？」

「てゆーか一個聞いて良い？」

山賊が質問をしてきたにも関わらず、お構いなしに手を上げて質問を質問で返すレッ君。

その質問の内容は…

「ココ山じゃないけど何で出てきたの？『山』賊でしょ？」

確かにここは山ではない。

というより平原と言ってもいいぐらいだ。

だが山賊は――

「山に人が来ねえからだよ」

（理由シヨボツ…！）

カインの感想は上記の通りです。

だがレッ君は…

「じゃあ、山賊なんてやめれば？」

（それ言っちゃうの！？）

とてつもない発言である。

なんて事を言ってるんだこの人は、と呆れるカイン。
だが山賊達の沸点はかなり低かった。

「おい、あんま調子乗ってると…痛い目見るぞ…!!」

その言葉が合図だったのかは知らないが、山賊達は一斉に武器を構えた。

それと同時にレッ君も背中から剣を抜く。

「リル、危ねえから下がってよーぜ」

「でも…レッ君が」

「大丈夫だよ、あいつは」

カインが後ろに下がるのでそれにつられてリルも後ろに下がる。
だがそれを見逃すわけもなく…

「死ねええ!!!」

1人の山賊がリルに斬りかかってきた。
だが刃はリルに届く事はなかった。

「女の子には優しくしないと駄目でしょ」

すると後ろからレッ君に斬りかかる奴がいた。
だがそいつの刃も届かず…

「一応やめれば？って聞いたからね」

「う、嘘だろ…」

全滅だった。

いや、1人残ってはいるが…

ちなみに誰一人として死んではない。

「レッ君の能力って…」

「レッ君の能力は魔錬具『破邪光神剣』はじやうくわんを使う武具士だ…」

カインはリルにかなり大雑把にレッ君の能力の説明をした。

「く、くそおおお！！！！！！」

残った一人はやけになってレッ君に向かって走り出した。

「薙ぎ倒す…」

「うおおおお！！！！！！」

「大いなる一太刀で!!」

「せんりんらんじん
旋麟乱刃」

空を切る一太刀は鋭い衝撃波となって敵を吹っ飛ばした。

「で、ボスはどいつ？」

「ここには…いねえよ…」

「どこにいんの？」

「山の麓の小屋だ…」

レッ君は山賊からボスの居場所を聞き出すと黙って歩きだした。それについていこうとしたリルだったが、カインに引き留められた。

「カインさん…？」

「ありがとうな、カイン君」

「別に…あとは頼んだ」

「ああ」

そう言うとレッ君はまた歩き出した。

そしてカイン達は逆方向に歩き出した。

「裏の顔はあんまり見せたくないからね…」

ドアの開く音がして、閉まる音がした。

誰か——山賊のボスらしき人物は奥に座っていた。

「おう、帰ったか…どうだっ——」

そこで山賊のボスらしき人者は喋るのをやめた。

「誰だ…てめえ」

「お前を殺す男だよ」

そこに立っていたのはレッツ君だった。
先程とは別人のようである。

「ほう…名前は？」

「教えても意味ねえんだよ…死ぬんだから」

「んだとゴラ…！！二度と生意気な口聞けねえようにしてやるよ！
！」

そう言うのと鞘から剣を抜きそれを構えてレッツ君に向かって走った。
だがレッツ君は剣を前に突き出した。

「魔錬具強化改造…！」

そう言うと同時に剣が光り出した。

そして光が収まる頃には剣は少し姿が変わっていた。

鍔^{つば}には羽のような装飾が施されており、刀身は10？ほど長くなり
刃が青くなっている。

「これがこの剣の本当の姿だ」

「お前輝流士だったのか…」

「だからどうした？」

「や、やめてくれ…死にたくない」

「駄目だ、頭さえ落とせばどんな獅子でも終わりだ」

レッ君は恐ろしい笑みを浮かべている。

「切り刻む…」

「頼む…許してくれ…」

「絶望の斬撃で」

「うわああああ！！！！！！」

そして辺りは血の海と化した。

「この姿を見られると女の子に嫌われるんだよね…」

レッ君は顔に付いた返り血を舐めた。

「もう良いや…帰ろう」

レッ君は暗闇の中に消えていった。

第10話 不敵な大剣使い（後書き）

さて予告通り人物紹介をしようと思います。
主人公からじゃないけど…良いですよ？

レックス・セルベシア

Reck s・Selbesia

【武具士：大剣／19歳／男／182？／68？／一人称：僕】
金髪で美顔の青年。語尾を伸ばして喋る事が多いため、かなり軽い印象を持たれる事が多い。人の恋話が大好き。

『破邪光神剣』という大剣を使い、さらに魔錬具強化改造が使える。
普段はおっとりとしているが、裏の顔という別人格を持っている。
裏の顔の状態になると普段の時とは真逆の冷徹で非情な性格になる。
愛称はレッ君。

決め台詞は『薙ぎ倒す、大いなる一太刀で』
裏の顔状態の時は『切り刻む、絶望の斬撃で』

第11話 齒には齒を 獣には獣を

『裏の顔はあんまり見せたくないからね…』

2日経った今でもレッツ君の言葉が耳から離れない。

誰にも聞こえないように言っただったがリルには聞こえていた。あの後彼は1人で山賊のボスの所に行ったようだった。

（大丈夫だったかな…）

「どした？リル」

「えっ！えーと…何でもないです」

カインは明らかに何かを隠していると分かっていたが、あえて聞かなかった。

「それはそうと今日来る人はどんな人なんですか？」

「今日のは…めんどい奴」

それだけ言つとカインは黙ってしまう。

今回の待ち合わせ場所は時計台の前だった。

リル達は10分ほど早く来たはずなのだが…

「兄貴ーーーー！！！！！！」

急に青年がカインの方に向かって突進してきた。

「うぜえ」

だがカインはそれを難なくかわした。

そのせいで青年はこけて、その勢いで時計台に顔面から激突した。

「毎回毎回その登場の仕方はなんとかなんねえの？」

「すいませんツス兄貴！！」

「で、いつからいたんだ？」

「30分前からツス！！」

「早えよ」

青年は起き上がりダッシュで戻ってきた。

青年は白髪でヘアバンドをしている。（某人気漫画の鎌に変身する少年とは全然違うのでご安心を）

その青年はカインの横に立っていたリルに気付き睨んだ。
それに気付いたのかカインは青年の頭を叩いた。

「怖がつてんだろーが！」

「すいませんツス…で、この子誰ツスカ？」

「こいつはリルだ、連絡いつてんだろ？」

「新しく入った子ツスね！」

「リル・コークレインです、よろしくお願いします」

「俺はイグルス・ルイゼンバーンだ！こちらこそよろしく！！」

一通り自己紹介が終わるとカインはイグルスに質問をした。

「で、任務は何？」

「はい、えーと——森の獣の暴走を止める事ッス」

「なるほど、な…そりゃ、お前に打ってつけだわな」

「それってどういう…」

「それは見てからのお楽しみ」

カインは勿体ぶって教えてくれなかった。
そしてさっさと行こうと歩き出した。

「あの… イグルスさん？」

「ん？何？」

リルはカインには聞こえないぐらいの声でイグルスに話しかけた。
笑顔で返してくれたので、少し安心してそのまま続ける事が出来た。

「あの… レッ君の事なんですけど」

イグルスはてつきり自分かカインの事で何か聞かれると思ったらしく、少し驚いていた。

「裏の顔ってどういう事ですか？」

リルは思い切って聞いてみた。

何故カインに聞かなかったのかというと昨日のやり取りからして何かを隠していると思ったからだ。
だが――

「さあ、知らねえよ？」

「えっ!？」

「そんな驚かれてもなあ、知らないもんは知らないし……」

まさか知らないとは思わなかった。
もしかしたらカインしか知らないのか？
新たな疑問がリルの中に出てしまった。

「おい、さっきから何考えてんの？」

「うわぁ!――」

「いや、そんな驚かなくても」

「すいません……」

カインはこれは参ったなという顔をしている。

「兄貴！駄目じゃないツスカ、女の子を困らせちゃ」
「うつせえ!……おっ、森が見えてきたじゃねえか」

確かに見えてきた。
あれが――

「リース・ベットの森ツス」

そんな名前はカインもリルも初耳だったがそれはほっという、リース・ベットの森に突入。

「ここの獣達はずっと暴れまわってたのか？」

カインはなんとなくこんな事を聞いた。

「いや、最近かららしいッスよ」

「だから、お灸を据えようと」

「そういう事ッス」

リルはだんだん森の薄暗さに怖くなってきた。
そんな時――

ガサガサッ――

「きゃあああ！――！！」

リルは物音でより怖さが増して、何かにしがみついた。
その何かというのが――

「どうしたリル？怖いのか？」

カインの腕だった。

リルは急に恥ずかしくなって、カインを突き放すように離れた。
だがカインは――

「…怖いならさっきのままでも別に良いぞ?」

「えっ!!!」

「兄貴大胆」

本当に大胆だ。

カインはレッ君とは違ってこういう話題には疎いのだろうか。
結局断れずリルはカインの腕にしがみついた。

「……………////」

「どしたリル、顔真っ赤だぞ?」

カインは少しニヤツと笑ってそう言った。

（カインさん…絶対わざとやってる）

「いちやついてたら来ましたよ、兄貴!」

「空気読んでほしいな」

そう言い終わると大量の狼のような獣達が前から近づいてきた。

「命知らずだな…」

そう言うとイグルスはポケットからブレスレットを取り出し腕にはめた。

すると、ブレスレットが光り出した。

「出でよ、水天の怪鳥ケプロトス！」

イグルスが叫ぶと光の中から青い大きな鳥が出てきた。

「殺すなよ、ケプロトス」

『分かりました……』

「喋った……！」

怪鳥——ケプロトスは女性のような綺麗な声を出した。

「イグルスは契約した召喚輝獣を呼び出し戦う召喚士だ」

カインが前回に引き続き大雑把に説明をした。

「行くぜ！ケプロトス……！」

「ふう、ありがとうよケプロトス」
「いえ、^{マスター}それでは主人」

ケプロトスは光に包まれ消えた。

「さて、後はボスを倒して終わりッス」

イグルスは倒れている獣達を踏まないように慎重に歩いて行った。
ちなみに獣達はケプロトスに全てやられた。

「あいつがこのボスらしいツスね」

「じゃ、ちゃっちゃんと頼むよイグルス君」

イグルスが歩いていく先には先程の獣が数段大きくなったような獣がいた。

「大丈夫でしょうか、イグルスさん」

「大丈夫だよ、まだ本気出してなかったし」

先程のでも本気ではないらしい。

ちなみに先程の獣達は手も足も出ていなかった。

「出でよ、獅子の帝王デレビスク！」

再びブレスレットが光り出しその光の中から獅子が出てきた。

「行け、デレビスク」

「グルアアア！！！」

獅子と獣が激突した。

力はほぼ互角だ。

「お楽しみはここからだぜ！」

「もう終わらせていいよ」

『まだ始まったばかりなのに…しょうがねえなあ』

デレビスクは少し愚痴った後もの凄い速さで獣に近づいた。
ちなみに言っていると始まって化で荷5分位は経っている。

「噛み砕け…」

『獅子王絶技…』

「獅子の牙で!!」

『獅子王飛驚碎牙衝!!』

デレビスクが獣に飛びついて噛み砕き、勝敗が決した。

「これで終わりッス」

「よーし、じゃあ帰ろうぜ」

そう言つてカインとイグルスは歩き出す。

だがリルは座ったままで立つどころか動く気配がない。

「何やつてんだリル、帰るぞー」

「すいません…立てないです」

どうやら腰が抜けたらしい。

今になつて恐怖が甦つてきたのだろう。

「しょうがねえなあ」

カインはリルの前まで行つて腰を下ろした。

「ほら、乗れ」

「えっ！！／＼／」

再びリルは顔を真っ赤にした。

このままだと日が暮れてしまうから、という理由でカインの背中に乗った。

カインの背中中は温かく一定のリズムで揺れるので――

「ありゃ、寝ちゃいましたね」

「そうだな」

カインは父親になったような気がした。

（まあ、一生縁は無いだろうけどな…）

カイン達はまだ昼間の道を歩いて行った。

第11話 齒には齒を 獣には獣を（後書き）

イグルス・ルイゼンバーン

I g l s . R u i z e n b u r n e

【召喚士／17歳／男／176?／65?】

白髪でヘアバンドをしている青年。

召喚士で現在怪鳥『ケプロトス』と獅子王『デレビスク』が出てきている。

語尾にッスを付けるのが口癖で、カインの事を兄貴と呼ぶ。

決め台詞は「噛み砕け、獅子の牙で」（デレビスクの時）

第12話 漆黒のヴァンパイア

リース・ベットの森に行ってから早2日。
今回も待ち合わせ場所まで歩いている。
今回の待ち合わせ場所とは――

「お迎えにあがりましたよー、お坊ちゃまー」

家だ。

しかもなかなかの豪邸だ。

（こんな豪華なお屋敷に住んでる人…どんな人なんだろう？）

玄関が開いた。

中から出てきたのは黒い帽子に黒いマントを羽織った青年だった。
歳はカインと同じぐらいだろう。

「すみません…わざわざ呼んでしまつて」

「良いよ別に、お前が陽の光に弱いってことぐらい知ってるし」

（あれ？ 案外優しいそうな人…）

何故リルがそう思ったのかというと、それは昨日――

「なあリル」

リルは夕食後の自由時間にリリカと話をしていると、カインに呼ばれた。

「はい、何ですか？」

「リルって怖いの手？」

「え！？…まあ、得意ではないですけど…」

「そうか…」

そう言い残すと自分の部屋に戻ってしまった。

「まさか…今度はあいつなのかしら…」

「知ってるんですか？」

リリカは少し顔が強張っている。

「多分だけど…そいつはかなり暴れん坊で1回暴れ出したらなかなか止まらない…」

そして最後にこう付け加えた。

「輝流を使いだしたらカインの後ろに隠れてた方が良くいわよ…」

———という事があつたからだ。
内心かなり怖かった。

「初めまして、リル・コークレインと言います」
「僕はリアン——むぐっ」

突如カインがリアンの口を塞いだ。

（下の名前は言わないでくれるか?…）
（…分かりました）
（サンキュー）

「どうしたんですか？」

「いや、世間話をちよつとな…」

これはちよつと無理かと思つたが案外納得してくれた。
もうちよつと疑つたらどうなのかと思う。

「それはそうとどんな任務なんだ？」

「えーと、最近小さい村に襲撃事件が多数発生してるんです」

「で、その調査に？」

「はい」

そんなこんなで私達3人は歩き出した。

「さて、着きましたよ、ここがフォルテギアの村です」

前回に引き続きそんな名前は初めて聞くが今回もそれは置いておこう。

「何でこの村って分かるんだ？」

「確かに…小さな村ならいくらでもありますよね」

「それはですね…これを見てください」

そう言っ出て出したのは地図だった。

5箇所！？印がしてある。

それを出すと説明を続けた。

「この？印は最近襲撃を受けた村の場所です…これを見て気付く事がありますか？というよりあってください」

リアンは誰にでも分かると言わんばかりの言い方で聞いてきた。

「これは…『血』か？」

「正解です」

「どういう事ですか？」

「お嬢さんには難しそうなので説明します…この？印を襲撃を受けた順番に繋げると、『血』という文字になるんです、で次の点はここになるかと」

最後まで聞いてようやく分かったリル。

皆さんも分かって頂けましたでしょうか。

「ちなみに、生きていた村の住人の方の話によると犯人は1人で…」

「1人で村を！？」

「ええ、さらに『ヴァンパイア』と名乗っていたそうです」

「ヴァンパイア！？…吸血鬼ですか？」

「まあ、そうですね（少し違うんですが…まあ良いか）

リアンは少し何かを考えるかのように俯いた。

「ようこそフォルテギアへ、わしはこの村の村長をしているグーライズといます」

「俺はカインだ、こっちはリアン、でそっちがリル」

一通り挨拶も終わったところで本題に入る。

「村の襲撃事件ご存知ですよね？」

「はい…まさかとは思うのじゃが…」

「そう、おそらく次はここが狙われるでしょう」

「それで来てくれたのですな？」

「はい、我々にお任せください…あとあまり外には出ないように住

民の方々に伝えてください」

「分かりました」

一通り伝えると村長はそれを住民に伝えるために歩き始めた。
だがカインの横に差し掛かった時――

（炎の子と闇の子…また会うときはお主にとって苦しい時であろうぞ）

（どういう事――）

「では失礼しますじゃ」

カインは村長を呼びとめようとしたが、もう歩いて行ってしまっていた。

ここは宿の一室――

「リル、さっきのじいさんの言葉聞こえてたか？」

「？、いいえ…何も」

「そうか…」（リルに聞こえていなかった…あのじいさん何者だ？）

カインが考え込んでいるとリアンが入ってきた。

「少し見てきましたけど何も異常はありませんでした」

「そうか」

「今は休んでおきましょうか」

そつして3人は少し眠ることにした。

だが――

「なんだか外が騒がしいですね」

「まさか！」

「でしようね」

「行くぞ！！」

案の定だった。

背の高い男の周りに何人かの住民が倒れていた。
誰もまだ死んではいないようだ。

「あなたがヴァンパイアですか？」

「いかにも、私はベルゲールと申します」

「ヴァンパイアは全滅したと聞いていますが」

「私はその生き残りです…さあ私に血をよこしなさい!!」

ベルゲールはリアンに走りかかってきた。

「やつぱりな…お前はヴァンパイアじゃねえ」

（急に口調が変わった？）

ベルゲールは懷からナイフでリアンを突き刺そうとした。

だが――

ブラッディシールド
「純血の盾」

「何!？」

突如リアンの腕から血が出てきて、それが固まり盾となりリアンを
守った。

「何ですか？あれ」

「リアン…フルネームはリアン＝ヴァンパイア、本物のヴァンパイ
アだ」

「えっ！？でもさつき全滅したって…」

「リアンは唯一の生き残りだよ」

カイン達の会話はベルゲールにも聞こえていた。

「な、お前…本物の…ヴァンパイアなのか？」

「ああそうだ」

リアンは先程までとは違い緑色の眼は赤くなり、牙が伸びている。

「出た…あれはヴァンパイアモードだ」

「ヴァンパイアモード？」

「あいつが能力を使う時あの状態になるんだ」

リアンは先程盾にした血を鎌の形に変えた。

「さつきお前は『血をよこせ』と言ったな」

「そ、それがどうした」

リアンはニヤツと口角を上げ続ける。

「ヴァンパイアは『血を吸う者』じゃねえ…」

ベルゲールは冷や汗を垂らしながらもそれがどうしたと威勢よく尋ねる。

「ヴァンパイアとは…『血を扱う者』の事だ」

ベルゲールは構えなおし、またリアンに襲いかかった。

ブラッディサイズ
「純血の大鎌」

リアンはベルゲールのナイフだけを器用に弾き飛ばした。

「畏怖せよ……」

リアンは血を鎌から大きなハンマーの形へと変えた。

「純血の裁きを」

リアンはハンマーを振りかぶり

ブラッディハンマー
「純血の大槌」

打ち倒した。

「本当に良いのですかな？」

「はい、我々はこのつを監獄にぶち込みに行かないといけないので、縄でぐるぐる巻きにされているベルゲールを指差し言った。

「では、さようなら」

「ありがとうございました、いつでもお越しください」

「では、僕はこいつを監獄にぶち込まないといけないんで
「そうか、じゃあな」

私達は帰り道の途中で別れた。
振り返ってリアンを見ると、漆黒のマントが翼のように見えた
とか。

第12話 漆黒のヴァンパイア（後書き）

リアン＝ヴァンパイア

L i a n＝V a m p i r e

【性質：血／18歳／男／172？／61？】

全滅したとされるヴァンパイアの生き残りの青年。

普段は丁寧な口調でおとなしい性格。しかしヴァンパイアモードになると性格が激変する。

実は結構な金持ち。

原流士で性質は血（ヴァンパイアは皆）。能力を使う時だけヴァンパイアモードになる。

決め台詞は「畏怖せよ、純血の裁きを」

第13話 軽いと重いは紙一重？

「えっ!？」

早速だが今回一緒に行くのはトルージュ・ニルシレスという女性。腰くらいまである長い桃色の髪が特徴。

別に何も変わった事はない。

だが待ち合わせ場所にはもう1人来ていた。

そっちの方にリルは驚いたのだ。

それは――

「レッ君!？」

「や、やあ…リルちゃんとカイン君」

そう、そこにいたのはレッ君ことレックス・セルベシアだった。どこか浮かないような顔をしている。

「今回はレッ君も一緒か？」

「うん…まあね」

「元気が無さそうですけどどうしたんですか？」

リルは首を傾げながら尋ねた。

だがレッ君は何でもないとはぐらかす。

そんな様子を見たカインが

「お嬢様を置いてこんなぺちゃくちゃお喋りして良いもんなのか？」

「はは、お嬢様ね…上手い事言うじゃんカイン君」

と少し楽しそうに言った。

それを聞いてレッツ君は苦笑して俯いてしまう。

これは重症だなと肩を竦めるカイン。

そんな気持ちを知ってか知らずか（おそらく知らない）トルージュはレッツ君に後ろから抱きついてこう言った。

「ちょっとレックス様しつかりしてくださいませ！婚約者として恥ずかしいですわ！」

「婚約者…！？」

「いや、違うからね…」

レッツ君が否定した事により少し不機嫌になってしまふトルージュ。

「ラブラブなのは分かったから早く行こうぜ」

「何処をどう見たらそう見えたのか教えてもらっていい？」

「で、今回は何するんだ？」

「無視しないでほしいな」

一行は任務の内容を聞きながら行ってしまう。

「僕の立場ってこんななの？」

レッツ君だけは置いて行かれかけたが。

「なるほどな、結構楽しそうじゃねえか」
「そうですか？私はちよつと…」
「まあトルージュがいればの話だけど」
「？」

一行が思い思いの感想を述べている今回の任務とは――

「まあ今までよりかはマシだろ、引越しの手伝いなんて」

そう、引越しの手伝いだ。

もっと細かく言うとな具を引越専門セーブ「クロネコomat」のトラックまで運ぶのを手伝ってほしいのだとか。

（あれ？この任務に僕って必要？）

1人自分の必要性に悩むレッ君でした。

一行は歩き始めて10分ほどで到着した。

何故こんなにも早く着いたのかというと、カイン達の住んでいる町と同じ町——つまり距離はそんなに無かったのだ。

「あなた方がお手伝いの方々ですね？今日はお願いします」

今回の依頼主は若い夫婦だった。

夫婦はカイン達を家の前で迎えてくれた。

「えーと、お手伝いというより全てするつもりで来たのです」

「えっ！！？」

てつきり皆で協力しながら——などと考えていたリルと若い夫婦は眼を見開いて驚いた。

「え…本当に全部任せていいのですか？」

はい、と涼しい顔をしながら頷くトルージュ。

「運んでもらいたいのはこの部屋と隣の部屋にある荷物全てです」
「任せてくださいな」

部屋へ連れていくと夫婦は行ってしまった。

「あのー…ほんとに4人だけでやるんですか？」
「そうですね？何か？」
「まあリル、トルージュに任せとけて」
「はあ…」

少しまだ不安なリルを全く気にせず、レッ君の方を向き

「私がんばりますわ！見ていてくださいね！」
「あ…うん、がんばってねトルっち」
「は、はい…！」

トルージュは少し頬を赤らめながら気合を入れる。
どうやら本人は本気でレッ君の妻になりたいと思っているのだろう。
トルージュは荷物に近寄り触る。すると荷物が光る。

「一体トルージュさんは何をしているんですか？」
「ん？ちよつとそれ持ってみ」

リルは言われるがままに荷物を持ってみた。

無理だと思っていたがかなり軽々と持てた。

「これがトルージュの能力だよ」

「中身を失くす能力ですか？」

「いや、近いけど違う、あいつは数少ない特異輝流士だ」

「特異輝流士？」

聞きなれない言葉だったので、オウム返しをしてしまった。

「シゼルディアスには、原流士や魔術師……とにかく色んな能力に分類されるんだけど特異輝流士はどれにも分類されない能力で――

――」

長い説明で目を回しそうなりル。

その様子を見てまだ半分位なんだけどと苦笑するカイン。

「それで、あいつの能力は改造^{リモデリング}、物質の重さ、質量それから形まで変えら……」

「ちよつとカイン……」

説明中に急に怒鳴られたので少し驚いて振り向くと、そこには怒りを露わにした表情のトルージュが立っていた。

「さっきから私の事をあいつ、あいつと呼んで！私の名前はあいつではありませんわ……」

「ああ……ごめん」（そんな事が……）

カインは内心安心した。

「まあまあトルっち、早く終わらせちゃおうよ」

「はい！レックス様！」

トルージュはニッコリと微笑み荷物を持っていくレック君について行った。

全部終わったのは30分後だった。

トルージュのおかげでかなり早く終わった。

「さっ、終わったし帰ろっか」

終わった途端レッツ君は元気になった。

「そう言えばトルージュさんの決め台詞を聞いてません」

リルにとってはそちらが本来の任務なので、それだけは聞いておかねばならなかった。

「私の決め台詞は『舞い踊れ、改造主リモデラーの名の元で』ですわ」

「決め台詞だけ言うのって恥ずかしいの？」

「恥ずかしかったですわ！ということでレックス様」

「はい？」

「これからデートしましょっ！」

（どういう理屈？）

トルージュはそんな事構いなしにレッツ君を引っ張ってどこかに行ってしまった。

ちなみに全く恥ずかしいという素振りは見せていなかった。

「あつ、聞きそびれた」

「何を？」

「えーと…」（この際だからカインさんに…!!）

リルは決心してカインに聞くことにした。

「レッ君の裏の顔ってどういう意味なんですか？」

聞けた。ついに聞けた。

あの時からずっと聞きたかった事が。

リルは黙ってカインの返答を待つ。

「…何でそれを知ってる？」

カインは静かに聞き返した。

「そっか…耳良いんだっとな」

そのあと思い出し納得してそのまま黙ってしまつ。
リルが何か言おうと口を開いた瞬間――

「俺もよくは知らねえんだ」

「……！」

「ただまあ、手を汚してでも何かをしなくちゃなんねえんだろーよ」

カインは最後にこう付け加えた。

「俺もだけどな…」

そう言つてカインは歩き出す。

その時2人の間を静かな風が吹いて行つた。

第13話 軽いと重いは紙一重？（後書き）

トルージュ・ニルシレス

Trouge・Nilcires

【特異輝流士：改造主/20歳/162?/45?】

腰まで届く長い桃色の髪の女性。

どこかの貴族のような上品な喋り方で語尾に「ですわ。をつけるのが口癖。

レッ君と何があつたのかはまだ分からないが、当人は婚約者だと思っ
っている。

決め台詞は「舞い踊れ、リモデラー改造主の名の元で」

番外編 勇気を胸にいざ行かん

「突然だけど明日はバレンタインよ!!」

ミラがリルとリリカを自分の部屋に呼んで言った。

確かに今日は2月13日だ。(この世界では)
ちなみに今日明日は休みだ。

「そうね…で？」

リリカはミラに尋ねる。

それを言うただけに部屋に呼んだのか気になったからだ。

「で？つて…バレンタインと言ったらチョコよ」

「…何が言いたいのか？」

リリカは正直面倒臭くなったので単刀直入に聞いた。
今思えば最初からそうすればよかったと思う。

「愛する人のためにチョコを作るのよ！」

「作ればいいじゃない」

「………」

「ど、どうしたのよ」

ただ普通のことを言ったはず。
なのにミラは俯いてしまった。

「…り…た…しえて…」

「なんだって？」

聞こえなかったのでもう一度聞いた。
だが――

「『作り方教えて』だそうです」

リルが代わりに言った。

耳が良いので聞こえていたらしい。

「なるほどね…私も作りたかったしやりますか！」
「ほんとに!？」

ミラは目を輝かせて確認する。

それに対しリリカはもちろんと返した。

「リルちゃんも作るでしょ？」

「えーと、はい！」

「誰に作るの？やっぱカイン？」

「えっ!…あ…えーと…」

ミラがいきなりスバリ当ててしまったので否定できなかった。

「リリカはリーフだね？」

「えっ…そ、そうよ！」

威勢よく言っているが顔は真っ赤である。

そのあと誰も聞いていないのにミラが自分でカインにあげると言い、
カインの良さについて話したそうとした。リリカが止めたが。

家のキッチン――

今は幸いカインとリーフは出かけている。

「さっ、作るわよ」

リリカが袖を捲り、準備を始めた。
作り方はチヨコを溶かし型にはめて冷やすだけだ。（よく分からないので適当です）
まずはチヨコを溶かす作業。
のはずが――

ボンッ！！！！

「きゃっ！！！」

爆発音がした。

何をしたら爆発なんてするのだろうか。
爆発したのはミラの所だ。

「何やったの？」

「ううゝ……もっかい！」

ミラは切り返しが早い方だった。
皆も無いと思うけど爆発には気をつけて！

「やっとここまで出来たわ…」

今型にはめる所まで出来た。
後は冷蔵庫で冷やすだけだ。
ここまでの所要時間ざっと1時間。
こんなに掛かるものなんですか？

「ふうー、後は待つだけですネ」

流石に冷蔵庫に入れるだけの作業はミラも失敗しなかった。
ちなみにリルは何故か上手だった。

日にちは変わって2月14日――

ただいま朝8時

キッチンには女3人組が集合していた。

「実はまだ作業が残っているわ」

「えっ!?!」

リルとミラの2人はあれで終わりではなかったのかと驚いている。
そう、まだ残っている事があるのだ。
それは――

「ラッピングよ!!!」

これは言ってしまうばかりに苦労するのではなからうか。
…多分だけど。

「やるわよ」

そう言ってリリカは3枚の包み紙と赤、青、黄色のリボンを出した。
そして黄色のリボンを取り、ラッピングを始めた。
見よう見まねでリルとミラもそれに続いた。

「完成!!」

そこには3つのチョコが入った包みがあった。
かなり苦勞していたが3人とも無事完成した。

「あとは渡すだけね」

3人は決心した。

「行くぞー!!」

「「おおー!!!」」

今更ながら美少女3人（自称）バレンタイン同盟結成。

最初はリリカの番――

リーフはいつのまにか出かけており10時くらいに帰ってきた。
しかもとんでもない量の袋を抱えて。

「来年からは外に出ない方が良いな……」

リーフはそう心に決めた。

（リーフ…今年もあんなに…）

どうやら毎年こんな感じらしい。

（あんなにあるのに私のなんか…いや！ここで行かなきゃ後悔する
…！）

そう思いリリカはリーフを呼びとめた。

「どうした？リリカ」

「えっと…あのー…」（勇気出さなきゃー!!）

深呼吸して手に持っていた包みを前に突き出し、

「こ、これ…」

「これって…チョコか？」

「そ、そつよ…いらなら良いけど…」

「いや、ありがとうリリカ」

リーフは優しく微笑み包みを受け取った。

—— ミッションクリア
リリカ任務完遂。

続いてはリルとミラの番――

カインは経った今起きてきた。
ただいまの時刻は11時30分だ。

「今日は家でゴロゴロするか…」（毎年とんでもないことになるかな…）

カインもリーフのようになってしまつらしい。
だがカインは学習していた。
この兄弟って…。

（来た…行くわよ！）
（はい！）

2人は一斉に動き出した。

「「あのカイン（さん）！！」」

カインは2人に同時に呼ばれたので何事かと思った。

「「これ……」」

2人とも息びったりだ。

同時に同じ事をし、同じ事を言った。

「ん？チヨコか？ありがとな！」

そう言ってリーフと同じように優しく微笑み受け取った。

——リルとミラもミッションクリア任務完遂。

こうして3人の恋する少女のバレンタインは終わった。

少し経って――

「おっ、リーフ」

カインはリーフを呼びとめた。
リーフはまさかカインまでと一瞬思ったがさすがに無いかと自分の
中で会議を開いた。

「何？」

「どうだった？ 外行っただろ？」

リーフは辛かった事を思い出してしまった。

「やっぱりか…」

「そういうお前はどうかんだよ」

「ん？俺はリルとミラに貰ったぞ」

最後にお前と違って外には行っていないと言うとリーフは黙って自分の部屋に戻っていった。

「ありゃ？勘ねちまったか？」

カインはリーフが歩いて行った方を見ながら苦笑した。

番外編 勇気を胸にいざ行かん（後書き）

初の番外編どうでしたか？

この世界には友チョコや義理チョコと言った物は無いという設定です。

…モテる奴反対！！！クソッ！！

（リーフ）「ふーん、モテないんだ」

（雪龍）「それがどうし…リーフ!?」

（リ）「遊びに来たぞ」

（雪）「だから遊び場じゃないんだってば、てかあんな量のチョコどうすんの？」

（リ）「食うに決まってるだろ」

（雪）「1人で？」

（リ）「ああ、俺もカインも甘いのは好きなんだな」

（雪）「あっそう…」（くそ、モテる奴なんて…）

（リ）「作者がこんなんで、終わりだ」

（雪）「ちよっ、勝手に終わりにするなっ！！」

第14話 償いの電撃

「人には人のやり方がある…自分なりのやり方を見つけろってことなんじゃねえの？」

リルの質問にそう答えたカイン。

どという質問かというと、この任務には他にも意味があるのではないかという事だった。

何故リルがそんな事を思ったのかは、この任務は別に他の人と一緒に行かなくとも問題は無いのではないかと感じたからだ。

「人には人のやり方…カインさんやり方ってどんなのなんですか？」

「俺？俺はなあ…」

カインは空を見上げ――

「守りたいものを守る、それを邪魔する奴は――」

そこで一度区切った。

そして――

「殺す――」

「今日一緒に行く人ってどんな人なんですか？」

リルは切り替えてカインに尋ねた。

カインもそれに対しいつも通り適当に答える。

「今日のは…俺はちよつと苦手かな」

「そうでしたか、それは残念ですねえ」

「きゃっ！！！！」

突然の後ろからの声に驚くリル。

そう言えばこの前もこんなことあったなあ、とかなんとか思う。

「げっ、聞いてやがったか、デルス」

「いえ、偶々聞こえてしまっただけですよ」

デルスと呼ばれるこの人は、黒いコートに身を包んだ紳士の様な雰囲気
の男性だった。

歳は20代後半くらいだろう。

「あの…初めまして！私はリル・コークレインです」

「おや、これはご丁寧に…私はデルス・エンバルザーと言います」

人にご丁寧にと言っておいてなんだが、デルスも中々丁寧な口調で
自己紹介をした。

「自己紹介も済んだ事だし、行きますか」

「そうですね、カイン君は私の事が苦手なようですしねえ、早く行
って早く終わらせましょう」

「その癪に障る言い方はどうにかなんねえの？」

「これは失礼しました」

そう言い、笑って先に行ってしまう。

それにカインとリルもついて行く。

「ほんとあいつは苦手だわ」

一行はとある研究所の前に来ていた。

「そろそろ何すんのか教えろよ」

デルスはここに来るまで任務について何も言わなかった。

「その前に2人は『人工輝流土製造計画』というのをご存知ですか？」

「んだそりゃ？」

カインは知る筈が無いと言わんばかりの返答をした。

「『人工輝流土製造計画』というのは名前通り人間の手で輝流土を造る計画の事です」

「なるほどな…それで？」

「その計画は被験者に大きすぎるリスクがあつたので中止されていたのですが、また始まっているという噂が流れてきましてね」

「それがここだと？」

はい、と頷くデルス。

「それよりさっきあんた噂がどうたら言ってたけど…」

「いえ、一応任務ですよ、ただ少し私情も入ってますがね」

カインは納得したようで、どうやって侵入するんだ？と聞く。
以前のような強行突破はしない。そう思っていたカインだったが――

「もちろんあなたの大好きな強行突破ですよ」

「好きではねえよ！！」（もちろんって…普段の俺ってどんなふう
に思われてんの？）

ちよっぴり不安になるカインだったとさ。

一行は今通路を歩いていた。

研究所内は明るく周りが見えないということは無かった。

「そう言えばさっき言ってた私情って何のことなんですか？」

リルは気になっていた事を聞いてみた。

その質問に対しデルスは真剣な表情で答えた。

「『人工輝流土製造計画』は私が始めたのです」
「！？」

リルは驚きで声が出なかった。

「じゃあ何で今その計画をぶっ壊そうとしてんだ？」

「…先程も言いましたがリスクが大きすぎたためですよ、私の場合嗅覚が無くなりました」

デルスは辛そうな顔をして続ける。

「自分の身体で実験を？」

「はい、ですが嗅覚なんてましな方でしたよ、視覚、聴覚、更には記憶や心を失う者まで出た」

「だから中止したのか」

一行に重い沈黙が押し掛かる。

「おや？誰か来ましたね」

「ヒャッハー！！グハハハハ！！！」

「な、何？」

「被験者ですね、恐らく理性を失っている」

男は叫びながらこちらに突っ込んできて、おかしくなったように腕

を振り回す。

「失敗作か？」

「死ねッ！！ヒヤハハハハ！！！」

「いつその事安らかに眠ってもらいましょう」

そう言うのとデルスは手を前に構える。

するとデルスの手からバチッという音と共に電気が出てきた。

サンダーランス
「電撃の槍！！」

手から出てきた電気を槍の形に変える。

「すごい……」

「デルス・エンバルザー、あいつは電気を自由自在に操れる」

カインはいつも通り簡単に説明を終わらせる。

「説明が終わったようなので行かせてもらいましょう」

「逝く？ヒヤハハハ！！！！テメエだけで逝きナァ！！」

デルスはそんな言葉を無視して武器を構え男に突っ込んでいく。

とわ
「永久に眠れ」

「償いの電撃で！！」

「サンダーストライク電撃の槍乱舞！！！！」

デルスの電撃により男は絶命した。

「また被害者が出てしまった…急ぎましょっ」

「皆さん！！動かないでください！」

一行は研究室まで来た。

そこには10人ほどの研究員たちが何かの装置——恐らく輝流士を造るための装置——の中に入っている男を見ていた。

「なんだ！お前達は！！！」

「それ以上喋らないでください、私は今かなり機嫌が悪い、それとも——」

デルスは手から電気を出し——

「ここで死にたいですか？」

と言った。

ゴミを見るような眼で。

それに恐れをなした研究員たちは大人しく拘束された。

一行と研究員たちは外に出た。

そしてカインの炎で研究所ごと燃やした。

「では私はこれで、この屑共を二度とあんな事が出来ないようにして差し上げないといけませんから」

デルスは丁寧な口調ながらもそう言った。

「そっか、じゃあまたな」

「はい、さようなら」

こうして私達は別れた。

「さて、どうしてほしいですか？」

振り返りそんな事を言ったんだとか。

「あの人達、どうなるんでしょうか」

「さあ、デルスの事だから何でもしそつだな」

2人は夕焼けの中を帰っていった。

第14話 償いの電撃（後書き）

デルス・エンバルザー

D e l s ・ E m b a l z e r

【性質：電撃／27歳／男／185？／70？】

丁寧な口調の紳士の様な男性。

『人工輝流士製造計画』を始めた人物。だが、リスクの大きさに危機を感じ計画を中止した。尚自ら被験者となり、輝流を手に入れた代わりに、嗅覚を失った。

常に冷静で滅多なことでは感情を露わにしない。

決め台詞は「永久とわに眠れ、償いの電撃で」

第15話 静かなる音 前編（前書き）

一部削除兼変更しました。

第15話 静かなる音 前編

「今回はいつもとちよつと違って人探しや」

スウェルは突然そう言った。

それは待ち合わせ場所に行った時の事。

何故か待ち合わせ場所には、スウェルがいたのだ。

「何であんたがここに？」

「今回探してもらうんは『アース』の二大不可視輝流士の一人なんや」

スウェルはカインを当然のように無視した。

二大不可視輝流士と言うとかつこよく聞こえるが、ただ単に神出鬼没なだけらしい。

「そこでそいつを探してもらいたいんや」

「なるほどな、でも何処にいるんだ？まさかとは思うが世界中探し回れとか言わねえよな」

確かに世界中探せというのは無理だ。

そんな事一生かけても無理だ。

「そんな事は言わへんよ、大体の居場所は分かつとる」

「何処なんですか？」

「今はグリマキスつちゆう街におる」

「何でそんな事分かるんだ？」

「GPS！」

元気よくそう言った。

というより分かっていながら自分で行けばいいのではないのか？
そう聞くと

「メンドイもん」

だそうだ。

適當すぎる。こんなのでよく**団長**^{ボス}としてやっていけたものだ。

「まあ行ってくるわ」

「頼んだでー」

そう言つて手を振るスウェルに背を向け私達はグリマキスに向かった。

「そろそろどんな感じの奴か言っところかな」

今私達はグリマキスまで後少しというところまで来ている。

「まだ街に着いてませんよ？」

そう、後少しというところまで来てはいるが、まだ街には着いてはいない。

「今回探す奴はとてつもなく耳が良いんだよ」

「とてつもなく？」

「ああ、街に入っちまったら聞こえちまうかもしれないからな」

「そんなにですか？」

とてつもないにも程があるのではないだろうかと思わせるくらい耳が良いらしい。

それこそリルよりも。

「ごめん、流石に言いすぎたわ」

流石に嘘だったらしい。

「それでどんな人なんですか？」

「えーと、赤髪でヘッドホンしてる奴」

「いつもヘッドホンしてるんですか？」

「ああ、なんでも聞こえすぎて嫌だからとか言ってたな」

だいぶ大まかに言ったがそれだけで大丈夫なのだろうか。

2人はグリマキスに着いた。

「ここからは手分けして探そうと思う」

「でもそれじゃあ見つかったとしても今度は私達が会えなくなるんじゃないですか？」

グリマキスはあまり大きくない街だ。

だからと言っても簡単に会えるほどの大きさではない。

「それは大丈夫だ」

そう言つてカインはポケットから何かの機械を取り出す。

「これは通信機だ」

「通信機？」

「このボタンを押すと俺の方に居場所が送信される、俺からリルにもできる」

カインは通信機をリルに渡した。

「じゃあ、俺はあっち行くわ」

カインはじゃあなと言って向こうの方に行ってしまった。
それを見送ってリルもカインとは逆の方に歩き出す。

「「あ、名前言う（聞く）の忘れた」」

2人は同時に思い出した。
だが時はすでに遅かった。
こんなので大丈夫なのやら。

——カインサイド——

「赤髪のヘッドホンした奴知らねえか？」

「知らないぞ」

「そうか、ありがとな」

さつきからこの連続だ。

恐らく30回ほどこんな事をしている。

そしてまた——

「赤髪のヘッドホンした奴（以下略）」

「知らないぞ」

「そうか、ありがとな」

やはり知らなかった。

（ああ、だりいなあ……）

こんなので見つかるのだろうか。

「すいません、赤髪でヘッドホンをした人見ませんでしたか？」

「ああ、それならあつちいたよ」

「ホントですか！ありがとうございます！！」

いきなりビンゴだった。

やはりカインとは日頃の行いに…これ以上は自粛します。

「これなら見つかるのも早いかもっ」

そう言い、リルは走り出した。

リルは今路地裏に来ていた。

「あれ？ここ何処だろう」

ここに来るのは初めてなので迷子になっていた。
周りをキョロキョロと見ながら歩いていると誰かにぶつかってしまった。

「あつ、すいません」

「すいません？そんなもんじゃすまねえなあ！」

結構在り来たりなパターンだ。

「慰謝料払ってもらおうかあ、ざっと3000万^{キヨール}で勘弁してやるわ！ー！」

^{キヨール}Cというのはこの世界でのお金の単位である。
1円＝1^{キヨール}Cと認めてもらいたい。

つまり3千万円よこせと言っているのだ。

「そ、そんなに持ってません!!」

「それなら身体で払ってもらおうか、嬢ちゃん結構な上玉だしなあ」
「ええ!!!」

男は下卑た笑いを浮かべながらリルの腕を掴む。

リルも必死に抵抗するが大人の男の力に勝てるはずもなくつかれて行かれそうになる。

「やめてください!!」

「やめろって言われてやめたりしねえぜ」

そのままつかれて行かれると思っていたが男は急に立ち止まる。

「女の子苛めて楽しいのか？」

「ああん？誰だ兄ちゃん」

男の前に立っていたのは赤い髪でヘッドホンをしている青年だった。

「オレの事探してるっばいからついてきてみたらこんな事になるなんてな…君運悪いな」

「まさか、あなたが…」

「なんだ？知り合いか？」

どうやら一部始終を見ていたらしい。

「兄ちゃんが3000万キヨール払ってくれるんならこの子を返してあげても良いぜ？」

「そんなに持つてねえよ」

青年は左足を上げ、それを下ろした瞬間に男の懐に入り込み殴って気絶させた。

あまりに早すぎたのでリルには見えなかった。

「オレに用があるっばいけど何？」

「え、えーと……」

「こんな所にいたのか、スラン」

いつの間にかいたカインが青年——スランに話しかけていた。

「なるほど、カインが探してたのか」

スランは納得し腕を組み壁にもたれかかる。

「いい加減帰って来いってどこか？」

「そんなとこだな、一緒に来てもらっぜ？」

「まあ良いけどな、1つ条件がある」

そう言うのと組んでいた腕を離しリルの方を指差した。

「その子が新入りだろ？」

「そうだけど？」

「じゃあ、その子がオレの能力を当てれば帰ってやる」

こんな事を言いだした。

「ただまあ、ヒントはやる」

そう言うとりルに向けていた指を上に向けた。

「1つ、耳が良い事」

そして指をもう一本立てて続ける。

「2つ、さっきの高速移動、以上」

「それだけじゃ無理だろ」

「す、すいません……」

「リルが謝る事じゃねえよ」

リルが本当に申し訳なさそうに謝る。

「リル？そつか君が…」

スランは何かを考え込むように下を向いた。
そして――

「まあいいや、メンドイしさつさと帰るわ」

そう言つとスランは消えた。

実際には消えたように見えるスピードで去って行ったただけなのだが。

「……気まぐれな奴」

「まあ良いじゃないですか、私達も帰りませんか？」

リルがそう言い歩き出したのでカインもそれについて行く。

ここはスウエルの部屋（アース本部）

「帰ったぞ」

「帰ったぞやないわ！！何しとってん！」

スウェルはスランに怒鳴りつけた。
だがそんな事は気にせずスランは続ける。

「さっきカインと新入りに会った」

「…どやった？」

「別に…ただあの子…」

「やっぱ気付いたか」

一呼吸置いてスウェルは続けた。

「てゆーか、今度またあの子らと一緒に任務行つてきてくれるか？」

第15話 静かなる音 前編（後書き）

（スラン）「おい」

（雪龍）「何？今回はスラン？」

（ス）「オレもしかして次回も出るのか？」

（雪）「でしょうね、前編ってぐらいだもん」

（ス）「あっそ、じゃあな」

（雪）「えっ？もう終わり？…帰りやがった…」

第16話 静かなる音 後編

「またお前かよ…」

カインとリルは待ち合わせ場所まで来た。
そこでのカインの一言がこれだ。

ちなみにそこにいたのは、お気づきの方もいるだろうがスランだ。

「オレだつてメンドイし行きたくはねーよ」

「おいおい…」

「ただ最近金欠ぎみで参つてんだよ」

「サボリまくってるからだろーが」

カイン曰くスランは生粋のサボリ魔らしい。
だがこのセーブに解雇は無いんだとか。

「とりあえず知ってるかもしれないけど、オレはスラン・フォン・フォニムだ」

「よろしくお願いします」

「ん、よろしく」

一通り形だけの自己紹介を終えた一行は、スランがとりあえず歩きながら説明を言ったので今回の目的地に向かう事にした。

「そろそろ良いか」

そう言い振り返るスラン。

「これから行く所にはゲルティア闇族が絡んでる可能性がある」
「！！！！」

ゲルティア
闇族という言葉に驚くカインとリル。

ゲルティア
闇族とは、以前カイン達がコーライ城に潜入した時に会ったとてもなく強い種族の事だ。

「ちょっと待て！何でお前が闇族の事を知ってたんだ！？」

「…5年前、『第一次闇転戦争』ってのがあった」

スランは遠くを見ながら呟くように続ける。

「それは輝流士と闇族の戦争だった。その時に世界から集まった輝流士の中で最も強かった13人を大地を照らす13星座と呼んだ」
ゲルティア
シャイニングソディアック

「そんな話聞いたことねえぞ」

「世間には発表してない。いわば抹消された記録ってやつだ」
ロストケース

「そんな事が…」

カインは信じられないようにスランの方を見る。
だがスランはそれに気付かず、そのまま続ける。

「そしてその戦争にオレも参加してた」

「なるほどな…だから闇族を知ってたのか…でも何で闇族がいるってわかるんだ？」
ゲルティア

「闇族の紋章があったんだよ」

そう言つて1枚の写真を出した。

そこには黒い髑髏を模した模様が描いてある壁があった。

「これが…でも大丈夫なのか？この前のは手も足も出なかったぞ？」

「それはお前が破動の力を使わなかったからだ」

「破動…？」

リルは何の事だかさっぱりだが、カインは苦笑し、あっそと言う。

「まあ、ハイランクゲルディア上級闇族なら仕方ないけどな」

そう言いうとまた前を向いて歩きだす。

一行はとある村に来ていた。

だが――

「なんだこりゃ……」

カイン達の前に広がる景色は火の海だった。

「燃えてるってことは襲撃されて時間はあまりたってない」

「まだいるかもしれねえな」

「それより人はいないんですかね……」

周りを見回してリルは人を探そうと言った。

前回の様な事があるといけないので、スラン１人とカイン、リルの
２人に分かれて探すことにした。

何故スラン１人なのかというと

「１人で十分だ」

と言ったからだ。

——スランサイド——

「…人の呼吸や心音が聞こえてこない」

彼は今ヘッドホンを外している。

「もしかして、ここの奴らもう…」

誰一人いないのではないのか？——

スランはマイナスなイメージしか浮かんでこない。

するとどこから叫び声が聞こえてきた。

「今のは…あの子か？」

スランは急いで叫び声がする方に向かった。

——時は少し遡ってカイン&リルサイド——

「全然見当たりませんね…」

「もしかすると——」

カインが思っていた事を言いかけると前に人影が現れた。

「大丈夫ですか!」

リルが人影に向かって走っていく。

「待てっ!!リルッ!!」

「えっ?」

リルが振り返ると突然視界が上にあがった。
どうやら首を掴まれているらしい。

「おい、リルを離せ!!」

「キシヤシャシャ!!ヤダネーだ!」

そう言っ腕の力を強める男。

「うぐっ!うああああ!!」

「てめええ!!」

「おおっと、それ以上近づくなよ…首へし折っちまいそうだぜ」

そう言つて更に腕の力を強める。
だがいつのまにか手の中からリルの姿は消えていた。

「あ、ありがとうございます。スランさん」
「誰だデメエはっ！！！」

スランに気付いた男は怒り叫ぶ。

「誰つて、聞いてなかったの？今この子が言つたろ？」

「……！、お前は……」

「やっぱ知ってんじゃねえか。中級閻族か？」
ミドルランクゲルテイア

男は頷く。

それを見てリルの前に立つスラン。

「じゃあ逃げないで大丈夫か」

「ほう、俺とやるのか？」

「安心しろ——」

スランは一度眼を閉じ一呼吸置いて続けた。

「生きて帰しはしねえよ」

スランは手を前に出す。

「音導弾——円舞曲」
ソニック
ワルツ

スランの手から無数の音の衝撃波が出て男に襲いかかる。

だが男はそれを避け、手に闇の塊を造り放つ。

「闇の連皇弾！！」
ダークショット
ソニック

「音導弾——回旋曲」
ロンド

闇と音の衝撃波がぶつかって相殺される。

スランはその隙に男の正面まで高速で移動し

ノイズカッター
「音響裂断」

「ぐはっ！！」

手刀で斬りつけた。

「なっ、ただの手で何故ここまで斬れる……」

「オレは音を操る……つまり振動を手に纏っていたんだよ」

それで納得したのか男は手に黒い靄を集めた。

「死ねッ！！闇の緋皇弾！！」
ダークキャノン

闇の塊がスランを襲う。

だがスランに当たる前にそれは消えてしまう。

「な、何故消えた！！」

「空気を振動させて中和させたんだよ」

スランは男に近寄っていく。

「さて、そろそろ終わりにしてやる。破動の力でな」
「くそがっ！！！！」

男は先ほどよりも大きい闇の塊を造り出す。

「死ねええ！！！！ダークイクスプロード闇の冥王漸弾オオ！！！！」
デス・ララバイ
「永遠の摇篮歌」

音の衝撃弾が闇の塊を呑み込みそのまま男に向かって飛んで行く。

「奏でろ……」

「ちくしょおお！！！！！！！！」

「至高の旋律を」

「ま、さか…破動、輝流士だった…なんてな…」

男は途中荒い呼吸をしながら喋り続ける。
すると男の身体が黒くなっていく。

「あれがゲルティア闇族の末路だ」

「はっ、ベイルゲード様の、復活も…近い」
ゲルシダス
「なっ、闇王が!？」

そこまで言つと男は消えてしまった。

「…報告しないといけない事ができた」

そう言つとカイン達の返答も聞かずにスランは先に帰つた。

「スランさんすごかったですね」

「あ、ああ」(あいつがあそこまで取り乱すなんてな…)

その後カイン達が村人探しを続けたが誰一人見つからなかった。

ここは『アース』本部兼スウェルの部屋――

「おい、やばいことになってきてる!」

「なんやなんや、騒がしいなあ」

スランは荒い呼吸を整え、今日あった事を話した。

「そうか……ゲルジダス闇王が……」

「また戦争になるかもしれないな」

「そうなる前に止めへんとな」

そう言うつとスウェルは紙を取り出し何かを書き始めた。
やがて書き終わるとそれを机の端に置いた。

「それは?」

「シャイニングソディアック大地を照らす13星座への召集状や。あつ、もう帰ってもええで」

スランは何も言わずに出て行った。

「……ちゃんと全員来るやろか」

そう言うつと紙を持って外に出ていく。

「まずは獅子座レオからやな」

第16話 静かなる音 後編（後書き）

スラン・フォン・フォニム

Sl an・F one・Ph one m

【性質：音（破動輝流士）/ 22歳/ 男/ 181? / 68?】
赤髪で常にヘッドホンをしている青年。

『アース』の二大不可視輝流士の一人。（単に神出鬼没なだけに無表情で何を考えているのか分からない時がある。

そしてデルスと同じで常に冷静で、あまり感情を表に出さない。

ちなこにカイン曰く「生粋のサボリ魔」

5年前にあった「第一次闇転戦争」にも行っていて、その頃にスウエルと知り合った。

決め台詞は「奏でろ、至高の旋律を」

番外編 避けては通れない道（前書き）

『勇気を胸にいざ行かん』の後日談です。

番外編 避けては通れない道

今日は2月20日。

カイン達は日頃任務で出掛けているが今日は休みだ。

そんなある日の昼前、カインは部屋でゴロゴロしていた。するとノックの音が聞こえて来て

「すみませんカインさん、入っていいですか？」

「ああ、良いぜ」

この声はカインが行った任務先で出会った少女——リル・コークレインだ。

リルは、はいと返事をしてから部屋に入ってきた。

近づいてきて、目の前まで来たら正座をした。

そして――

「カインさん、一緒にお出掛けしませんか？」

何かと思えばそんな事かと心の奥深くで安心したカイン。

「そうだな…暇だし、行くか！」

一応本当に今日は暇だったか頭の中だけで考え、答えを出した。結局暇だったのだが…。

それを聞くとリルは、

「あ、ありがとうございます！！では準備してくるので待っていて下さいね！」

と言って、急いで部屋を飛び出した。

「あそこまで急がなくてもな…」

そう呟くとカインも自分の準備を始めた。

一階では上の階でドタドタと走る足音が響いていた。

「どうやら上手くいったみたいね」

リリカは少し微笑んだ。

（私もリーフを誘ってみよっかな…）

考えるよりもすぐに行動に移しがちなリリカはリーフの部屋に歩いて行った。

その後、2人が顔を赤くしながら並んで歩いていたのを、見た者は少なくなかったとか。

カインとリルは特に行くあてもなくただただ歩いていた。

「たまにはこういうのも良いもんだな」
「はい！」

元気良く答えるリルに、カインは微笑みながら頭を撫でる。
そうするとリルは、顔を赤くして驚いた表情になる。

周りからは、仲良し兄妹にしか見えなかったとか。

「あつ、カインさん!？」

突然前から来た女の人が驚いたようにカインの名を呼ぶと、走って来た道を帰って行った。

「え、えーと…誰ですか？」

「…覚えがねえな。誰だっけ？」

「ええっ!!!!」

まさか自分がした質問をそのまま言うとは思っていなかったのだから驚く。

「しかし珍しいな。俺の事をさん付けで呼ぶなんて」

「はあ…」（私も普段さん付けなんですけどね…）

心の中で溜め息をつくりルだった。

2人は今とある喫茶店に来ていた。

「リルは何かしたい事ある？」

「私ですか？私は…」

リルは考える。かなり考える。必死に考える。滅茶苦茶考える。ちなみにカインはメロンソーダ、リルはホットケーキを頼んだ。

「…無いなら無理しなくて良いんだぞ？」

「すいません…」

見ていられなくなったのかカインはリルの思考を止めた。

「別に謝る事じゃねえよ」

「はい…」

カインは苦笑しながら言うが、リルはまだ申し訳なさそうに言う。

「とりあえず買物でも行ってみるか」

「…はい!」

今度はとあるデパートに来ていた。

「んゝ…何か欲しい物ある？」

「えっと…本が…」

「本か。じゃ本屋行こうぜ！」

カインはリルの手を取って歩き出す。

「え…カインさん？これは…」

「ん？迷子になったら大変だろ？」

そう言つてニツコリと微笑むカイン。

そのまま2人は手を繋いだまま本屋に向かう事にした。

「そう言えばどんな本が欲しいんだ？」

「『一文無しの亀が旅立つ』という本です」

「そ、そうか」

本当に面白いのか謎なのだがリルが良いと思うなら良いのだろう。
それは置いて本屋に着いた所からまたスタートする。

「こつちです！」

カインは引っ張られるがままに進む。

「あつ、あのっ！」

またもや突然女の人に話しかけられた。
しかも今度は結構人数がいる。
手には何かの包みを持っている。

「まさか…」

どうやらここまで来て、ようやくこの女の人達が来た意味が分かった。というより感づいたようだ。

「リル、大きめの袋を貰って来てくんない？」

「？、分かりました」

「なるべく速く頼むわ」

リルはカインの言うとおり、袋を貰いに行った。

リルはかなり大きめの袋を持って帰ってきた。
そこには女性の集団があつた。
そしてその中から

「うおっ、ちよっ、まっ」

「カインさん!？」

女性の集団の中から聞こえてきたのはカインの声だった。
聞き間違いかと思つたが

「リルか!よし!」

と言つたので間違いなくなつた。

「待て！皆聞いてくれ！！」

カインは女性全員に聞こえるように大きな声で言った。というより叫んだ。

「俺には彼女がいる！！」

『えええええ！！！！！！』

それにはリルも驚いた。

そしてカインは女性の集団の間をすり抜けて、リルの所まで行きリルの頭に手を置いて

「こいつが俺の彼女だ！！」

「ひえっ！！？」

と言ったのでリルは変な声を出してしまった。

女性達は一斉にリルを睨んだが、カインの方に向きなおし

『それでも受け取ってええ！！！！！！』

「なんだってえええ！！！！！！」

カイン目掛けて駆けて行った。

「ああ、助かった」

既に日も傾きかけている時間だ。
今は本を買い、家に帰っている途中。

「それにしてもすごい量ですね」

「ああ、くれるのは嬉しいんだけど…渡し方がなあ」

「確かに…」

「それよりもさっきは助かったわ」

「？」

「ノッてくれただろ？」

そこまで聞くとリルは顔を真っ赤にして、唸って（？）いる。
その様子を見たカインが

「いつそのまま本当に彼女になる？」

「／／／／／」

「…そこまで信じ込むか？」

太陽のように真っ赤な少女を連れて、カインは夕暮れの街を帰って
行った。

オマケ——家に帰ってから——

「カイン君はモテモテだな」
「うっせ」

カインは貰ったチョコを食べながら、嫌味な事を言いながら近づいてきたリーフに返す。

「そう言えば俺に『お前と違って』とか言ってたよな」
「・・・・・・・・・・」

リーフを無視してチョコを食べまくる。

「あんなことを「そんなことよりさ」…何だ？」

カインはリーフの言葉をさ遮って黒い笑みを浮かべながら

「デートとか行っていないのか？」

「っ！！…お前には関係ない！！」

「あるよ。一応兄だしな。言わないなら俺が貰っちゃうぜ？」

「お前にリリカはやらねえ！！！」

「誰もリリカとは言っていないけどなあ」

カインはやってやったと言わんばかりに笑みを浮かべている。
リーフは、顔を真っ赤にして黙って部屋に帰って行った。

「俺にちよっかい出そうとするからだ」

その後カインは三日で全てのチョコを平らげてしまったとか。

番外編 避けては通れない道（後書き）

モテる奴なんて…ちくしょおお！！！！
もう二度とこんなネタは使わねえ！！！！

…次回からは本編に戻りますのでご安心ください。

第17話 交わる斬撃 前編（前書き）

半分位家でのお話です。

第17話 交わる斬撃 前編

「ふあゝ、もう朝か…」

窓から光が差す。

時計を見てみると、7時26分だった。

カイン的には早く起きた時間だ。

まだ虚ろな目を擦りながら、一階に下りていく。

「もう起きてんのか」

そこにはエプロンを着た人物がいた。

どうやら朝食を作っているようだ。

大方リリカだと思っていたが、しかし――

「…リル？」

「へ？うわあ！！」

朝食を作っていたのは、リルだった。

リルは突然話しかけてきたカインを見て、かなり驚いた。さすがに驚き過ぎではないのかというぐらいに。

「どうしたのリルちゃん。ってカイン！？今日は随分と早いよね」
「二人してそこまで驚かなくてもいいだろ」

今度こそはリリカだった。

そして驚く。

カインは心の中で、俺が早く起きるのがそんなに珍しいか？と考える。

自分からしたらそうでもないと思うが、周りからしたら雨が降るのではないかと思う人も少なくない。

「つーか、お前等も十分早えだろ。何してたんだ？リルは朝飯作ってたみたいだけ……」

そこまで言っつてやっと気付いた。
二人が早く起きた事にはない。
リルが朝食を作っていた事にだ。

「お前何で飯作ってんの？」

言い終えて言い方が少しまずかったかと思ったがそうでもなかった。

「最近リリカさんに習っているんです」

と嬉しそうに言った。

どうやらリリカから聞いた話によると、日々この家でお世話になっているので、恩返しも兼ねて何かしたいと言い出したのが始まりらしい。

「なるほどな。いつから始めたんだ？」

「一昨日からです」

一昨日と言えばいつもと何ら変わりはないかった。
それはリリカの教え方が良かったのか、それともリルの筋が良かった

たのか。

「今日は何作ってた？」

「それは出来てからの楽しみです」

何故か勿体ぶられてしまった。

まあ、カインも追及はしなかったが。

「カインが俺（私）より早く起きてる!？」
「その反応もう飽きたわ!!」

ただいま8時。

起きてきたのはリーフとミラだった。

「珍しい事もあるもんだな。もしかしたら雨が降るか——」
「それ以上言わなくて良いからな」

リーフの言葉を遮って椅子に座る。

その隣にリーフ、そしてカインの前にミラが座った。

「.....」

「別に黙れとは言ってないぞ？」

「いや、隣（前）にカインがいるのが珍しくて」

「あつそ」

カインはふて腐れたように頬杖をつく、リルがお盆を持ってやってきた。

「朝ご飯でございますわ」

「ど、どうした？」

「トルージュさんの物真似ですよ」

「何故につ！？」

「毎朝誰かの真似してくれるのよ。似てるでしょ？」

ミラは自分がするわけでもないのにどこか楽しそうだと
りあえずリルは持ってきた物を机に置く。

本日の朝食はご飯、味噌汁、目玉焼き、その他諸々。

「さ、召し上がれ」

「やらされてるわけじゃ…ないよな？」

「……………」

リリカとミラは黙って顔を背ける。

カインはその様子を見て

「やらされてんのかよっ！！てかリルも嫌なら断われよ！！」

「別に良いじゃない。かわいかったでしょ？」

リリカの言葉に何を言っても駄目な事を悟ったカイン。

「それより早く食べよっ。いっただっきまーす！！」

『いただきます』

ミラの言葉を筆頭に全員が言った。

カインは目玉焼きを食べてみた。

何故か女性陣が凝視してきた。

きつと感想を求めているのだろう。

そこでカインは思った感想を口にした。

「すごいおいしい。リル」

しかも満面の笑みで。

カインファンが言われたら卒倒間違いなしだろう。

「良いなあ。私も頑張ってみよっかなあ」

ミラはボソツと呟いた。

だがリルはそれを聞き逃してはいなかった。

「何をですか？」

「リルちゃんには負けないって事」

「？」

リルはわけが分からないので首を傾げるだけで終わった。
こうして朝食は終わっていくのだった。

「前置き長くねえか？」

カインとリルは今回の待ち合わせ場所に来ていた。

「まだ今日の奴とも会ってねえんだぞ？」

「今日の奴とは無礼だぞ！」

今回も突然後ろから話しかけられた。

だが今日のリルは一味違う。驚かなかったのだ。これが慣れという物なのか？

「その登場の仕方め飽きたんだよ。リルも驚かなくなってきたるし」
「ぬぬ…何処までも無礼な。カイン・クリーク…」

今回の人——黒い髪を後ろで束ねていて、武士の様な格好をした細目の男——は一度溜めてカインに向かって叫んだ。

「カイン・クリーク！決闘じゃ！！！」

「やだよ、めんどくせえ」

「なぬっ！？」

だがカインはそれを簡単にあしらった。

「めんどくせえ」の一言で。

「決闘じゃー！！！！」

そう言う男は腰に下げていた日本刀を抜いてこちらに向けてきた。

「やめとけ佐祢丸。リルが怖がつてんだろーが」

「むっ、そなたがリルか。拙者は如月佐祢丸きんづきさねまると申す」

「初めまして、リル・コークレインです」

独特な喋り方をする人だとリルの中で認識された。

「今回は何すんの？」

「うむ、拙者達はさすらっている者を蹴散らしに行くのじゃ」

「…は？」

カインとリルは一斉に首を傾げる。

だがそんな事は気にせず、佐祢丸はさっさと歩きだしてしまった。

今一行はコーライ城跡地に来ていた。

よくよく聞いた話によると、さすらっている者というのは巷で噂なのかは知らないが、

『辻斬りヤグモ』というらしい。

それにしても何故こんな所かというところ

「ここがさすらいの名スポットなのじゃ」

カインは『さすらいの名スポット』って何だよと言おうとしたが言わなかった。否言えなくなった。何故なら

「マジでいんのかよ」

上記の通りいたからである。

「拙者の情報網をなめるでない！」

「どうせアダンにでも聞いたんだろ？」

カインが言つと、佐祢丸の肩がビクツと跳ねた。

「凶星か」

「ち、違う！！拙者は——」

「雨は私を照らす……」

突如さすらいの男は詠いだした。

「何言つてんだ？」

「雨がやむと、空が歌いだし——」

そこまで言つと男は目にもとまらない速さで佐祢丸に近づき斬りかかる。

「虹となり、幻影の刃となって襲う——！」

だが、刃は身体に当たる前に止まり、その代りに金属がぶつかる音

が響いた。

佐祢丸が自分の刀で防いでいたのだ。

「随分な挨拶じゃの」

「ふむ、私の刀を防ぐとは見事。貴様、名は？」

「拙者の名は如月佐祢丸。お主が『辻斬りヤグモ』じゃな
「いかにも」

二人は間合いを取る。

そして佐祢丸は刀を鞘に納める。

「お主を切り捨ててくれる」

「望むところだ」

二人は構えなおし睨みあう。

そして――

「えっ？次回に続くの？」

カインは溜め息をついたのであった。

第17話 交わる斬撃 前編（後書き）

（佐祢丸）「……………」

（雪龍）（ヤバい、どうしよう…！すっごい睨んでくる）

（佐）「そこのお主…」

（雪）「ビクッ」は、はい…」

（佐）「一話で終わらなかったではないか」

（雪）「んっ？えっ？そ、そんな事？」

（佐）「拙者は一話でかつこ良く終わらせたかつたんじゃあ…！」

（雪）「えっ、ちよっ、待て！刀を納めろおおおお…！！」

（佐）「問答無用…！！」

（雪）「うおっ！誰か助けてくれ…！！」

（カイン）「作者がどっか行っちゃったんで俺とリルが予告をするぜ」

（リル）「はい…！念願の初登場！」

（カ）「それはお前の感想だろ！予告だ。よ・こ・く」

（リ）「えーと、次回はなんと佐祢丸さんの能力が明らかに！」

（カ）「まあ、大体の人が分かっているとと思うけど」

（リ）「…とりあえず、次回をお楽しみに！」

（カ）「作者が斬られて打ち切り…なんて無いよな？」

（リ）「…佐祢丸さんを止めに行きましょう…！！」

（カ）「ああ…！！」

第18話 交わる斬撃 後編

「お主を切り捨ててくれる」

「望むところだ」

先に動いたのはヤグモだった。

一気に間合いを詰める。

だが

「旋風刃!!」

「なにっ!!」

向かってくるヤグモに対し、佐祢丸が居合斬りをする。と斬撃が地を這い、ヤグモを襲う。

しかしそれを少しは驚いたものの簡単に避ける。それを見て今度は佐祢丸が動いた。

「焰王刃!!」
えんおうじん
そうらい

「葬雷!!」

佐祢丸の炎を纏う刀に対し、ヤグモは電気を纏う刀で応戦する。

「その年で中々の腕前。だがその程度では私には及ばない」

ヤグモは刀を振り上げ

「閃雷衝霸!!」
せんらいしょうは

それを振りおろすと斬撃と共に雷が出て来て佐祢丸を襲う。

「ぐあああああああ！！！！」

電撃をまともにくらい、よろけながらも立つ佐祢丸。

「ほお、あれをくらってまだ立つか」

「あの程度で倒せると、思っておったか……」

「そこまで言うのなら私の全ての力で貴様を沈めてやろう」

そう言うときヤグモは刀を前に突き出す。

「魔錬具強化改造！！」

そう言うとき刀が光り出す。

その光がやむときヤグモの刀は柄だけになっていた。

「柄だけになった……」

「あれは『魔錬具強化改造』って言ってな。上位の武器士が出来る、魔錬具を変形し、強化させる力だよ」

リルは心配そうな表情で佐祢丸を見る。
だがカインは安心しろと言う。

ヤグモが柄だけの刀を振ると、なんと光の刃が現れた。

「行くぞ!!」

ヤグモは間合いを詰めて佐祢丸に斬りかかる。

「雷核鎖霆刃！！！！」

刀を横に振ると、今までより大きな電撃が佐祢丸に襲いかかる。
だが佐祢丸は刀を前に突き出し

「魔鍊具強化改造！！」

ヤグモの時と同様に佐祢丸の刀も光り出す。
そして光がやむと佐祢丸は片手に一本ずつ、計二本の刀を持っていた。

そして向かってくる電撃を左手に持っている刀で弾き飛ばした。

「なっ！！何だとっ！！！」

「ここからは拙者も本気で行かせてもらおう！！」

ヤグモは向かってくる佐祢丸に斬りかかる。

だがそれを左の刀で受け止め、右の刀で斬る。

ヤグモは腕に少し掠ったものの、避ける事に成功した。

「くっ、まさか貴様も出来るとはな」

佐祢丸はニイと口角を上げ、刀を鞘に納める。

「双刀奥義——十乃字桜！！」

鞘に納めた刀を一気に居合抜きをすると、十字の斬撃がヤグモに飛んで行く。

それを躲し、正面に向きなおすがそこには佐祢丸の姿は無く、ヤグ

もののすぐ隣に来ていた。

（なっ、速い！！）

「斬り裂く……」

佐祢丸は二本の刀を合わせて一本にし

「神速の剣戟で……！！」

そのまま横に一閃させて終わった。

「そいつどうすんの？」

勝負がついた佐祢丸の所に来てカインは聞いた。

「ふむ、その事なんじゃがな——」

「殺せ……」

倒れていたヤグモが上半身だけ起こして言った。

「敗者には死しか残っておらん。殺せ」

カインとリルは黙って佐祢丸を見た。
当の本人はと言うと

「いや、そんな事ません」

「……」

その答えを聞いて、カインはやっぱりなと苦笑する。
だがヤグモは

「何故だ！私には死しか無いのだ……」

佐祢丸は黙って聞いている。

「それとも何だ！私に生き恥をさらせとでも——」
「五月蠅い！！！」

佐弥丸は我慢の限界が来たのか、刀を納めている鞘でヤグモの頭を叩いた。

「ぐっ！何をする！！」

「ごちゃごちゃ五月蠅いんじゃ！！殺せじゃと？ふざけた事をぬかすな！！！」

「っ——」

「そんなに死にたければ一人で勝手に死んでおれ！！」

ヤグモは俯いて黙って聞いている。

「じゃがな、それで死んだとして何が変わるというんじゃ！！！！お主を大切に思っている人を悲しませるだけではないか！！！！」
「私にはもうそんな人はいない……ずっと一人なんだよ！！！！」

ヤグモはポツリポツリと呟くように話す。

「私は昔から一人だった。友達も、親も、何も無かった」

「じゃあ、これから作っていけばいいじゃろ」

「そんなこと……」

「できる」

「何を言うのだ！出来る筈が——」

「そりゃ、今更親は作れんがな……」

「仲間なら作れるじゃろ」

そう言つて手を差し出す。

それをヤグモは驚いた表情で見る。

「『アース』に來い。そうすれば問題は解決できる」

「俺もそうした方が良いと思いますよ」

佐祢丸の後にカインも続く。

「どうせあんた行くとこないんでしょ？」

「…こんな私でも良いのか？」

「何を言つのだ。拙者から誘っているのだ。良いに決まっている
だろう」

ヤグモは差し出された手を掴み

「…ありがとう…ありがとう」

消えそうな声で何度もお礼を言った。

「さ、帰りますか」

カインのその言葉でヤグモを含めた一行は、夕焼けの中を帰って行くのだった。

——オマケ（帰り道で）——

「そういえばお主何歳なのじゃ？」

突然佐祢丸はヤグモに質問した。

「私は26歳です」

「結構年上なんじゃな」

「^{ボス}団長より年上だな」

「その方は今何歳なのですかな」

今はこの場にいないとはいえ、女性の年を聞くのはどうかと思うが……というよりまだヤグモは知らなかった。

「「23歳」」

カインと佐祢丸が上手い事にハモった。

「随分と若いのですな」

ちなみにリルも知らなかったそうだ。

後日ヤグモがスウェルに会った時、女性だと知ってとても驚いたのは別の話。

第18話 交わる斬撃 後編（後書き）

如月佐祢丸

Kisaragi Sanemaru

【武具：日本刀／18歳／男／175？／63？】

黒髪で昔の侍のような格好した青年。

喋り方も独特で、一人称は『拙者』。

カインに会う度に決闘を申し込むが毎回断られる。

『魔錬具強化改造』をすると、刀が二本になる。（一本にもできる）
ちなみに、これは作者が書いている途中に思いついたダジャレから
来ている。

決め台詞は「斬り裂く、神速の剣戟で」

ゲルジダス

闇王の名前を変えました。

既に他の場所に使われていたので。

第19話 魅惑の槍使い

「騙された…」

待ち合わせ場所に来て今回のお相手を見た途端、リーフは溜め息を
ついて言った。

そう、リーフが。

何故リーフが来たのかそれは約12時間前に遡る。

「リーフ」

カインはリーフを呼び止めた。
呼ばれたので当然リーフは振り返る。

「何だ？」

「明日お前暇？」

「ああ、暇だけど」

それを聞いてカインはホッとした表情を見せる。

「明日俺の代わりにリルと仕事行ってくんない？」
「は？」

こいつは何を言っているやがる、などと思ったが、口には出さなかった。

「何故だ？」

当然そう聞くだろう。
理由も無しに、頼んでいるなら拒否してやろうと思ったからだ。

「え、えーと、ほら…」

何故かうろたえている。
かなり怪しい。

「明日の任務はさ…あの、お前が行った方が都合が良いんだよ!」
じやあな!」

そう言うと、急いで自分の部屋に戻って行った。

「まあ、良いか」

それ以降特に何も聞かずに、了承してしまった――

——その結果がこれだった。

今回一緒に行くのは、腰まである青い長い髪と、男性でも女性でも憧れる見事なプロポーションが特徴の女性だ。

「騙されたとは随分な言い様ね」

「生憎その言葉しか出てこなくてね」

リーフはこれでもかと言う位にげんなりしている。
理由は後々分かるのだが。

「えっと、そっちの子は……」

「リル・コークレインです。よろしくお願いします」

「ん、わたしはカレン・イルジーナ。よろしく」

一通り自己紹介を済ませるとカレンはリーフに向き直り尋ねた。

「来るのはカインだって聞いてたけど？」

「ああ、どっかの誰かさんに苛められるからってドタキャンだよ」
「……まあ、良いわ。リーフも面白いし」

カレンのテンションは上がっているが、逆にリーフのテンションはただ下がりである。

「で、どんな仕事なんだ？」

「レッツ潜入大作戦よ！！」

「意味分からん」

「まあ、とりあえず着替えてもらってから」

そう言うとは無言を言わずリーフは連れて行かれた。

—— 10分後

リルは絶句した。

なんとそこには女装をしたリーフがカレンの後ろに隠れていた。かなり見えていたが。か

「じゃっ、行きますか」

「覚えてろよ、カインの野郎……!!」

今この場にはいないカインに向かってかなり怒っていた。

「てか、本当にこの格好で行くのか？」

「そうだけど？嫌なの？」

「当たり前だ!! 大体なあ」

「あゝ、つべこべ言うなっ！新連載のせいだかなんだか知らないけど、出番が中々来 なかったから早く暴りたいのよ!!」

「そんな事情知るかっ!!」

その後リーフはボコボコにされて連れて行かれました。

「何だここは……！」

一行は只今ヘンテコと言う単語が最もお店に来ていた。どうやら二階は誰かの家らしい。

「この店は女性しか入れないの」

「だからこんな格好なのか？」

「そゆコト」

（こつ言うのはリリカがミラに頼めよな）

一行は店に入った後、カレンが店員と何か話した。やがて帰ってきていきなり

「上行くよ！上！」

「待て、話が掴めない」

「しょうがないなあ。上に住んでる奴がなんかここの金を巻き上げてんたって」

「アバウトな回答をどうもありがと」

上の階にはたくさんの傭兵がいた。

だが素早く背後に回り込み一人ずつのしていった。カレンが。

「あー、面白くないわあ。何ここの連中」

「戦闘狂の血が騒ぐってか」

「やっぱ兄弟ねあんたら」

そんな軽口を叩いていると、前方から傭兵が大量にやってきた。

「そろそろ本気で言っちゃおうかな」

そう言っているとカレンは手を前にかざす。

するといつの間にか手には槍が握られていた。

「いきなり行っちゃうわよ。魔錬具強化改造！」

光がやむと槍は炎を灯していた。

カレンはそれを数回回し構えた。

「蓮派槍^{れんはそう}！」

傭兵達に向かって鋭い突きを浴びせる。

「灸旋邦臥^{きせんぱうが}！！」

槍を思い切り振り回す。

「次でラスト！！」

カレンは傭兵達に向かって走っていく。

「貫く……」

「鋭き槍術によって!!」

「秋漸霸王閃!!!!」
しゅうぜん はおうせん

一気に傭兵達はカレンの槍の餌食となってしまうた。

「かわいそうに。こいつに当たったのが運のつきだな」

「情けは無用よ」

「はぁ、恐ろしいな」

「さあて、金も取り返せたり帰りますか」

傭兵達を倒した後、金を巻き上げていた奴をカレンが脅して、金を返してもらった、もとい奪い取ったのだった。

「まあ、楽勝だったかな」

カレンは一人先頭を歩いていた。

「破動使うまでもなかったし」

その呟きはリルにさえ聞こえないとても小さな声だった。

「ただいま」

「おい、カイン何処だ……!!!!」

リーフはズタズタと足音を立てながら、部屋に入っていく。
自分の格好も気にせずに。

「リ、リーフ！何て格好してるの！？」

「あ、着替えるの忘れてたな」

「でも妙に似合ってるのは何でかしら」

リーフはそれを聞いてかなり妙な気分になった。

「とりあえずカインをシメてくる」

「待つて！！今カメラ持つてくるから！」

「いや、撮らなくてもいいから」

リーフにとって人生で最も忘れ難い一日になったとさ。

第19話 魅惑の槍使い（後書き）

カレン・イルジーナ

Karen・Iligena

【武具：槍／21歳／女／172？／52？】

青い長い髪の女性。

戦いが大好き。（リーフ曰く戦闘狂）

普段からカインを恥ずかしい目にあわせてやろうと企んでいるが、毎回失敗に終わる。

魔錬具強化改造ができる。

決め台詞は「貫く、鋭き槍術によって」

（雪龍）「はあ、今日はかなり頑張ったなあ。14日になっちゃったけど」

（リーフ）「それは良かったな…!!」

（雪）「あれ？リーフの後ろに黒い物が…」

（リ）「次は俺の出番だよなあ…」

（雪）「いや、今のところそんな予定は——」

（リ）「俺だよな…？」

（雪）「は、はい！そうでございます！」（怖えよ…）

（ルイス）「何？楽しそうじゃん」

（雪）「ルイス！お前こっちは来ちゃ駄目だろ…！」

（ル）「良いんだよ。只今強化月間だから」

（雪）「そんな事許すか！強制終了!!」

（ル）「おい、勝手に終わらせんなよ！」

（雪）「こっちはいっつもされてんだよ…!!」

第20話 遂に登場

さて、今回は前回のやり取りの通りリーフ君です。

リーフはいつもの格好だが頭にゴーグルを付けていた。

待ち合わせ場所はないので家から直行した。

今回の任務は、廃ビルに立て籠もっている盗賊団を追いつくというごく普通で在り来たりな任務だった。

しかし、彼等は痛感する事になる。

任務には――

――アクシデントがつきものだと言つ事を。

「痛たたたた」

「大丈夫ですか？」

肩を擦っているカインに、声を掛けるリル。
それを全く気にせず進むリーフ。

先日やられた傷が痛むらしい。リーフにやられた傷が。
一行は今とある森の中を彷徨っている。

「おい、本当にこっちで合ってるのか？」

「だ、黙ってる！こつちだこつち！！」

只今現在進行形で迷子だ。

しかも第2話のカインとは違い、本格的な地図を持ってきてこの有様である。

そう、リーフは根つからの方向オンチなのだ。

「ちょっと貸してみろ」

そう言つてカインはリーフから地図を半ば強引に奪い取る。
それを見てカインは驚愕する。

「これあつちじゃねえか」

「何だつて！？」

「何だつて！？じゃねえよ！！どう見たつてあつちだろうが！！」

何故なら進んでいる方向は全く違ったからだ。
というより真逆に近かった。

「置いてくぞー」

「まっ、待ちやがれ！！」

「何だよ、結局森なんて通る必要無かったじゃねえか」

一行はようやく廃ビルに着いた。

ちなみに廃ビルは、街外れにあり周りには木しかなかった。

「何だ？お前等」

「おい、話しかけられてんぞ」

「お前も話しかけられてんだよ」

廃ビルの入り口付近にはガラの悪い奴らがたむろしていた。

そして、その中の一人がこちらに気付き話しかけてきた、と言う状況な中でリーフが天然な事を言い、カインにツッコまれると言う、漫才の様なものを繰り広げていた。

「何だつて聞いてんのが聞こえねえのか？ああ？」

「いや、聞こえたけどそんなアバウトな聞き方しといて通じると思っただの？」

質問を質問で返すリーフ。

それを挑発だと思ったのか、男の堪忍袋の緒が切れた。

「あんま、調子乗ってつと痛え目見るぞ！！」

男はリーフに掴みかかるが、リーフは掴まれる前に何処から出したのか、手に銃を構えて立っていた。

男がそれに怯んでいる内に、リーフはゴーグルを目の位置まで下ろし、男の足を撃った。

それを見て他の奴らもリーフに向かっていくが、リーフはその全員の足目掛けて撃った。

「すごい…あんな短時間で…」

「まだ全然凄くねえよ。まだ輝流すら使ってねえしな」

「えっ…」

リルは驚いた。

リーフは輝流すら使わずに、あれだけの数の敵を倒したのだ。

「お邪魔しまーす」

リーフは律義（？）に挨拶をして入る。

「くらいやがれ！」

リーフはもう一つ銃を取り出し男達に向かって、連射した。弾は全て足に当たり、倒すものの殺しはしなかった。

「よっ…ん？」

敵がまだ10人ほど残っているときに、先程まで鳴り響いていた銃声がスカツと言う音に変わる。

「弾切れか」

[illegible]

弾切れだと言う事を知ると、男達は一斉にリーフに向かっていく。

「可哀想に。あんなつたら逃げるのが最良の選択だったのに」

カインとリルが後ろで話をしていると、リーフの銃が光り出す。

「あれって…魔鍊具強化改造？」

「いや、違う。あいつの能力は――」

リーフは光っている銃を男達に向けて構える。

「はっ！弾切れだろうが！向けても意味は無えぜ」
「バーカ」

そう言っでリーフは引き金を引く。
すると、光の弾が男達に向かって飛んで行った。
その弾が一人に当たり吹っ飛ぶ。

「——あいつの能力は原流。性質は輝弾装填だ」
フラッシュショット
「閃光弾！」

先程と同じ弾が一人に当たり吹き飛ばす。

スカイガトリング
「空裂連射！！」

先程より少し小さい弾が男達に当たり、一人だけ残し吹き飛ばす。

「さて、あんたにはボスの居場所を吐いてもらおうか」

リーフが男の胸倉を掴み上げた。

——刹那、何処からか銃声が響きリーフの顔をドロツとした液体が赤く染める。
だがそれはリーフから出た物ではなく、掴み上げた男から出ている物だった。

「出てこい。隠れてこそ撃ったって俺には当たらねえぞ……！」
「まあ良いか」

柱の陰から一人の男が出てきた。

その男の手には銃口から煙が出ている銃があった。

「何でこいつを撃ったんだ？」

「何でって。そりゃあ、弱え奴は必要無えからだよ」

リーフが静かに尋ねると、男はさも当然だと言つように答える。

「ふざけんな……！」

リーフは怒鳴り、左手の銃で男に向かって撃つ。

しかし男はそれを避け、今度は逆に男がリーフに向かって撃つ。
だがその弾を光の弾で相殺させる。

「これは見事。だがこれは避けられないぞ……！」

そう言つと男はもう一つ銃を取り出し、リーフに向かって撃ちまくる。

「ハチの巣になって死ね……！」

「避ける必要なんてねえ……」

リーフは右手に持っている銃を男に向ける。

銃の放っている光が今までより大きい。

「なんせその弾は俺には届かねえ」

「あん？」

エンペラーキャノン
「帝王の断罪！！」

右手の銃から放たれた弾は、全ての弾を呑み込んで男に向かっていく。

「撃ち放つ……」

「崩壊の銃撃を……！！」

光の弾は男をも呑み込み、壁に当たって爆発した。それを確認すると、カイン達の方を向く。

「……もう行きやがったか」

そこにはカインの姿が無かった。

リルも気付いていなかったらしい。

リーフは爆発した方を再度向く。

だが煙のせいで中の様子は分からなかった。

「くそっ！あのガキが…！！」

男はよろけながらも立っていた。
そして前から人が来ているのが分かった。

「てめえは、あいつを何だと思ってたんだ？」

「？」

声からして男だと言っ事が分かった。

「撃った奴の事を何だと思ってたのかって聞いてんだよ」

「ああ、あいつか…ただの道具だよ！それ以外に何かあるか？」

「…この屑が」

男は煙に紛れている影の右手のあたりから、炎が上がっているのを確認した。

「おい！何する気だ！！」

フレイムボール
「…焰の柱」

男は炎に包まれ灰になった。

「よっ！」

「あつ、カインさん！どこに行つてたんですか？」

「ちよつとあつちに気になる物があつて」

カインは少し無理があつたかと思つたが、リルは信じたようだ。

「そう言えばあのボスみたいな人はどうなつたんでしょう？いなくなつてますし……」

「どうせ逃げたんじゃねえの？」

それもリルは信じた。

少しは疑つた方がいいのではないかと思えてくる。

「まあ、帰ろうぜ。下っ端共も追い出せたみたいだし」

『待って下さい!』

「何か言ったかリル?」

「? 言ってませんけど」

「俺も言ってるねーけど何か声は聞こえたな」

『こっちです。こっち』

三人は声のする方を向く。

そこには10歳位の少女がいた。

「こんな所でどうしたの?」

『助けて欲しいんです!』

「「「はい?」」」

三人は上手い事ハモった。

そしてカインとリルは前にもどこかで見たことがある状況だと言う事も思っていた。

「まあ、とりあえずお話を」

そう言ってるリルは、少女の手を掴もうとした。
だが出来なかった。

というより、すり抜けた。

「あれっ?」

「ま、まさか…」

「よく見たら足も…」

「ということは…」

少女は無言で頷く。

と言う事はやはり…そう言う事なのだ。

第20話 遂に登場（後書き）

リーフ・クリーク

【性質：輝弾装填／17歳／男／173？／60？】

金髪の青年。カインの弟。

普段はクールだが天然。

任務の時はゴーグルを付けていく。

かなりの方向オンチで偶に帰ってこれなくなる。（その度にカインが迎えに行く）なのでGPSは必須アイテム。

2丁の銃を使う。弾が無くなると輝力の弾を装填し放つ。

決め台詞は「撃ち放つ、崩壊の銃撃を」

第21話 闇に立ち向かう二つの光

「まずは話を聞こう」

『はい———』

少女は目を閉じ、昔の事を思い出しながら話し始めた。

あれは5年前、第一次闇転戦争の後の事。

輝流士達の勝利で戦争は幕を閉じましたが、まだ闇族の残党が残っていました。ゲルティア

でも残っているといっても、ハイランク上級は皆封印され中級以下しかいませんでした。ミドルランク

私はとある村に住んでいました。

何の変哲もない平和な村でした。

しかし、そんな村に中級闇族が現れ、ミドルランクゲルティア村人を襲い、食料を奪いました。

それは一度では終わりませんでした。

その後何度も何度もその闇族は来ました。ゲルティア

村長はそれに困り果てて、輝流士を呼ぶ事にしました。

やがて輝流士の方は来ました。

でもその時にはもうほとんどの村人が殺されていました。

輝流士は闇族と戦いました。ゲルティア

ですが追い払えたものの倒すことはできませんでした。

それでももう襲ってはこないと思ったのです。

しかしその闇族はまた来ました。ゲルティア

そして輝流士が追い払う。その連続でした。ゲルティア

やがて輝流士も困り果てて、次に闇族が来た時には封印するという

事になりました。

でもその封印には生贄が必要だったのです。

その事に村長は自ら生贄になると言いました。

次に閻族ゲルティアが来たのは夜でした。

それには輝流士も村人も驚き、何の対処も出来ず、次々に村人は殺されていきました。

その中で生き残ったのは、輝流士と私だけでした。

そこで、輝流士は私を生贄にしました。

そして閻族ゲルティアは封印されました。

それから5年間、私は成仏できずずっとこの地に留まっているのです。

『———という訳なんです』

「なるほどな。理由は分かった。でもどうすりゃあ成仏できるんだ？」

『私が考えられる方法は一つしかありません』

少女は一息ついて続ける。

『封印を解いて閻族を倒すんです！』
ゲルティア

「——！！——」

「？」

カインとリルは同じ反応を見せ、リーフは頭の上を？マークでいっぱいになっている。

「でもそんな事——」

「ちょっと待て！！」

リルが喋るのをリーフは大声で止める。
そして

「さっきから言ってる閻族^{ゲルディア}って何だ？」

その問いにしばしの沈黙が流れる。
その中でカインが口を開く。

「…そこから？」

あれからおよそ10分でリーフに闇族ゲルテイアの説明をし、元の話に戻る。

「ていうか、そいつは俺達が勝てるような奴なのか？」

「確かにそうだ。ハイランクゲルテイア上級闇族には手も足も出なかったぜ？」

『ハイランク上級にはおそらく大地を照らす13星座でないと勝てません。ミドルランクしかし中級なら...』

「...にしても、嬢ちゃんやけに詳しいな」

その問いに少女は俯く。

そして呟くように話し始める。

『私のお母さんとお父さんは戦争に行っただんです...』

「あつ...」

少女の頬に一筋の涙が伝う。

それで三人は察した。

少女の両親は戦争に行つて、それっきり帰ってこなかったのだらう。

「しょうがねえな」

『えっ…?』

少女はカインを見上げる。

「嬢ちゃんをお母さんとお父さんに会わせてやるよ」

『…本当に?』

「ああ、ここまで聞いというて無視すんのもあれだしな」

「カインさん…」

『…ありがとう』

「で、どこに封印されてんだ?そんなに遠くねえだろ?」

少女は涙を拭き、笑顔で答える。

『場所はここ地下です』

「んじゃ、さっさと行こうぜ」

一行は闇族^{ゲルティア}が封印されている場所まで来た。
そこで一つ問題が発生した。それは――

「どうやって封印を解くんだ？」

それにはそこにいる誰もが悩んだ。
封印場所には、太い棒が地面に刺さっているだけだった。

「やっぱこれ抜きや良いのか？」

「だろうな。じゃあ抜くぜ」

カインは棒に手を掛けて思い切り引っ張る。
だがビクともしない。

もう一度引っ張ってもやはりビクともしない。
そして何回か試して無理だったのだ…。

「くそっ！消えちまえ！！」

棒を燃やした。

それにはカイン以外が驚いたが結果オーライだったようで、炎の中から人影が現れる。

その影は炎を吹き飛ばす。

「あゝ、ようやく出れた…誰だか知らねえけど助かったわ」

「それはどうかな。今からお前は倒されるんだ。俺達にな」

「リル。嬢ちゃんと一緒に下がってろ」

「はい！！」

男の眼の下には赤い牙の様な模様があった。

「あの模様はこの前の…」

「何？俺と戦^やるの？じゃあさ、一先ず外出ない？ここ凄^やい窮屈で息詰まりそうなんだけど」

「余裕だな」

「まあ行こうぜ」

男は外に出ようと階段の方に向かうが、光の弾で邪魔された。

「行かせねえよ」

「そんな事言わずにさあ…」

その瞬間男の姿が消え、リーフとカインの首を掴み

「外行こうぜ」

またもや消えた。

男の言動からして恐らく外に行ったのだろう。
リルは急いで外に向かった。

男は外に出るとカインとリーフを放り投げる。

「ゲホッ、ゲホッ」

カインとリーフは息を吸うのに必死になっている。

「どうした？俺と戦^やるんだろ？だったら立てよ」

「言われなくてもそうするつもりだよ…」

「てめえをぶっ倒すって約束しちまったからな」

カインとリーフは立ち上がる。

こうしてカインとリーフの闇族^{ゲルテイア}との戦いが幕を開けた。

第21話 闇に立ち向かう二つの光（後書き）

（力）「おい、さっきちょっと聞いたんだけど新連載をまた始めるって本当か？」

（雪）「どこで聞いたのそれ」

（リ）「そんな事はどうでも良い！本当なのか！？」

（雪）「そういう予定はあるよ」

（力）「おいやめとけて！中途半端に連載ばっか増やしても面倒な事になるだけだぞ！」

（雪）「いやだってそうしないと余計に面倒な事が…」

（リ）「そんなことしたらまた俺達の更新が遅くなるだろうが！！」

（雪）「…それが本音か」

（力）「だめだな、こりゃ」

（雪）「もう毎回強制終了だね」

（力）「じゃあ、やめなきゃいいじゃねえか」

（雪）「そんな事言ったってキャラの権力って結構大きいんだぞ！！」

（力）「…そうなんだ」

第22話 空気を統べる者

「ところで一つ聞いて良いか？」

男はカインとリーフに対し、右手を上げて質問する。

「どうして俺の封印を解いたんだ？」

「そうしねえとあの子が成仏できねえんだよ」

「やつぱそう言う事が…」

男は何かを考え込むように俯いて黙る。

「何だ？嬉しくなかったのか？」

「まあ、今から倒されるんじゃないや喜べねえだろーよ」

「ちげーよ。てめえらは一つだけ勘違いしてる事があってな」

男の言葉にカインとリーフはどういう意味か尋ねる。

「あの嬢ちゃんが成仏できねえと言ったが…」

「…？」

「嬢ちゃんは死んでねえよ」

「「！！！！」」

男の言葉に二人は驚愕する。

「あの子は身体を生贄に封印されただけで、死んじやいねえんだよ」

「そんな事…」

「ほら、来たぜ」

男の指さす方を見ると、リルが走ってきていた。

「大変なんです！アリスちゃんが……！」

「まさか本当に……！」

リルは後ろにいる少女——アリスを見せる。

するとやはり、足は地面にしっかり着いており、身体も透けていない。

「私……生き返ったんです」

カインはそうではないと言い、先程聞いた真実を告げた。

「じゃあ私は元から死んでいなかった……？」

「そう言う事だ。リル、アリス連れて下がってる」

カインはリルとアリスを下がらせ、男の方を向いた。

「随分優しいじゃねえか。待っててくれるなんてな」

「……お前ら、名前は？」

「リーフだ！」

「バカ！こういうときは『人に名前聞かるときはまず自分から名乗れ』だろ！」

「知るか！」

カインとリーフがコントを繰り広げていると、男は溜め息をついた後、手から黒い靄を出し再度尋ねる。

「俺の名前はバルデス。お前は？」

「カインだ……！」

「カイン？…そうか。お前がカインか…」

カインは手から炎を出し、リーフは銃を取り出す。

「行くぜ！」

「ファイアフルショット！」

リーフはバルデスに向かって、大きな弾を三発放つ。

バルデスはそれを避けるが、避けた先にはカインがいた。

「炎焦崩穿！
えんしょうほうせん」

カインが手を振り下ろすと同時に、炎が上からバルデスを襲うが、手に纏っていた靄で相殺させてカインの目の前に立つ。

慌てて炎で盾を作るが、それを破ってカインに靄が襲いかかる。

「いつてえ…」

「何ぼさつとしてんだ！あれやんぞ！！」

カインはリーフに近寄り、肩に手を置く。

「「フレイムキャノン炎の穿撃砲！！！」」

銃から放たれた大きな炎の弾が、バルデスに当たり爆発を起こす。

「やったか！？」

「あー、ちとなめてたわ」

「なっ！！」

カインとリーフの最大の技でも、バルデスを傷はある物の倒せてい

なかった。

「こいつ中級^{ミドルランク}って言うてるが、上級^{ハイランク}に近い…」

「要するにやべえって事か…」

「お前らが破動輝流士ならやばかったな」

バルデスの言葉にカインは反応する。

「まあ、これで終わりだ。」苦勞さん

バルデスの手にももの凄い大きさの塊が集まる。

「^{ロード・オブ・デス}無への路!!」

カインとリーフに大きな闇の塊が迫ってくる。

カインは首巻に手を掛け外そうとするが、誰かに止められ、更に闇の塊もどこかに消える。

「まったく…仲間がおる所でそれ外したらアカン言ったやろ？」

「ボス!？」

「何であんたが…?」

そう、闇の塊をどこかへ飛ばしたのはスウェルだった。

「封印が解けた感じがしたから来たんや」

「そうか、助かった。ありがとな」

「まあ、一応ボスやし。それに…」

スウェルはバルデスを睨みつけ、続ける。

「闇を光で照らすのが大地を照らす13星座の役目やからな」
シャイニングソディアック

「！！ 大地を照らす13星座だと！？」
シャイニングソディアック

「せや、大地を照らす13星座の魚座として、あんたを倒す！！」
ビスケス

スウエルは手のひらに大きな透明な立方体を作りだす。

「聞いたことがある。空気を操る輝流士が大地を照らす13星座に
シャイニングソディアック
いるとな」

「あんたの情報は少し間違つとる」

バルデスは闇の塊をスウエルに投げつけるが、当たる前に消える。

「あたしは空気を操るだけやない…」

スウエルが手を前にかざし、握るとバルデスは固まったように動けなくなる。

「あたしは空間も操れる！最後に見せたるわ。あんたらが大っ嫌いな破動をな」

スウエルの手ひらにある立方体がだんだん小さくなる。

そしてサイコロ位の大きさになる。

スウエルは動けないバルデスに近づいて行く。

「あたしの破動は空気圧縮。文字通り空気を圧縮させる事が出来る」

スウエルはバルデスの胸に空気を埋め込み、距離をとる。

「一個言い忘れたけど、あたしが空気を離すと一気に元に戻るんよ」

バルデスは目を見開く。

「どういう事かわかったみたいやな。あんたはそのまま…ドカン！」

すると徐々にバルデスが膨らんでいく。

「弾ける…」

「空気を統べる力によって」

そしてスウェルは呟く。

「あんたに罪は無い…ごめんな」

刹那、バルデスは爆発し、周りに血の雨を降らせた。

「で、あいつ何処行つたんだ？」

「さあ？逃げたんやろ」

カインの質問にスウェルは答える。

先程の戦いはスウェルしか知らない。

何故なら空気を歪ませて、幻を見せていたからだ。

「それよりこの子どうするん？」

スウェルが尋ねると何処からか声が聞こえた。

「誰だっ！」

『申し訳ありません。驚かせてしまって』
「う…そ…」

アリスの目から涙がこぼれる。

「お母さん…」

「…「えええ!!?」「」「」」

『アリス、ごめんなさい、あなたに悲しい思いをさせてしまって…』

カイン、リーフ、リル、スウエルの四人は驚きで口が開いたままになっている。

「お母さん、お父さんは？」

『…』

「…どうしたの？」

『あの人は闇に堕ちてしまった』

「えっ…」

『私は死んでしまったけどあの人は…闇族ゲルティアになってしまった』

「闇族に!？」

「ここはあたしが話すわ…」

スウエルが言うには、闇族ゲルティアは人の心が、強い負の感情などで、闇に落ちた時になるらしい。

『でも、いつか彼を救ってくれる人がいる。私は先に行って待つる事にするわ』

「待つて!行かないで!!」

アリスは母親に抱きつこうとするが当然ながらできない。

『うちの子を頼めますか？』

「任せとき！こいつらがしっかり面倒見るから！」

そう言つてカインの背中に乗る。

カインはバランスを崩し、危うく転びそうになる。

アリスの母親は微笑む。

もう肩のあたりまで消えている。

『アリス、私は空からあなたを見守ってるから…』

そこまで言つと、消えた。

「お母さん…」

「…どうする？こいつらの家に来るやる？」

「………」

「ここに残るか？ここに残ってもお母さんは帰ってけえへんで」

「おい！その言い方は——」

「…そうですね」

全員アリスの方を見る。

「ここに残ってもお母さんは帰ってこない」

「アリス…」

「だから、これからよろしくお願いします！」

アリスはカインに向かって頭を下げる。

「こつちこそよろしく！」

「一件落着つてことで帰ろうか。せや、何かおごつたるわ！」

「マジか！？じゃあさっさと行こつぜ！」

そう言つてカインは歩き出そうとするが、突然目から大量の涙が溢れ出す。

「あれ…？」

「ぷっ、何泣いてやがんだ…！」

「うつせえ！てか止まらねえんだけど」

「そんなに嬉しいんか？」

一行はカインをからかいながら歩いて行く。

（まさか、ゲルディア闇族の心を…）

スウェルはカインを見ながら自分の考えを整理していた。

第22話 空気を統べる者（後書き）

（力）「あー美味かった」

（雪）「何おごってもらったの？」

（力）「ラーメン、ハンバーグ、カツ丼etc…」

（ス）「財布の中空っぽやわ…」

（雪）「自分で言ったんだから仕方ないよね」

（ス）「それはそうと、あたしの一人称が『私』から『あたし』になっとなっただ」

（雪）「それはなんとなくだな」

（ス）「あっそ…」

（雪）「さて、次回は『アース』のメンバーが春恒例のあの行事をします！」

（力）「強引に予告に持っていったな」

（雪）「久しぶりにまともな事が出来た」

第23話 『アース』恒例のお花見でメンバー大集合！（前書き）

ほとんど台詞ばっかです。

え？いつもそうだった？

いつも以上ですよ。今回は。

第23話 『アース』恒例のお花見でメンバー大集合！

今日は毎年恒例『アース』の――

「花見だあつ！……！！！」

そう、花見だ。

桜の花が舞い散る中、友達や同僚とわいわい楽しく歌ったり、踊ったりするあの花見である。

『アース』でも毎年一度、皆で集まって花見をするのだ。と言っても来ない奴は来ないが。

「楽しいですね！」

「そうだな！」

ここではしゃいでののは、生まれて初めてする花見に感激しているリル・コークレインと、毎年こんなテンションのカイン・クリークだ。

「何でミラさんは来なかったんでしょう？」

「何か『アース』に入ってないから、とか言ってたけど誰も気にしないと思うんだけどなあ」

今年の花見には二十人ほど来ている。

これは『アース』の八割くらいらしい。

「リルちゃん、イエーイ！」

「えっ、あつ、イエーイ」

「もう酔ってんのかよ。レッ君」

リルに話しかけてきた、否絡んできたのは、金髪の青年レッ君こと
レックス・セルベシア。

因みにレッ君は、19歳だ。

「お酒飲んではいけないのでは…」

「飲ませたのは…あいつだろうな」

そう言って、指を差した先には青い髪の女性、カレン・イルジーナ
がいた。

「カインー！今日こそこれ着てもらうぞー！」

カレンが取り出したのは、メイド服だった。

「それ女用だろ？」

「男も女もあるかー！」

「お前も結構酔ってんじゃねーかー！」

カレンがカインを…何か紛らわしいが、カレンがカインを追いかけ
だす。

何故カレンはカインに女装をさせたいのだろうか。
到底似合うとは思えないのだが。

「おや、随分無粋な事をする方がいたものですね」

片手にカップを持って話しかけてきたのは、いかにも大人な男性と
いう雰囲気を出しているデルス・エンバルザー。

「デルスさんもお酒を？」

「いえ、私はお酒は飲めませんから、紅茶を飲んでいます」
「紅茶ってまたカッコイイもん飲んでんなあ」

リルの後ろからデルスに話しかけてきたのは、カインの弟のリーフ・クリークだ。

「あなたも飲んでみますか？」

「いや、遠慮しとくわ」

「そうですか」

笑顔で返すと、デルスはどこかに行ってしまった。

そしてデルスと入れ替わって来たのは、白髪でヘアバンドをした青年、イグルス・ルイゼンバーン。

「兄貴はどこっすか!？」

「カインさんならカレンさんに追いかけて、どこかに行っちゃいました」

「くっそ、あの乳女め……!!」

「乳女……」

リルの横で胸に手を当て何かを考える、元幽霊少女のアリス。アリスは『アース』には入っていないが、関係者として来ている。

「羨ましい……」

「あの……アリスちゃん？ 女の人はそれだけで決まるわけじゃないんだよ？」

「そうそう。良い事言うわね。リルちゃん」

リルの意見に同意したのは、エリサ・スレット。

「げっ、エリサ！」

「イゲルス、そのげっ、ていうのはどういう意味？」

「あゝ、エリちゃんだゝ。久し振りゝ」

「レッ君、あんた未成年なのに酒飲んだの！？」

「カレンの奴に飲まされたんだろうよ」

「カインさん！！」

リルの横にいつの間に帰って来たのか、カインが水を飲んでいた。

少し時間が経ってやっと落ち着いた頃に、
またもや騒がしい奴が現れた。

「佐祢丸殿、お主も酒を飲まれよ」

「いや、拙者は未成年故……」

「暑苦しく、更に堅苦しい奴が来たな」

今度来たのは、佐祢丸とヤグモの侍コンビだ。

「何じゃと！？カイン・クリーク！決闘じゃ！！」

「やだよ。めんどくせえ」

「この無礼者！！！」

佐祢丸はカインに斬りかかろうとするが、ヤグモに止められる。

「佐祢丸殿。一緒に剣の道について語り合おうぞ」

そのまま、佐祢丸は連れて行かれた。

「…何だっただ？」

「ホントですよ」

「うおっ！？」

カインの横に座っていたのは、全身黒ずくめの青年、リアン＝ヴァンパイア。

「珍しいな。お前が来るなんて」

「まあ…ミラさんは来ていないんですか？」

「ああ」

「そうですか…」

そう言うと、リアンはどこかに行ってしまった。

「あいつこそ何だっただ？」

つづいて来たのは見たことが無い二人組だった。

「ヤッホー♪カイン君元気ー？」

「楽しんでるかー？」

「出たな。バカップル」

カインにバカップルと呼ばれたのは、ヒルグ・エニージオという温厚そうな男性と、アイシュ・タイレーンという活発そうな女性の正相反対なカップルだ。

「何？お前ら。いちやつきつぷりを見せつけに来たの？」

「本当にお前は口が悪いな」

「八割合ってるけど、二割不正解だね」

「ほぼ合ってんじゃないか」

アイシュはカインを完全に無視し、リルの方に向きなおした。

「あたしはアイシュ・タイレーン。こっちはヒルグ・エニージオ。よろしく♪」

「よろしくお願いします」

「じゃあね、カイン君」

アイシュは手を振って、どこかに行く。
それにヒルグが着いて行った。

「カインー！ー！！！」

「何だ何だ！？」

カインは急に話しかけられて驚く。
だが、声の主に気付いた途端、次から次へと言いそうな顔をした。
その正体は、トルージュ・ニルシレスだった。

トルージュは少年と手を繋いでやって来た。

「どうした？ってまあ、大体は分かるけどな」

「実はレック――」

「レックスの兄ちゃんがいなんだよ！」

トルージュが言おうとしたら、遮って少年が言った。

「こら！カリウス！お姉ちゃんが喋ろうとしてたでしょっ！！」

「お姉ちゃん！？」

「そうだよ！僕はカリウス・ニルシレス。お姉ちゃんの弟だよ！」

「ええっ！！？」

「で、レック君だっけ？」

「はい」

「レック君ならあそこで寝てるぞ」

カインが指さす方には、気にもたれ掛かって寝ているレック君がいた。

「レックス様――！！！！」

トルージュはレック君を見るや否やさつさと走りだした。

「『アース』には騒がしい奴しかいねえのかよ……」

「あんたもその内の一人なんだけどね」

「リリカさん！」

隣にいたのは、リリカ・ショーンズだった。

「リーフならあっちに行ってたぞー」

「なっ、だ、誰も聞いてないわよっ！でもまあ、一応様子を見に行

ってこようかしら!」

リリカは顔を赤らめて、走り去った。

「おい、遅なつてゴメンな」

「やっと来たか」

手を振りながら歩いて来たのは、『アース』の団長^{ボス}、スウェル・マクシード。

と、その後ろについて来たのは――

「ミラ!?!」

「いやー、暇そうやったから連れてきてもったわー」

ミラだった。

「スウェルさんが来いって言うから……その……」

「とにかく一緒に花見楽しもうぜ」

「……う、うん」

「そついや、今日の欠席者は?」

「えーと、クラウンと、二大不可視輝流士と、シユードやね」

「ふーん、確かにあいつらは来ないだろうな」

「ふ、ふえ、」

「? どうした? リル」

リルが急に口に手を当てたので、どうしたのか驚いた。
だが――

「へっくし!?!?!」

「くしゃみ!?!」

ただのくしゃみだった。

そして――

「風邪か？」

「いえ、違つと…へつくし…！思いますけど…へつきし…！…」

「これは…」

「^{ボス}団長！分かるのか！？」

「花粉症やな…！！」

「え？…」

ただの花粉症だった。

花見が終わり自宅にて。

「今日のお花見楽しかったですね」

「ああ、まさかリルが花粉症だったとはな」

「実はスウェルさんも花粉症らしいわよ」

「えっ!？」

「でもくしゃみとかしてなかったぞ？」

「空気を操って、花粉が来ないようにしてるんだって」

「…輝流ってそう言うところにも使えるんだな」

「便利ですね」

リルは必死に鼻をかんでいる。

「明日耳鼻科行くか」

「…はい」

第23話 『アース』恒例のお花見でメンバー大集合！（後書き）

（雪）「こんなにキアラ出したらすごい疲れた」

（力）「お疲れさん」

（雪）「ありがとう」

（力）「…お前花見やった？」

（雪）「いや、やってないから、作品でやってやろうと」

（力）「どうした？テンション低いぞ？」

（雪）「春休みが終わっちゃったからね…」

（力）「そ、そうか」

（雪）「……………」

（力）「次回からは新章突入！お楽しみにー！」

（雪）「お楽しみにー…」

（力）「（この空気耐えらんねえ…）」

第24話 ソディアック集合

「全員揃ってるか？」

スウェルは椅子に腰かけて、尋ねる。

「まだ獅子座^{レオ}と蛇遣い座^{オフィウクス}が来ていません」

「もー、獅子座^{レオ}は良いけど、蛇遣い座^{あのクソ親父}が遅れるなんて信じられな
い！腐ってんじゃないの？」

「おい、牡羊座^{アリエス}。女の子があんまそいう言葉を使うもんじゃね
ぞ」

「あつ！獅子座^{レオ}」

扉が開き、獅子座^{レオ}と呼ばれた金髪の男性が入ってくる。
その男性を見た途端、牡羊座^{アリエス}と呼ばれた少女は飛びついた。
獅子座^{レオ}は後ろに倒れそうになったが、なんとか堪える。

「やつと揃ったな。じゃ、始めよか」
「蛇遣い座^{オフィウクス}がまだ来ていませんが？」

白髪の男性が、尋ねる。

「それは追々話すわ——」

スウェルが会議に行く前、カイン、リーフ、リル、エリサの四人はスウェルの部屋兼本部……ではなく、本部兼スウェルの部屋に呼ばれていた。

「という事で、様子を見てきてほしいんよ」

スウェルから頼まれたのは、ゲルティア闇族の封印が解けていないか、確かめ

ることだった。

「で、どこにあるんだ？」

「それは――」

「なるほどな…ゲルティア 闇族の封印を解いて回ってるのは、蛇遣い座オフィウクスかもしれないって事か」

「確かにそれは蛇遣い座がない方が、話しやすいよな」
「で、次解かれるであろう封印場所って見当ついてんの？」

レオ獅子座はスウェルに尋ねるが、さすがにそれは知らないと言う。
だがそこで、先程まで黙っていた黒いコートを着た男性が口を開く。

「恐らく次は北西にあるヨーラス島にある塔だろう」
「何やって!？」

黒いコートの男性の言葉に、スウェルは思わず目を見開き、声を荒げる。

「何かあんのか？ビスケス 魚座」

「あそこには、うちの奴が行つとる。しかも…」

「しかも？」

「カイン・クリーク。炎の子や」

『!!!』

スウェルの言葉に、シャイニングソディアック 大地を照らす13星座の全員が驚いた。

「ふむ、あの子か。面白そうな子じゃったのう」

「そんなこたあどうでもいい!!それより早いとこどうにかしねえと、炎の子が蛇遣い座オフィウクスに会っちまったら…!!」

「なら僕が行きましょう」

白髪の男性が手を上げて言う。

「そうか。山羊座カプリコーン頼んだぞ」

「あたしももちろん行くで！」

「ならオレも行こう！！」

赤い髪の男性が行った後、場が凍りついた。

「射手座サジタリウスさん、シスコンぶりを発揮するのは別の所にてくれません？」

「うっせえ！！兄が妹思いで何が悪い！！」

またもや場が凍りつく。

「もういい。早く行ってくれ」

三人は何も言わず、出て行った。

「さて、することねえし解散で良いよな？」

それには誰も何も言わなかった。

「そう言えば牡牛座タウラス。何で分かったんだ？次の封印場所」

「…『千年万華鏡』」

「それをどこで？」

獅子座レオが真剣な眼差しで尋ねる。
だが、牡牛座タウラスはと言うと。

「ツイッターだ」

それを聞いて獅子座^{レオ}は苦笑する。

「お前いつからそんなにお茶目になったんだ？」

牡牛座^{タウラス}は何も言わず出ていく。

「あいつの情報網なめない方が良いと思うよ？あいつの部下優秀だから」

そう言い残して天秤座^{リブラ}も出て行き、一人また一人と出て行った。
やがて部屋は獅子座^{レオ}は一人になった。

「学級崩壊したみてえだな」

別に先生でも何でもないんだけどなと、獅子座^{レオ}は苦笑しながら出て行った。

ここはヨーラス島にある塔の中

「おいおい、聞いてねえぞ」

カインを含む四人は焦っていた。

何故なら何十人という敵に囲まれたからだ。

「これは、あれしかねえな」

「あれだな」

「あれね」

「あれ……？」

カイン・リーフ・エリサの三人は視線を交わした。

そして一斉に叫んだ。

「「「逃げるが勝ちだ！！！」」」

リーフとエリサが先に走りだし、カインはリルの手を引いて走る。

「くそつ！^{ゲルティア}闇族の封印場所だからって、こんなに人数いるか？」

「いや、もしここ守ってる人達なら私達犯罪人よね……」

そう言つて前を指差す。

そこには、前から来る敵を撃ちまくっているリーフの姿があった。

「バカ言え！『アース』の使いのもんだって言ったら囲まれたんだぜ？正当防衛だよ」

だがそれには返答が無かった。

不審に思つて、リーフは後ろに振り向いた。

だがそこには先程までの三人の姿は無かった。

「……………いやいやいや、だってさっきまで会話してたら？んでだよ！またかよあいつら」

どうやら自分が迷子になったという考えはないらしい。

仕方が無いので、リーフはとぼとぼ歩き始めた。

しばらく歩くとドアがあった。

もちろんそれを開けた。（撃つて）

そこに待っていたのは――

「まさか君がここに来るとはね」

「?…!! お前は…!!」

「思いだしてくれた？久し振り。リーフ」

その頃カイン達は。

「あれ？いつの間になくなったんだ？あいつ」
「いつもの事でしょ。大丈夫よ」

仕方が無いので、カイン達は歩き始めた。
しばらく歩くとドアがあった。

もちろんそれを開けた。（燃やして）
そこに待っていたのは――

「ん？君達かい？ここに迷い込んできた子猫ちゃん達は。久し振りだね」

「……？！ お前（あなた）は……！！」
「思いだしてくれたみたいだ――」

三人は一斉に口を開いた。

「……誰だっけ？」

第24話 ソディアック集合（後書き）

（カ）「あれ？作者がいねえ」

（リ）「何てでしょう？」

（カ）「まあ、良いや。次回もお楽しみに」

（リ）「お楽しみに♪」

（雪）「うわっ、わわわわ！！」

（リーフ）「待て！ゴラアア！！！！」

（カ&リル）「・・・・・・・・・・」

（カ）「何でだ？」

第25話 檻の恐怖

「誰だっけ?」

三人が同時に言うと、部屋にいた男は思い切り顔面からずっこけた。

「何だね!カイン・クリーク!貴様だけは忘れてはいかんだろ!」

「えっ?俺だけ?」

「そうだ。貴様だけは…」

「カインさん、何したんですか?」

カインは顎に手を当て、目を閉じて考える。

そして何かを閃いたように、目を開く。

「もしかして、アポン・カスタマイゾ・ヌベルボツチャー君?」

「誰だいそれは!」

「違うわよ。あれは『せせらぎの宿』の人でしょ」

「ああ、そうだっけ?」

（というより、そんな名前の人がいる事については誰もツツコまないんですね…）

カインは先程と同じ姿勢で再度考える。

そして思い出したのかと思いきや…。

「誰だっけ?」

「結果それかい!」

「いや、ごめん。俺人の顔と名前覚えるの苦手なんだよ」

カインは笑みを浮かべる。
そして、男は齒軋りをする。

「僕の名前は、エーゴイル・サムレングス。貴様に父を殺された男だ……！」

「サムレングス？……ああ、あのクズの子供か……」

「カインさんが……人を殺した……？」

「ああ、そうだ。そいつは人殺しだ」

リルはカインの方を見る。

その時のカインの目は、怒りに満ち溢れていた。

「そうか……パーティで一回あったな」

「ようやく思い出したか」

「……てめえに用はねえ。失せな」

「こっちはそう言う訳にはいかないんだよっ……！」

そう言つて、エーゴイルは服の袖にしまっていた鉄の棒を取り出し、カインに殴りかかる。

それをカインは、炎を灯した手で受け止め、棒を溶かす。

エーゴイルは、一度離れる。

「貴様にも大切な人を失う辛さを教えてやろう……！！」

そう言つと、エーゴイルは指を組む。

「輝力奪略の檻^{ケージ}……！」

カインの上から鉄格子の檻が現れ、カインを閉じ込める。

「まさかこれは…!!」

「これで貴様は動けない上に、その女の子たちは死ぬ」
「二人共逃げろ!!今のこいつは…」

「俺の能力が使える!!」

ここはとある一室

「もうやつとるのか…」

「エーゴイルは奴に強い恨みを持つておるからの」

「しかし、あなたも悪いお方だ。あんな事を言つて…」

「ふっ、別にいけない事は無いだろう。そう言えば、主もカインと戦いたいのではなかったか？」

「宜しいので？」

「構わんよ」

それを聞くと片方の男が出ていく。

「あいつの方は…まだお話し中か」

ここはリーフのいる部屋。

「何でお前がこんな所に…」

「会いたかったよ。リーフ」

「質問に答えるよ！！アシード！！」

アシードと呼ばれた銀髪の青年はニッコリと微笑む。

「そんなに僕と話すのは嫌かい？」

「違う！！何でお前がこんな所に——」

「正直に言ったらどうだい？」

アシードの顔が冷たいものになる。

「『何でお前が…』」

リーフが少し動揺する。

「生きているんだ？』ってね」

アシードの顔がまたニツコリとした表情になる。

「少し話をしようよ…リーフ」

その言葉がリーフにはとても重く感じられた。

「カインさんの能力が使えるって……」

「今の俺とあいつは、言ってしまうえば二人で一つみてえなもんだ！俺の輝力はあいつのもんになってる……！」

その言葉に、エリサは笑みを浮かべて前に出る。

「という事は、あいつを倒せばあんたを倒したようなもんなんですよ？」

「絶対にカインさんを助けます……！」

「カイン、貴様は目の前で仲間が死ぬのを見ることになるぞ」

エーゴイルはカインの方を見て、手に炎を灯す。

「あんたみたいなのに私達は負けないわよ……！」

「そういうことです……！」

エリサは指を組み、詠唱を始める。

エーゴイルがエリサの方に向かうが、リルがエリサの前に立つ。

「行きます!!」

リルが手を前に出すと、手からシャボン玉が数個出てきた。

「シャボン・ランチャー!!」

シャボン玉が、エーゴイルの方に向かい体に当たった瞬間爆発した。

「ぐっ、何だっ!!」

「これって…」

「スウエルさんに扱い方を教えてもらってたんです!」

「雷散!!」

詠唱を終えたエリサの手から、いくつもの雷がエーゴイルを襲う。

「ぐはっ!くそが…ぶっ殺してやる」

手に灯していた炎が大きくなり、そして傷も治っていく。
それに合わせてカインが苦しそうにする。

「カインさん!!」

「輝流を使わずに輝力だけ奪われているんだ。さぞかし辛いだろうなあ」

そう言つて、更に炎を大きくした。

「くっ…はあ…はあ…俺は、いいから…」

「許さない…」

リルの手からシャボン玉が大量に出る。

「それ以上カインさんを苦しませないで！……！」
「やだね」

今度は左手にも同じくらいの大きさの炎を灯す。

「ぐあっ！……くはっ……はぁ……うっ！」

カインは地面に膝をつく。

「やめてっ！……！」

シャボン玉がエーゴイルに向かっていくが、炎でかき消される。

「……リルちゃん」

「何ですか？」

「作戦があるの」

エリサはリルに耳打ちをする。

リルは一度頷きシャボン玉を出す。

「さて、私達の連携を見せてやろうか！」

「はい……！」

「掛かって来いよ。あんまチンタラやってるとカインの輝力を全部使うぞ？」

第二ラウンドのゴングが鳴った。

第25話 檻の恐怖（後書き）

（雪）「ヤバイヤバイ…」

（リ）「どうしたんですか？」

（雪）「いやぁ、つくづく文才ないなぁと思って」

（力）「そりゃ元からだろ」

（雪）「そうだけど…」

（リ）「？」

（雪）「これ続けてたらもうちょいマシになると思ったのに」

（力）「考えが甘かったな」

（雪）「スイマセン…」

（リ）「次回予告だけでも…」

（雪）「今回はリル&エリサvsエーゴイル決着です！」

（リ）「それでは次回もお楽しみに」

（雪）「リルがいるとまともだなぁ」

（力）「俺がいないとまともにはできないみたいな言い方だな」

（雪）「そうですけど!？」

第26話 決着！vsエーゴイル

エーゴイルはこちらを見てにやにやしている。

「作戦？そんな物で僕を倒せるとでも？」

「その過信をすぐにぶっ壊してやるわ！」

エリサは詠唱を始め、リルはシャボン玉を発射する。
シャボン玉は炎によってかき消される。

「その地に祀られし聖なる水よ。アクアシュート！」

エリサがエーゴイルに水を発射し、炎を消す。
水はエーゴイルの周りに飛び散る。

その瞬間を見計らってリルがシャボン玉を発射させ、爆発させる。

「ちつ、消えるおお！！！」

「きゃあっ！！！」

「リルちゃん！」

エーゴイルの出した炎が、リルに当たる。

そのせいでリルは手にやけどを負う。

再度シャボン玉を発射する。

だが今度は、エーゴイルに当たる前に爆発する。
するとエーゴイルの体に水が掛かる。

「何だ！？」

「さっきエリサさんが出した水をシャボン玉に閉じ込めていたんです」

「ただの水か…」

「ただの水で十分なのよ！」

エリサはもう一度詠唱を始める。

「天を迸る脅威の一撃。身を翻し舞い踊る恐怖の黒雲…」
「この詠唱は…超級魔術！！」

エーゴイルは詠唱を止めようとエリサの方へと向かう。
それをリルはシャボン玉で妨害する。
しかし、全て炎でかき消される。

「マズい…！！」

「…そうだ！」

カインは何かを思い出したように、手から炎を出す。
するとエーゴイルの炎が段々小さくなっていく。

やがて、シャボン玉をかき消せなくなり、シャボン玉はエーゴイルに当たり爆発する。

「何だって！？」

「二つの力は一つに交わり、この世に天災を齎す…」

エリサは腕を振り上げる。

するとエーゴイルの頭上に大きな黒雲ができる。

「終結せよ！！天驚交わる終末の霹靂！！！！！！」

「魔術士の名の元に沈め…」

そして、振り下ろすと同時に激しい音を立てて、黒雲から凄まじい雷がエーゴイルに落ちる。

エーゴイルが倒れると、カインを捕えていた檻が消える。

「カインさん!!」

リルはすぐさまカインに駆け寄る。

「大丈夫ですか!？」

「ああ…」

「く…くそがぁ…」

エーゴイルは立ち上がろうとするが体に力が入らず、うまく立ち上がれない。

「何故だ…ば、くが…」

「お前は自分の能力の弱点を知らなかったみてえだな」

「じゃく、てんだ、と…?」

「あの檻の弱点は中の人物に『輝流を使われる』事だ」

エーゴイルは驚くが、すぐに反論する。

「だが、そんなことは…今まで、に、一度も…」

「あの檻の中で輝流を使えるのはお前より輝力が多い奴だけだ」
「なっ…!!」

「まっ、正確には使える輝力が半減するだけだけだな」
「それにしてもよくそんなこと知ってたわね」

エリサがカインに尋ねる。

カインはエーゴイルを親指で指差す。

「さっきこいつが言ってたろ。俺はこいつの親父を殺した。そいつも似たような技使って来たんだよ」

「そう…」

「…そう言えば、あなたたちはここで何をしてたんですか？」

「知らなかったのか？…ここには、ゲルティア闇族の、封印場所があるんだよ…」

「まさか封印を…!!」

三人は封印場所がここにあることは、スウェルから聞いていたので知っていた。

だが、エーゴイル達も知っているとは思っていなかった。

「二人はリーフと合流して封印場所に急げ!!」

「あんたは!？」

「輝力を奪われ過ぎた。少し休んでから…」

「それは私も同じ——っ!!」

エリサはカインの気迫に気圧される。

「いいから早く」

「…わ、分かった」

エリサとリルは走って部屋を出ていく。

カインは二人が部屋を出ていく所まで見てから、自分達が入って来た方を睨む。

「出てこいよ。それで隠れてるつもりか？」

カインが言うと、黒装束を着た金髪で肌が浅黒い、身長が190cm

mを超えているであろう男が現れた。

「気付いとったか」

「なんだ。本当に隠れてるつもりだったのか。あれで」

「さっきの子らは気付いてなかったかのう…さすが元聖か――

――」

カインは炎を纏った手で男を殴ろうとする。

しかし、それは普通に躲される。

「てめえ、それをどこで…そうか。こいつか」

そう言つてエーゴイルを見る。

「輝力を大量に奪われた主がわしに勝てるかのう」

「なめんじゃねえよ。おっさん！」

ところ変わってリーフサイド。

「話をするだつて？」

「ああ、そうさ。僕が何故生きているか、とか…そうそうリリカとセルシアは元気？」

「リリカは元気にしてる。セルシアは…死んだ」

それを聞いた途端、アシードは目を見開き驚く。

「何だつて…！何故セルシアは…」

「あいつは…俺達を守つて——」

「…そうか。死んでしまったのは仕方がないな」

アシードの突然の言葉にリーフは驚く。

「今…何て？」

「だから、死んでしまったのは仕方ないって言ったんだ」

アシードのケロッツとした態度に、リーフは齒軋りし銃を向ける。

「アシードはそんな事を言う奴じゃなかった…!!」

「それは昔の話だろ？人は変わるんだよ」

「だからさっきみてえな事が言えたのかよ!!」

「そうだけど？」

リーフは自身の出せる最も大きな弾を放った。

「無駄だよ」

アシードは手を前に出す。

すると、弾はアシードには当たらずリーフに帰ってくる。
それをなんとか躲すリーフ。

「僕にそんな技は効かないよ」

「どういう事だ…!!」

「それは違うからさ…」

「何が違うんだ！」

アシードは不敵に笑みを浮かべる。

「それは…ただの輝流と——」

その笑みは大きな笑いとなる。

「破動の違いだよ…!!」

「なっ……!!」

「話をしようと思ったけどやっぱやめた」

リーフは銃を構える。

アシードは手を前に出す。

「お前もセルシアの元へ送ってやるよ!!リーフウウ……!!」

その瞬間リーフの体のあちこちが斬り裂かれた。

第26話 決着！vsエーゴイル（後書き）

（力）「お前って色々始めるの好きだよな…」

（雪）「いやあ、やりたい事はやっとかないと」

（力）「それは一理あるかもな」

（雪）「でしょ！？という事でキャラクター人気投票をよろしくお願いします！」

（力）「これからもどんどんキャラが出るからな！」

（雪）「投票は一度しか出来ないのご注意ください」

（力）「ついでに感想もくれると助かるわ」

（雪）「敬語を使え！！えー、感想の方もよろしくお願いします」

第27話 相殺と破壊（前書き）

エリサの決め台詞を忘れていました!!
すいません！修正しました。

第27話 相殺と破壊

「がっ…!!」(何だ!?何もされてないのに…斬られた?)

リーフはアシードの方を見る。

アシードは右手を前に突き出している。

すると、またもやリーフは体中を斬られる。

「くそっ…!!」

「無駄だつてば」

リーフの撃ち出した弾は何故か返される。

しかし、リーフは弾を撃った瞬間に物陰に隠れる。

「あれ?どこに行ったんだい?」

「くそっ!」(一体何が起きてんだ…!!)

アシードは手を上に構える。

「隠れても無駄だよ…そこか!!」

アシードが言った瞬間リーフは左肩から腹に向かって斬り裂かれる。

「ちっ…!!」(何でばれたんだ!?)

「まだおしまいじゃないよね?」

(あいつの能力が分かんねえんじゃ勝ち目はねえ…!)

アシードはリーフに向けて人差し指を向ける。

「そつちが銃ならこつちも…ね!!」

リーフは直感的に危険だと思い、その場を離れる。するとリーフのいた場所の後ろの壁が深く抉れる。それを見てリーフは何かに気付く。

「惜しいなあ。もうちょっとだったのに」

「…なるほどな。そういう事か」

「何の事？」

アシードはわざとらしく首を傾げる。

「…お前の能力の事だよ」

カインサイド――

「……！ もう始めたか」

「リーフ……」

「人の事を心配しとる場合じゃなからう……！」

突然、カインの立っている地面が浮かぶ。

カインはその場を離れる。

「脅かすなよ。おっさん！」

「おっさんではない。わしの名はゼルギル・ブルーアクセス」

「あっそ！」

カインは左手に炎を灯し、ゼルギルに向かう。

ゼルギルは避けようとせず、カインのパンチを食らう。

だが、何もなかったかのように立っている。

「その程度の攻撃じゃわしは倒せんのだ」

ゼルギルは拳を握り後ろに引く。

カインはその場を離れる。

しかし、カインの体はゼルギルの元に戻っていき、ゼルギルのパンチを腹に食らう。

「がはっ……！！！」

カインはそのまま吹っ飛び、壁に激突する。

「いつてえ……」

カインは殴られた腹をさする。

「まだ逃がさんぞ」

ゼルギルが手を前に出すとそれにつられてカインが引っ張られるように、ゼルギルの方に飛んで行く。
そして、またもや殴られ吹っ飛ぶ。

「ぐ……くっそ」

「輝力が尽きかけておる主など最早わしに勝つことは不可能じゃ」
「へっ！そりやどうだかなあ」

そう言いカインは首巻に手を掛ける。

リーフサイド――

「僕的能力が分かっただって？」

「ああ、結論から言ってお前の能力は『風』かなんかだろ」

「…なんでそう思う？」

リーフはヘツと笑う。

「さっきまでの斬撃や銃撃は俺の目には見えなかった。最初はただ速いだけだと思ってたが、違うと思ったのは隠れてた俺を見つけたからだ」

「・・・・・・」

「斬撃や銃撃じゃ俺を捜す事は出来ねえ。だから通常なら目では見えない物で攻撃してたってことになってくる」

「ふふふっ！」

「…何がおかしい？」

「いやね…」

先程まで笑っていたが、突然表情が冷たい物へと変わる。

「僕のが分かった位で勝った気になっているのがおかしくってね」

「別に勝った気にはなってねえよ」

リーフは銃口をアシードに向ける。

「これから勝つんだから！！」

そう言うと同時にリーフは引き金を引く。
弾は当然のように返される。

だが、アシードの右肩から血が噴き出す。

「何っ！？」

「へっ！ビンゴ」

「一体何をした！！」

「これだよ」

リーフは左手の銃を掲げる。

「こっちには実弾が入ってんだよ」

「…なんだ。ただの子供騙しか。しかも自らネタをバラすなんてね」

「良いんだよ。もう実弾は入ってねーし」

そう言ってリーフは両手の銃をアシードに向ける。

「荒れ狂う竜巻弾!!!」
テンバストフレット

二つの銃口から同時に竜巻が放たれる。

「風には風をつてな!!」

「その考えは甘いね」

アシードは手を竜巻に向ける。

すると、竜巻はリーフに向かって返ってくる。

「竜巻だって風だ」

「なっ!ぐあああ!!!」

竜巻はリーフに直撃する。

リーフは竜巻により天井に叩きつけられ、そのまま床に落下する。

「あれえ?もう終わり?」

アシードがリーフに近付く。

その瞬間リーフが銃をアシードに向かって構え撃つ。

それに対処できず、アシードは弾をモロに食らう。

「ぐあつー!!」

「様^{さま}あ見ろ!!」

「くそ…不意打ちなんて卑怯な…」

「不意突^{わり}かれる方が悪いんだよ」

リーフとアシードはそれぞれ立ち上がる。

そして、リーフは銃をアシードは手を構える。

「破動の力を思い知らせてやる!!^{ヘルズストーム}飄々たる疾風!!!」

アシードから目でも分かるほどとてつもなく大きな風が刃となってリーフを襲う。

「^{ファイアフルブレイカー}相殺する虎閃弾!!!」

左手の銃から虎の形をした弾が発射される。
その弾は風の刃とぶつかって相殺される。

「左は相殺、そして右は…破壊だ!!!」

右手の銃から光が漏れ出す勢いで充填されている。

「これで終わりだ…^{エンペラーキャノン}帝王の断罪!!!」

先程の限界の大きさの弾を遥かに凌ぐ大きさの弾を放った。
そのせいで右手の銃は壊れてしまった。

「撃ち放つ…」

「崩壊の銃撃を!!!」

弾がアシードを呑み込んだ。

第27話 相殺と破壊（後書き）

（雪）「この小説って人気あるのかなあ？」

（力）「どうした急に？…ないだろ」

（雪）「そんなハッキリと言うもんか！？」

（力）「時に優しく、時に厳しく」

（雪）「優しくなんてされたことないわ！！」

（力）「あれ？そうだったか？」

（雪）「これ以上話しても無駄だわ…」

（力）「それじゃ、感想と人気投票をよろしく」
「」

（雪）「よろしくお願いします！！」

第28話 憎しみの完成

アシードは光に包まれながら昔の事を思い出していた。

——憎い。憎い。何もかもが…

——これは今から八年前の事

「お前ら！アシードを虐めるな！！」
「ヤベツ！リーフだ！逃げる！！」

リーフは虐めっ子を追い返した。
当時九歳だったリーフは虐められっ子を守るヒーローのような子だった。

「リーフ…いつもありがとう…」
「気にすんな。俺達友達だろ？」
「…うん」
「リーフー、アシードー」
「おっ、セルシアとリリカだ」

リーフ達に向かって走ってくる少女が二人いた。
一人は栗色の髪の大しそうな少女。
もう一人は水色の髪の活発そうな少女だ。

「アシード大丈夫！？また虐められたの？」
「だ、大丈夫だよ。リーフが助けてくれたんだ」
「そうだった」

リーフは胸を張って言う。

「そっか。リーフがね…」

リリカは少しからかう様な目でリーフを見る。

「何だよ！」

「いやあ、リーフも変わったよね」

「そうそう、昔はどっちかというと虐めっ子の方だったのにな」
「む、昔の事は忘れた」

それを聞いてリリカとセルシアは笑う。
そんな三人を見てアシードも微笑む。

「よし、今日は何して遊ぼうかな」

「あの丘に行こうよ！」

「セルシアはあそこが好きだな」

「だって綺麗なんだもん！」

セルシアの提案に誰も反対することはせず、丘に行く事になった。

丘は森を抜けた所にある。

森は昼でも薄暗く、あまり人は通らない。

「何か出そうだな。ここって」

「そ、そんな事言わないでよ！」

「あれねえ？リリカさんは怖いのかなあ？」

「別にそんな事——」

そんな事ない、と言おうとしたが突然草むらが揺れ、思わず驚く。
四人は草むらを見ていた。

すると、草むらからウサギが出て来た。

「な、なんだ…ウサギか…」

「分かったなら、離してくれ」

「あつ、ご、ごめん／＼／」

リリカはいつの間にかリーフを抱きしめていた。

あまりに強く抱きしめていたものだからリーフは少し苦しそうに言
った。

それに気付いたリリカは顔を真っ赤にして離れる。

「お二人さん、こんな所でイチヤイチヤしなくても…」

「「イチヤイチヤなんてしてない！！／＼／＼／」」

「息もぴったりでお熱いわねえ」

セルシアは結構マセていた。

そんなこんなやっているのと四人は丘に着いた。
花は咲き乱れ、風はそよそよと吹く。

「ホントに綺麗よね！ここ」
「そうだね」

セルシアとアシードは向こうの方で遊んでいる。
リーフは気にもたれ掛かって昼寝をし、リリカは花で冠を作りリーフの頭に乗せていた。

「良い感じに出来たわ」
「zzz…」
「ねえ、セルシア。この花はなんていう花なの？」
「それは『イエローレッド』っていうお花よ」
「黄色…？赤…？」

四人は思い思いのことをして楽しんでいた。
やがて、日は暮れて空には点々と星が輝きだした。

「あつ！大変！もう夜になっちゃう！」
「早く帰ろうぜ」

四人は急いで森を抜けようと思い走った。
走っているとき道の道と同じように草むらが揺れた。
どうせまたウサギだと思った四人はまた走ろうとした。
しかし、草むらから出て来たのは2m程の大きさの熊だった。

「なっ、熊！？」
「とりあえず皆は逃げろ！！」
「リーフはどうするの！？」

リーフは近くに落ちていた木の棒を拾って答えた。

「ちょっと時間を稼いだらすぐ行くから！早く！！」

リーフは後ろを向いて叫ぶ。

その一瞬が命取りになり、リーフは熊に前足で殴られる。
そのまま吹っ飛び、樹に激突し崩れ落ちる。

「リーフ！！」

「く、くそお！！」

アシードは石を拾い、熊目掛けて投げつける。
すると、それは運よく熊の目に当たる。

「い、今のうちに！」

アシードはリーフの元へと走る。
しかし、熊が暴れ、振るっていた腕がアシードに当たり吹っ飛ぶ。
アシードはそのまま後ろにあった崖に落ち、熊は草むらに帰って行った。

「アシードオ！！！！」

「リーフ、大丈夫！？」

「それより、アシードを……」

リーフ達は回り道をして崖の下へと向かった。

「う…僕は…」

アシードは目を覚ました。

しかし、体中が痛み、動くことができない。

『お前はいずれ死ぬぞ…』

「君は…誰…？」

『私はお前の中の憎悪だ』

「ぞう、お…？」

『そうだ。お前はこんな目にあつて少なからず憎悪を抱いているはずだ』

「そんな、事は…ない…」

『本当にそうか？お前だけこんな所で死にかけて…自分の運命を憎んでいるのではないか？』

アシードは目を見開く。

そして、今までの思い出が甦る。

「僕は…リーフ、リリカ…それに、セルシア、皆に会えたんだ…そんな運命を、憎んでなんか…ない」

『その皆は今お前を助けてくれているか？』

「もうすぐ…来てくれるはず…」

『いや、奴らはお前を見捨てて帰った』

「！！　嘘だ…」

『信じたくないのも分かる。だがこれが事実だ』

「そんな…」

『憎いだろう？運命も。友達も』

「……………」

『私の手を取れ。そうすれば、お前は運命から決別することができ
る』

アシードは手を差し伸べられる。

その手をゆっくりと掴み返す。

「僕はこの運命を許さない。絶対に」

『そうだ。共に行こう…』

アシードは黒い霧に包まれた。

その後、リーフ達はアシードを朝になるまで捜した。

しかし、とうとうアシードは見つからなかった。

街では、アシードは死んでしまったという事になった。

それきり、セルシアは部屋を出なくなり、病気になってしまった。

その病気は治る事はなく、どんどん悪化していき――

「そうだ…僕は、裏切られて…」
『思いだしたか。今こそ奴に思い知らせてやれ』
「ああ」

アシードは自分を呑み込んでいた光を消し飛ばす。
リーフはそれに驚く。
アシードからは黒い靄が出ている。

「お前に本当の恐怖を教えてやろう…」
「…てめえ、アシードじゃねえな」
「気付いたか。私はアシードであってアシードではない」
「どういうこった？」
「私はこいつの中の憎悪。そして今完成した」

リーフは何の事だと尋ねる。
すると、アシードは高笑いする。

「私は^{ゲルティア}閻族として完成したんだよ！！」

そう言うと、アシードの口から黒い靄が一気に放出され、アシード

はその場に崩れる。

靄は一点に集まり人の形をなしていく。

「てめえがアシードを…」

「私はエルセドメス。もうアシードではない」

「初めてだ…」

「？」

次の瞬間、リーフからものすごい量の輝力が溢れ出る。
そして、その輝力はリーフの右手に集まり銃になる。

「ここまで何かを許せねえと思ったのは…初めてだ！…！」

第28話 憎しみの完成（後書き）

（力）「おい、俺の出番はいつ来るんだよ」

（雪）「さあ…」

（力）「てか、ちゃんと出番来るんだろうなあ」

（雪）「それは安心して。ちゃんと来るから」

（力）「まあ、そう言うなら…」

（雪）「次回もお楽しみに！」

（力）「最近強制終了が無いな」

（雪）「良い事だと思うよ？うん」

キャラクター人気投票を何回でもできるようにしました。
お気軽にお願いします。

第29話 蒼炎

「くそっ！」

カインは片膝をついて右肩を抑えていた。右肩からは血が溢れ出ている。

「外す暇がねえ！」

「まだ終わりじゃなかるう」

そう言つてゼルギルは右手を前に出す。

するとカインの体が浮いて右手に吸い寄せられる。

それに対して、カインは両手を前に向けて炎を出して対抗した。

「ぐ……らああああ……！！！！！」

だが、吸い寄せる力の方が強く、カインはゼルギルに吸い寄せられる。殴られる。

殴り飛ばされたカインは首巻を外そうとするが、また吸い寄せられ上手く外せない。

「あんま使いたくなかつたんだけどな……」

カインは腰を落として、手を下に構える。

「行くぜ！紅炎の羽衣……！」
フライトメール

そう叫んだ瞬間、カインの全身から紅蓮の炎が現れ、カインを包み込む。

「なっ…!!」

吸い寄せられていたカインはそのままゼルギルに突進していった。
そして、お返しと言わんばかりにゼルギルを殴り飛ばす。

「さーで、こっからが本番だ」

そう言っているとカインは首巻を外した。

「覚悟しろよ…!!」

——リル&エリササイド

「カインさん…大丈夫でしょうか」

「…大丈夫…とはい切れないわね」

二人は廊下で話しあっていた。

先程から聞こえてくる爆発音などでカインとリーフの安否が心配になっ

てきている。

特に心配な方はカインだ。
だてぶ輝力を奪われていたので、もし敵に出会ってしまったらという不安が大きいのだ。

「でも、何であそこに残ったんでしょうか。三人でいた方が安全なのに…」

「まさか…!!」

突然エリサは立ち止まり、通って来た廊下を振り返る。
そして俯いて小さく齒軋りする。

「あのバカ……！！！」

「何だろう……このおと——」

その時、激しい爆発音と共にリル達の後ろの壁（最初向いていた方が崩れる。

すると、何者かが吹き飛んできて向かいの壁に激突する。

「ガハッ！まだここまでの力が残っていたとは……」

男がそう言つと、崩れた壁からリーフが銃を構えて出てくる。

「リーフさん！」

「良かった……」

リーフはその声でリルとエリサに気付くが、またすぐに男に振り返る。

「待てっ！私はもう一人のアシードだぞ！私を殺せばアシードは二度と元に戻らなくなる……！」

それを聞いてリーフの動きがピタツと止まる。

男も安心していた。

が、しかし——

「てめえを助けた所でアシードが元に戻るとは限らねえ」

リーフは銃に輝力を込める。
すると銃が赤く光る。

「貫通駆葬の門集弾……！」

銃から百以上の弾を発射し、男の体を貫通させる。

男は体中穴だらけになり、もう原型をなしていなかった。

「アシード…すまない」

そう言うとなりの体は黒くなっていき消滅した。

リーフはそれを見ると、リル達のいる方の逆に歩いていく。

「ちょっとリーフ！またはぐれるわよ！」

エリサが呼びかけるがリーフは止まらない。

「何処行くのよ！」

「アシードを利用した奴を…」

リーフは生まれて初めて本気でその言葉を口にした。

「殺しに行く…！！！」

——カインサイド

「なんじゃ…その炎は…!!」

ゼルギルの目の前には信じられない光景が広がっていた。
ありえない光景というのは——

「これは俺の破動——蒼炎、もしくは蒼穹の焰^{ブルーフレイム}」

カインの手から蒼い炎が出ているという事だ。

（あんま使いすぎると暴走するからさっさと終わらせねえと…）
「…まだ少しは楽しめるという事かのう…」

ゼルギルは手を前に出す。

すると、例によってカインは吸い寄せられる。

「馬鹿の一つ覚えかよ。もうてめえの能力は見破ってんだよ！」

カインは手から蒼炎を発射する。

だが、蒼炎は何故か途中で地面に落ち、それと同時にカインに掛かっていた力も解除された。

「てめえの能力は何か一つしか操る事が出来ない。それどころか近付かれてカウンターもされかねない。使い勝手が悪い能力だよな」
「…確かにそうかもしれないのう。じゃがわしの能力『重力』には他の使い方もある。例えば」

ゼルギルが手を前に出すと、カインが地面に叩きつけられる。

「ぐあっ！！」

「お主にかかる重力を操って立てなくする事や…」
「くらいやがれ！！！」

カインは蒼炎を体に纏わせ立つ。

そして、蒼炎をゼルギルに放つ。

だが、ゼルギルは浮遊し蒼炎を避ける。

「こうして自分の重力を操り浮く事も出来る」
「そうかよ。なら俺も。蒼炎の羽衣——ブルーメイルver・フェニックス不死鳥」

そう言うと、カインの背中から蒼炎で作られた大きな翼が現れる。
そのままゼルギルの方に飛んで行き殴り飛ばす。

「さっさと終わらせてやるから立てよ」

「あまり調子に乗るな…!!」

第29話 蒼炎（後書き）

（力）「おい、かなり久し振りじゃねえか。何してたんだ？」

（雪）「いやあ、修学旅行に行つてたんだよねえ」

（力）「へえ、いつから？」

（雪）「15日から」

（力）「それまでも投稿できたろっ！！」

（雪）「仕方ないじゃんか！これだけが連載じゃないんだぞ！」

（力）「…まあ良いや。お土産は？」

（雪）「え？何？君達にあるとでも？」

（アース一同）『無いの？』

（雪）「うおっ！いつの間に…」

（デルス）「本当に無いんですか？」

（雪）「うん」

（ほぼ全）『てめええええ！！！！！！！！』

（雪）「あるわけないじゃんかあああ！！！！！！！！」

（デ）「作者があんな状態なので続けるのは無理そうですね」

（トルージユ）「では次回もお楽しみにですわ」

（エリサ）（出番ないからちょっとでも出たいんだろうなあ…）

（リル）「感想もお願いします。質問でも良いので」

第30話 調子に乗るな

エリサとリルはリーフに付いていつている。
その時、リルは後ろから何かを感じて振り返る。

「カイン…さん…？」

「どうしたの？リルちゃん」

「…いえ、何でもないです」

リルはどこかで感じた何かを考えてみる。
しかし、それが何かはわからなかった。

——カインサイド

「そっぴゃ、一つ聞きてえ事がある」

「何じゃ？」

「てめえの他に後何人いるんだ？」

「…わしに勝てたら教えてやろう」

カインは地面に降りて言う。

「在り来りな事言つてんじゃねえよ。燃やすぞ」

「親切にしてやったつもりなんじゃがな」

「あつそ。そうえんれっしょうげき蒼炎烈衝撃！！」

カインはゼルギルに飛んで近づき、腹に蒼炎の塊を放った。ゼルギルは後ろに吹っ飛ぶが、すぐに立ち上がる。

グラヴィティ・ボール
「重礫の錬球場」

ゼルギルの後ろに、床や壁がはがれて集まっていく。

「な、何それ……」

そのまま壁や床は塊となつて、カインに飛んでいく。
カインはそれをなんとか避ける。

「ちよつ、あれは死ぬつて！」

「わしはお主を殺すつもりだ」

「……調子に乗んなよ」

カインは右手に大きな蒼炎を纏う。

「殺す？今まで何人殺したかは知らねえがな……」

カインは一瞬でゼルギルの前まで移動して――

「軽い覚悟でそんな事言つてんじゃねえ！……！！！」

思い切り殴り飛ばした。

ゼルギルはすぐに立ち上がり、血を吐きだす。

「どうした？俺を殺すんだろ？」

「……」

「出来るもんなら……」

カインは右腕を振りかぶり――

「やってみやがれえええ！……！！！」

大きな火球を投げつける。
火球はゼルギルに当たり、爆発する。

「ぬ…ぐううう…!!!!」

「立てよ。二度と殺すなんて言えねえようにしてやるよ」
「…仕方ない…アレをするか」

ゼルギルは体の前で手を組む。
そしてその手を体に当てる。
すると、カインは急に後ろに吹っ飛ぶ。

「なっ…!?!」

蒼炎を床に突き立ててなんとか止まるが、まだ吹き飛ばされそうになる。

「てめえ…まさか」

「今のお主とわしは磁石の同じ極同士のような関係になった。もうお主はわしに近付けん」

「…言つちまえばてめえも近付けねえだろ」

「その心配は無用じゃ」

ゼルギルの後ろにまた塊ができる。

そして、カインに向かって飛んでいくが、やはりなんとか避ける。
しかし、支えが無くなってしまったので後ろに吹っ飛び壁に叩きつけられる。

「がつ!」

そこに塊が飛んでいく。

これは避ける事ができず、両手に蒼炎を纏って受け止めた。

（やべえ…早くしねえと…）

カインは力を込めて塊を壊す。

「蒼炎の羽衣——ver・蒼炎龍」
ブルーメール トリコロン

カインの周りに蒼炎でできた龍が現れる。

その時、カインが苦しそうに胸に手を当てる。

（これで終わらせねえと…）

「何をしても無駄じゃ。わしには近付けん」

「くらええええ！！！」

蒼炎龍はゼルギルに近付いていく。

だが、だんだんスピードが無くなっていく。

「無駄じゃと言ったろうが！！！」

「くそっ！まだだああ！！！」

カインは蒼炎龍に飛び込んで頭まで達する。

「行けええ！！！！！！！」

「なっ！！！！？」

蒼炎龍はスピードを取り戻して一気にゼルギルに突っ込んだ。

「燃え尽きる…」

「バカな……」

「灼熱の火炎によつて……!!」

ゼルギルは炎に呑み込まれた。
だが、すぐに炎は消える。

「……何じゃ？」

「てめえには聞かねえといけねえ事がある」

カインはゼルギルの胸倉を掴む。

「教えな。お前らの仲間は何人いる」

「……わしを含めて4人じゃ」

「素直じゃねえか。あと一つだ」

カインは胸倉を掴んでいた手に力を込める。

「ここにはどんなゲルディア閥族がいるんだ？」

「……それまでは知らん。ただ早くした方がええぞ」

「何故だ？」

「わしらのトップはシャイニングソディアック大地を照らす13星座だからじゃ」

「何だつて！？——ぐっ！」

カインはゼルギルを突き飛ばす。

ゼルギルが見上げるとカインの体から大量の蒼炎が出ていた。

「ぐあああああああ……!!……!!……!!」

カインは膝をつき苦しむ。

「離れてろっ！！！！ぐあああああああ！！！！！！！！」

ゼルギルはカインから離れる。

その瞬間、カインの体から蒼炎が消えた。

そして何者かによって首巻がされる。

「いやあ、ホンマにどんな炎でも酸素が無いと燃え続けられへんのやなあ」

「何で…あんたがここに？」

「まあ…」

「あんたらのボスやし」

そう、それは『アース』のボス、スウェル・マクシードだった。

—— リーフ、リル、エリササイド

三人は大きな扉の前に立っていた。
リーフはそれを銃で壊す。

「来てしまったか… たく、あいつらは使えんな」
「てめえか。アシードを利用した奴は…!!」
「利用？ 人聞きが悪いな。あそこまで育ててやったのだ」

男は嘲笑う。

リーフは何も言わずに男を撃つ。

「はっ！ 『アース』 というのは炎の子以外全員屑か」
「なにもん何者だ。てめえ…!!」

「私は大地を照らす13星座の蛇遣い座のスラーク・ルイゴッドだ」
「なっ！」

「大地を照らす13星座!？」

「主ら如きでは私には勝てんよ」

スラークはもう一度嘲笑う。

「じゃあ、俺達ならどうだろうな」

「すいません。一緒にしないでもらえますか？」
「んだとコラッ!！」

突然リーフ達の前に男が二人現れた。

「何故貴様らが…射手座、山羊座」
サジタリウス カプリコーン

「間にあつたみてえだな」

「そうですね」

「主らにわしが止められるとでも？」

「おいおい…」

「何言ってるんですか…」

「13星座の最弱野郎が調子に乗るな!」

第30話 調子に乗るな(後書き)

(カ) 「そろそろこの長編も終わりか？」

(雪) 「どうだろう…」

(カ) 「何で作者であるお前がわかってねえんだよ」

(雪) 「まあ、それは置いといて」

(カ) 「置いとくのかよ」

(雪) 「次回もお楽しみに」

(カ) 「おいおい…」

『アース』の一口コーナー

(レックス) 「今回は僕、レックス・セルベシアと」

(スラン) 「スラン・フォン・フォニムだ」

(レ) 「今回から始まったこのコーナー」

(ス) 「このコーナーは皆さんからの質問などに答えます」(棒読み

(レ) 「で、質問なんて来てるの？」

(ス) 「来てねえ」

(レ) 「まあ、そうなった場合ただの雑談タイムになるわけです」

(ス) 「もう良いじゃねえか。オレは帰るぞ」

(レ) 「スランが帰るみたいなんで僕も帰りまーす」

(雪) 「…まさかのボイコット？」

(エリサ) 「どんどん質問くださいー！」

第31話 ダイダラボッチと七柄之大弥剣

「こんな所に…何で大地を照らす13星座が三人も…」
シャイニングソディアック

「それは間違いだぜ嬢ちゃん」

「そつ、スラークさんはもう大地を照らす13星座ではないです」

その言葉にスラークは眉を少し動かす。

「私は追放されたと？」

「追放じゃねえよ…」

「始末されるんですよ。僕達に」

そう言うと、カブリコーン山羊座と呼ばれた白髪カブリコーンの青年は、何処からか黒い剣を出す。

「この人は僕がやりますからあなたは下がっていて下さい」

「ちゃんと見えよ。あの子達を守ってくださいって」

「別に魚座ビスケスさんの所の子がどうなるうと僕は知った事ではないんですがね」

「はいはい。下がってりゃいいんだろ」

サジタリウス射手座と呼ばれた赤髪の男は踵を返し、リーフ達に近付く。

そしてリーフ達の前まで行くと結界の様なものでリーフ達を囲む。

「何しやがる!？」

リーフの声に気付いて男は振り返る。

「ん?こうしないと俺等も被害を被っちまうからさ。ま、仲良くし

「ようや」

「は？」

「オレはレイル・マクシード。名前からしてわかる通り君達のボスのお兄様だ」

それを聞くと三人はポカンとした表情になる。
その中で一番に口を開いたのはエリサだった。

「ボスって…お兄さんいたの？」

「そうそう。あの可愛いスウェルちゃんのお兄さんだよ」

「シスコンぶりを発揮するのは余所ですてくれ」

「あぁん？何でデメー…！」

レイルはリーフの持っている銃を見て少し驚いた。

「確か『アース』に破動輝流士ってスウェルちゃん入れて五人じゃなかったっけ？」

「え？うちには四人しかいないはずよ」

「！」

エリサの言った四人とは、スウェル、カレン、スランとクラウンという男を含めた四人の事だ。

（炎の子について教えてるはずねえか）

「そう言えば、よく聞くんですけど破動って何ですか？」

リルがレイルに尋ねる。

レイルは一度欠伸をしてから眠そうに説明を始める。

「破動っていうのはだな。輝流に付加させて能力を強化させたり、

原流士なら通常より強い能力が使えるようにさせることができるのだ。まあ、破動の素質を持った者じゃないと使う事が出来ないけどな」

かなり要約したがそういう事である。

「で、その金髪の君が破動輝流士だったから驚いたわけ」

「「えっ!!?」「」」

三人は同時に驚く。

当の本人まで驚いてしまっているのだからどうしようもない。

「ありゃ？気付いてなかったの？自分の事なのに？」

「何かム力つく。消し飛ばすぞ」

「お前みたいなガキじゃ無理だったの。あつこの白髪の戦いをよく見とけ」

レイルはスラークと対峙している男を指差す。

「あいつの名前はシルゴート・ファリス。ああ見えて大地を照らす13星座の中でも強い部類に入る奴だから」

「向こうは賑やかだね」

「そうですね。あの人はいつもあんな感じですけど」

シルゴートは溜め息をつく。

「にしても君一人だけで良いのか？」

「聞いてなかったんですか？ 最弱野郎が調子に乗るなって」

「これを見ても…そう言えるか？」

そう言うとスラークは懷から綺麗な筒を取り出す。

「それは何です？」

「これは『千年万華鏡』^{ゲルティア}」

「まさか……この閻族は……」

「そうだ。^{ハイランクゲルティア}上級閻族の更に上をいく五閻柱の一つ^{ゲルファイア}”ダイダラボッチ”だ」

「貴様……」

「私には勝てても奴には勝てまい」

そう言うとスラークは『千年万華鏡』に輝力を込める。
すると地面が光り出し、地面から黒い球体が現れる。

「あれは……！」

「ふははは……！！出でよ”ダイダラボッチ”よ……！！」

スラークが叫ぶと球体に罅が入る。

その罅はどんどん広がっていき球体は割れて紫色の煙が出てくる。
そして煙の中から一人の男が現れた。

「……は？」「……」

シルゴートどころかレイル、リーフ、リル、エリサまでが男の姿を見て目を丸くする。

男の髪型はモヒカンで、目は死んだ魚の様な眼で輪郭はかなり縦に細長い。

さして服装はというと、虫に食われたような穴だらけのジャージだった。

「……失敗ですか？」

「失敗とはどういう事か！！オイラはれっきとしたダイダラボッチ様だ！！」

「そうですか。なら…！！」

シルゴートは一瞬でダイダラボッチの前に移動し斬りつける。避けられると思っていたシルゴートは少し意外そうな顔をする。

「くっ！いきなり斬りつけるなんて卑怯だぞ！」

「卑怯？何の事が解りかねます」

「くそお、もう怒ったぞ！第二形態だ！」

そう言うときダイダラボッチの体が黒い光に包まれる。

そして、その光がやんだ時ダイダラボッチの姿は変化していた。

「形態変化とは…中二病な作者が喜びそうなネタですね」

そついう事言うな！

という事で今のダイダラボッチの姿は黒のスカーフとマントを着たいかにも怪しいという感じだ。

「でも、確かに強いのは間違いないでしょうね」

「貴様…よくも私を怒らせてくれたな」

「一人称まで変わってしまったて…紛らわしいんでそついうのやめて下さいよ」

「舐めた口を叩けるのも今だけだ」

そう言うときダイダラボッチの前に黒い塊が出てきて発射する。

ここまでにかかった時間はおよそ三秒。

シルゴートはそれを難なく避ける。

「仕方ない…いきなり見せてあげますか。魔錬具破動改造！」

そう言うとシルゴートは剣を離す。

そして、剣は光り出し七つに分裂する。

「へえ、あいつがいきなり破動改造するなんてな」

レイルが少々驚く。

「何ですか？あれ」

「あれは魔錬具破動改造って言ってな。武具を聖なる力が宿る物にしちまうんだよ」

ダイダラボッチは目を細める。

「何だ…それは」

「これらは『七柄之大弥剣』ななえのおおみけん。一つ一つ言うと面倒なんでナレーシヨンに任せます」

仕方ないな…

右から順に黄色い刀が『呉竹鞘御杖刀』くれたけさやのごじょうとう

赤い大剣が『鬼丸国綱』おにまるくにつな

青い120?程の一番長い刀が『陸奥大掾三善長道』むつだいじょうみよしながみち

紫色の剣が『神戸剣』かむごのつるぎ

黒い一番大きな大剣が『黒漆平文大刀拵』くろしつへいぶんたばしらこしらえ

緑色のレイピアの様な細剣が『布都御魂』フツノミタマ

そして、シルゴートが持っている白い刀が『天叢雲剣』アマノムラクモ

「さあ、見せてあげますよ。『七柄之大弥剣』の力を……!!」

第31話 ダイダラボッチと七柄之大弥剣（後書き）

（カイン）

「おい、俺の出番が無かったじゃねえか」

（雪龍）

「主人公なんだからたまには良いじゃん」

（カイン）

「良くねえよ!!」

（雪龍）

「出れない人は他にもいるんだよ？」

（カイン）

「うっ！それは…まあ」

（雪龍）

「次回も出れないかもしれないけど」

（カイン）

「何だとオオオ!!!」

♪『アース』の一口コーナー♪

（デルス）

「今回はこのデルス・エンバルザーと」

（ヒルグ）

「ヒルグ・エニージオだ！」

（デルス）

「ヒルグは一度だけ出てきましたよね」

（ヒルグ）

「花見の時にな」

（デルス）

「さて、作者から伝えないといけない事があるのでそちらに行きましよう」

（ヒルグ）

「まず一つ、表記が団長ではなく、ボスになっていることについて（デルス）

「これは作者が面倒になっただけです」

（ヒルグ）

「おいおい……」

（デルス）

「続いて後書きでの名前の表記について」

（ヒルグ）

「これは他作品からパクツた」

（デルス）

「これは大丈夫なんでしょうか」

（ヒルグ）

「さあ……」

（デルス）

「そう言えば今回の作者は頑張っていましたね」

（ヒルグ）

「ああ、色んな所から剣の名前探してたよな」

（デルス）

「はい。さて、もう全て終わったので帰りましょうか」

（ヒルグ）

「そうだな。じゃあみんなバイバイ！」

（リル）

「次回もお楽しみに♪」

（雪龍）

「いつもありがとね。本当に
(リル)
「いえ、良いんですよ」

第32話 次元を超越した刃

シルゴートはダイダラボッチに駆け寄る。

剣はシルゴートの周りを浮遊する。

そして、手に持っていた『天叢雲剣』アマノムラクモで斬りかかる。

ダイダラボッチは避けるが、剣閃から光が出て、光の斬撃が肩を掠める。

「光の斬撃か…」

「まだですよ」

今度は紫色の剣の『神戸剣』かみごとのつるぎで斬りかかる。

すると剣から炎が出てくる。

炎は当たらなかったが、剣が少し掠る。

「炎の斬撃…」

シルゴートはニヤツと笑い、『神戸剣』で斬りかかるが全て躲される。

「躲して全ての能力を把握しようとしても無駄ですよ」

「それはどういう事だ？」

「全ての能力を使った時、あなたはもう死んでますから」

シルゴートはニコツと微笑みながら言う。

顔だけ見たら爽やかな青年というイメージだが、言ってる事はえげつない。

シルゴートは緑色のレイピアの様な『布都御魂』フツノミタマを握り構える。

「次は何だ？」

シルゴートは剣を地面に突き刺す。
するとそこから木の根っここの様なものがダイダラボッチへと向かって行く。

「こんなものでどうにかできるとでも――！！」

ダイダラボッチは躲そうと足を動かすが、紫色の蛇に絡みつかれ動けなかった。

そのうち根っこも腕や腹に絡みつく。

「なっ！」

「どうしたんですか？全然攻撃してきませんが…まあ、それはそれで良いんですけどね！！」

『布都御魂』で斬りかかる。

その時、ダイダラボッチから黒い光が放たれ、シルゴートの腹を貫く。

「かはっ…！」

「油断したな…その一瞬の隙が死を招くという事も知らずにな」

ダイダラボッチは力づくで根っこをや蛇を引きちぎる。

「剣には剣で止めを刺してやろう。ダークセクシオン闇の鍊葬剣」

手に闇の力を纏わせ、シルゴートを斬りつける。
しかし手応えはなく、シルゴートは霧のように消えた。

「何っ!？」

「これであなたに隙が生まれましたね」

「がっ、あああああ!!!!!!」

いつのまにかシルゴートはダイドラボッチを貫いていた。

剣を引き抜くとダイドラボッチは膝から崩れ落ちる。

「何故だ…」

「あなたは『神戸剣』の能力を炎を出すものと言いましたよね」

ダイドラボッチは何も答えない。

「けど、それは全然違うんですよ」

「どういう…事だ…!」

「『神戸剣』の能力は斬りつけた相手に幻覚を見せるというもの。つまりさっきの僕は幻覚だった」

「くっ…小癩な…」

「小癩で結構。では、そろそろ消えてください」

シルゴートは神戸剣を振りかぶる。

ダイドラボッチがニヤツと笑みを浮かべると、黒い光がまたもやダイドラボッチを包む。

「今度は何だ…?」

黒い光はどんどんでかくなっていく。

そして光が消えるとそこには、10mほどの巨人の姿をしたダイドラボッチがいた。

「ココマデ追イ込マレルトハナ…」

「…巨人になったら片言？設定を盛らないでください」

「…思っただけどあいっさきから何でナレーションとか設定とか言ってるの？」

リーフの些細な突っ込みは誰も聞いてくれなかった。

ダイダラボッチはシルゴートに向かってパンチする。

シルゴートは反応が遅れ、剣で防ぐが衝撃までは受け止められずにすごい勢いで壁まで飛んでいく。

「シルゴート…！！」

「終ワリダ。モウ死ンダ」

ダイダラボッチの笑いが部屋を包んだ。

——カインサイド

「何で俺が行っちゃいけねえんだよ!!」

「せやから言うたやん。あんたが行っても無駄なんやって」

「それでも…!!」

カインはその時何かに感付いた。

「まさか、俺が行っちゃ不都合な事でもあんのか？」

「え!?!いや、そんな訳ないやん。もう、何言い出すのこの子は」

…」

そう言つてスウェルは目を逸らす。

それを見てカインはあるのだと確信する。

スウェルは嘘をつき通すのが下手らしい。

「ボス、後ろにUFOが…」

「そんな手が通用する思うてんのか」

「いねえよ」

「おらんのかい!!」

スウエルは思わずずっとこけそうになる。

そして、腕を組み話し出す。

「あのな、行きたいのはわかるんやで？でも、行かせたらあたしが怒られんねん…聞いたとる？——」

スウエルがカインに尋ねたがそこにカインの姿はなかった。

「あのボケ！行ってもうたんか!!」

スウエルは急いでカインが行ったであろう方に走っていく。

「絶対カインに蛇遣い座を会わせたらあかん…!!」

オフイクス

「おい！あんたの仲間なんだろ！！」

リーフの叫びにレイルは何も返さない。

「聞いてんのかよ！！」

「…仲間、か」

そこでレイルは口を開いた。

「言つとくがオレ達に仲間意識はねえ。ま、信用してるけどな」

そう言つと瓦礫の山が一瞬にして無くなった。

そこから出て来たのは傷だらけのシルゴートだった。

手には黒い大剣の『黒漆平文大刀拵』くろしつあらしひやうもんたぢごしらえを持っていた。

「なんて事するんですか。危うく死ぬところでしたよ」

「死ンデナイトハ。頑丈ダナ」

「別に褒められても嬉しくないですよ」

次にシルゴートが手にしたのは青い長い刀『陸奥大掾三善長道』むつだいじょうみよしながみち

「次ハナイ。ダークタワー闇ノ黒柱」

ダイダラボッチは手を前に出す。

するとシルゴートが闇の力に呑み込まれる。

「今度こそ終ワリダ」

「何が？」

シルゴートが刀を振るうと、刀に闇の力が吸い込まれる。

「まだ終わってませんよ」

「ナラコレハドウダ！」

シルゴートは素早く赤い大剣の『鬼丸国綱』おにまるくにつなに持ち替える。

「ダークネス(アストラクシオン)闇二染マツタ破窮漸！！」

ダイダラボッチは自身の持つ技でも最上級の技を繰り出す。
闇の力は大きな刃の様な形となりシルゴートに迫る。

「まだだ！」

闇の刃に『鬼丸国綱』をぶつけると、闇の刃は消えてなくなった。それを見ると、今度は黄色い刀の『呉竹鞘御杖刀』くれたけさやのこじょうとうに持ち替える。

「これで決めないと終わりですよ」

「ナラバ最強ノ技デ沈メテヤロウ」

「当たると良いですね」

「コノ技カラハ逃ゲラレヌ。闇二墮チタ絶望ノ扉……！」
ダークネスロード

ダイダラボッチは両手に闇の力を限界まで溜め、一気に解き放った。何処にも逃げる隙間は殆どない。

「今度こそ終ワリダ」

「勝手に終わらせないで下さいよ」

「ナツ、一体ドウヤツテ……！！」

「この『呉竹鞘御杖刀』の能力は『超速移動』。どんな技よりも速く動いてしまえば意味はない」

その時、シルゴートの周りの刀剣が一点に集まる。

「さて、『天叢雲剣』の『光の斬撃』、『神戸剣』の『幻覚』、『布都御魂』の『植物繁殖』、『黒漆平文大刀拵』の『衝撃波』、『陸奥大掾三善長道』の『吸収』、『鬼丸国綱』の『分解』、そして『呉竹鞘御杖刀』の『超速移動』。全ての能力を使った今、この『七柄之大弥剣』ななえのおおみけんの真の姿へと覚醒する」

シルゴートの手には鞘に入った刀があった。

「あなたが闇族で良かった。これは人に向けて使いたくない」
ゲルティア

その剣は『真・七柄之大弥剣』とでも言うておこつ。

その方がカッコイイ。

「対闇族用最終奥義——インフイニティ無次元連塵斬——!!」

刀を一気に振りぬき、また鞘に戻す。
刃は全く届いていなかった。

「残念ダツタナ。全ク当タツテイナイゾ」
「急かさないでください。ちゃんと——」

ダイダラボッチの腕から血が噴き出す。
そこには斬り傷があつた。

「当たってますから」

その瞬間空気ごと斬れた感じがして、ダイダラボッチがバラバラになった。

「次元を超越した刃はどうでしたか？」

第32話 次元を超越した刃（後書き）

（リル）

「今回は少し長めでしたね」

（雪龍）

「そうだね。いつもよりかは長かったね」

（リル）

「それはそうと、カインさんの姿が見えないんですが…」

（雪龍）

「暴れそうだったから縛り付けておいたよ」

（リル）

「何故暴れるんですか？」

（雪龍）

「出番が（ほぼ）無かったから」

（リル）

「ああ…」

「『アース』の一口コーナー」

（リアン）

「今回はリアン＝ヴァンパイアと」

（カレン）

「カレン・イルジーナでお送りします」

（リアン）

「さて、僕から質問良いですか？」

（カレン）

「ん、何？」

（リアン）

「この小説って人気あるの？」

（カレン）

「あるわけないじゃない」

（リアン）

「じゃあ、やってる意味あるの？」

（カレン）

「もちろんよ。人気が無いとはいえ、読んでくれる人がいる限りね」

（雪龍）

「僕の心が深く傷ついた…」

（リル）

「え、えっと、感想などお待ちしております。次回もお楽しみに…」

第33話 死の力よりゝ本当は四人でゝ

「いやあ、危ねえな。オレの『空域』が吹っ飛んじまった」

「惜しい。もう少しであなたもズタズタにできたのに」

「はっはっは、テメエじゃ無理だ」

シルゴートは地面に膝を着く。

先程の技で輝力を使い果たしたらしい。

「後はお願いしますよ」

「へいへ——！！！！」

レイルはとてつもない殺気を感じて振り返る。
そこには両手に銃を持っているリーフがいた。

「あいつは…俺にやらせてくれ」

「ああ？ テメエじゃ無理だ。すっ込んでろ」

リーフはレイルの顔面すれすれに弾を放つ。
弾は壁に着弾すると、壁を大きく抉った。

「こいつは俺にやらせる…！！」

「なっ…！！」（こりゃただの破動じゃねえ。まさか…）

リーフはスラークの10m程前に立つ。
すると、スラークは鼻で笑った。

「貴様のようなガキが私の相手か？」

「ああ、そっだ」

「笑わせてくれる。私に勝てるっても…」

リーフは何も言わず、左手の銃で弾を放つ。

速さは避けられないわけではなかったが、問題は大きさだった。直径30m程で、スラークは避けられずに直撃した。

「があっ！！…はあ、はあ…」

「年甲斐もなくシャシャッてんじゃねえよ」

「ガキがあ…！！」

スラークはよろよろと立ちあがる。

「あれが…リーフの破動？」

「いや、ありやただの破動じゃねえ」

エリサの問いにレイルが冷静に答える。

「ただの破動じゃない？」

「ああ、正確には輝流でもねえ」

「じゃあ、あれは何なの！？」

レイルはエリサを落ち着かせ、話し始める。

「オレも見るのは初めてだが…あれは『死力』だ」
「死力？」

今度はリルが尋ねる。

エリサも知らないのだがリルの方が早かった。

「死力は輝力ではなく、人の命を使うんだ」

「人の命を！？」

「ああ、本来死力を使ったものは…死ぬ」

エリサとリルは驚いて声も出ない。

要するにリーフは死んでしまうというのだ。

「そんな…」

「助ける方法はないの！？」

「無茶言わないでくださいよ」

レイルの代わりにシルゴートが答えた。

「彼は自分で選んであの力を使っているんだ。それで死んだって彼のせい…でしょ？」

「あんたねえ…！！」

エリサは手を強く握る。

「何？やるんなら相手するよ？輝力が尽きかけているとはいえ、ただの魔術師には負けない」

「シルゴート、その辺にしとけ。嬢ちゃんも、な？」

エリサは握っている手の力を強めた。

自分が何もできない事に腹が立っているのだろう。

（そろそろ体に変化が起きる筈だが…）

エンペラージェットキャノン
「帝王の即決断罪！！！」

リーフの浸りの銃からかなりの速さで銃弾が発射される。

それはスラークを捕え、壁に高速で当たり爆発する。

「左は相殺、右は破壊…」

「何ですか？それ」

エリサの呟きにリルが尋ねる。

「リーフの銃の…使い方って言うのかな。左手の銃で敵の技を相殺し、右手の銃で破壊する」

「えっ、でもまだ…」

「ええ、左であの強さ…右で撃ったらどうなるの…？」

「待ちや！！カイン！！！！」
「誰が待つかよ！！」

カインとスウェルは廊下で追いかけてっこをしていた。
どちらも遊びとは思っていないが。

「何で俺が行っちゃいけないんだよ!!」

「大人の事情や!!そんなくらい分らんかい!!」

その時、カインは少し前の壁が崩れているのを見つけた。
それを見るためにカインは足を止めた。

「やっと…諦めたか…」

「いや違う。見る」

そう言つてカインは崩れている壁の下の辺りを指差す。
そこには何かはよくわからないが、穴だらけの死体があつた。

「これは…」

「見てみ!あつちにも誰かが倒れとるで!!」

そう言つてスウェルは反対側を指差す。

そちらには銀髪の青年が倒れていた。

こちらはまだ息がある。

「おい!大丈夫か!!」

「お前は…リーフの仲間か…?」

「リーフを知つてんのか!?」

「そうか…リーフは、僕を…許してくれるかな…」

「おい!答えろよ!!」

カインがそう叫んだ瞬間、青年の体が光り出す。
それに合わせて青年は苦しそくに顔を歪める。

「うつ!ああああああ!!!!!!!!」

「大丈夫か!？」

「これは…!」

「どうしたんだ？」

「まさか…死力を使ったんか」

「死力？何だそれ」

スウエルは死力についての説明をする。

それを聞いて、カインは目を見開く。

「って事は…リーフは!？」

「リーフ…僕は…君に、酷い事をした…」

「あ!？俺はリーフじゃ…」

カインの肩をスウエルが掴み、首を横に振る。

その動作を見てカインは黙る。

「僕は…自分の、弱さを、棚に…上げて…ぐっ!」

青年がまた苦しそうにする。

すると、青年の足が消えかかる。

「僕のせいで…君を、苦しめて…」

青年の頬に一筋の涙が流れる。

「ごめん…!」

青年の声が震えたものになる。

それと同時に足が完全に消え、胴体が消えそうになる。

「ごめんよ、リーフ…!!」

胸の辺りまで消えた。

「僕は、本当は…四人で…」

とうとう声も出なくなるが、口は動いていた。
口の動きだけでカインは何が言いたいのか大体は分かった。
青年の体は全て消えてしまった。

「…カイン」

「リーフも辛い過去を背負ってたんだな…」
「…せやな」

二人の間に重く、冷たい空気が通っていた。

リーフ、聞こえているかい？

君には八年前から心に重荷を背負わせていたんだね。

僕が弱いせいで…本当にごめん。

もう、僕には何もできそうにない。

先にセルシアの所に行ってるね。

でも、君の力の一部となって君を護り続けているから。

今更こんな事って思うかもしれないけど、何があっても僕はリーフの味方だよ。

本音を言つと、贅沢を言っているように聞こえるかもしれないけれど。

もしかしたら君を更に苦しめてしまつかもしれないけれど。

最期の言葉だから聞いて欲しいんだ。

——僕は、本当は四人で…

ずっと笑っていたかったんだ…。

第33話 死の力よりゝ本当は四人でゝ（後書き）

（雪龍）

「さて、今回の話はかなり重たい話でしたね」

（カイン）

「作者の力量不足のせいで大したことなくなっただけだな」

（雪龍）

「そんな事言わないでよ……」

（カイン）

「まあ、諦めなかったら良い事あるって」

（雪龍）

「まさかのアメとムチ！？ ……まあ、いいや。今回の話で少しでも感動してもらえたら嬉しいかぎりです」

（カイン）

「だから無理だって」

（雪龍）

「もしかしたら——」

（カイン）

「絶対ない！！！！」

（雪龍）

「…グレるぞ」

第34話 命の巨人

「カイン…」

スウェルは心配そうにカインを見る。
その時、カインがバツと立ち上がる。

「早くリーフの所に行こう」

「せやからそれはアカンて…」

スウェルはカインの顔を見て驚く。

それは酷く悲しそうで、苦しそうな、そんな顔だった。

「あいつが本気で暴れたら手が付けらんねえ。さっさと行かねえと…」

「んじゃあ、一緒に行こうぜ」

カインとスウェルは声のした方に振り返った。
そこには獅子のように逆立った金髪の男がいた。
その姿を確認するとスウェルは目を見開いた。

「何でアンタがこんな所におんねん…!!」

「そりゃ、暇だったからだよ」

リーフは左の銃で撃つ。

スラークはそれをギリギリの所で躲す。

先程からそればかり続いており、スラークは反撃する暇もない。

「どうした？シャイニングソディアック大地を照らす13星座つてのもこんなモンか？」
「ぐぬう…」

その様子をただただ四人は見ていた。

「そろそろ止めないとあの子の体が持ちませんよ？」
「そう言っただけであんなのオレでも止めらんねえよ」
「それどういう事？今更リーフを止めたって…」
「こんな事は初めてだから勘だが…ちからありや、自分の命じゃねえ」
「えっ!？」

エリサとリルはレイルの方に向く。

レイルは口元に手を添えている。

「どういう事かは分からねえが誰かに貰ったんだろう」
「でないとこんなに長く命ちからが持つ筈がないです」

シルゴートもレイルに続いて言う。

「そろそろ終わらせてやる」
破壊して

リーフは右の銃に力を溜める。
誰の目にもわかるほどの大きな力だ。

ゴッド・オブ・デストラクション
「破壊神の怒りの極刑！！！」

右の銃から弾が放たれる。
弾は形を変えて光の巨人となった。

「なっ…何あれ！」
「ありやヤベエ、全員オレの近くに寄れ！！」

命令通りエリサとリルはレイルの傍に寄った。

カブリコーン
「山羊座！てめえもだ！！」
「あなたの『空域』に入る位なら死んだ方がマシですよ」
「…あつそ、どうなつても知らねえぞ」

レイルは先程の結界の様なもの——空域を発動した。
本当にヤバいと思ったのか五枚重ねている。

「…アシードの命の力、死んで感じやがれクソ野郎！！！」

光の巨人の腕が振り下ろされる。

あまり早くはなかったが、威圧感に気圧されスラークは動く事ができなかった。

「撃ち放つ…」

「崩壊の銃撃を」

巨人の腕でスラークは押しつぶされ、更に巨人はとてつもない爆発を起こした。

「なんて破壊力だよ…空域が全部吹っ飛んじまった」

「それよりシルゴートさんは!？」

リルは先程シルゴートがいた場所を見る。

そこには6本の刀剣に囲まれ、手に青い長い刀『むっだいじょうみよしながみち陸奥大掾三善長道』が持たれていた。

「大丈夫だったか？」

「まあね、しかしあの子は化け物ですか？」

「化け物…ねえ」

レイルはリーフの方を見て言った。

「妹も厄介なモンばっか抱えちまって…」

「あれ?もしかしてもう終わった？」

レイルとシルゴートは声に驚いて振り返る。

別に突然入ってきたからではない。

聞き覚えのある声だったから驚いて振り返ったのだ。

そこには金髪の男がいて、その後ろにカインとスウェルがいる。

「何でお前がこんな所にいんだ…!？」

「それさっき魚座ピスケスにも聞かれたっつ。何でお前らはそう何度も同じ事を聞くんだ」

「知るか!オレ達は初めて聞くんだよ!!」

レイルは完全に男のペースに嵌まってしまっている。

「まあ、良いや。それで何でこんな所にいるんだ？」

「暇だったから」

「何コイツ、バカだろ。バカの帝王だろ」

男は何も気にせずリーフに近寄った。

「お前が命を預かった少年か」

「誰だアンタ」

「俺か？俺はロアール・グノーツ。ロアールさんでもロアール様でもロアール閣下でも何とでも呼んでくれ」

「何で初対面のアンタをそんなに持ち上げなきゃなんねんだよ」

金髪の男——ロアールはリーフの銃を取り上げる。

「へえ、これが命の破動か」

そう言った途端ロアールが持っていた銃は光となって消えてしまった。

「何だ？不完全なのか？消えちまった」

「俺の破動は自ら銃を造り出す『造銃』だ。俺の体から離れたら勝手に消える」

「おもしれえな、特異輝流士だったか」

「特異輝流士？」

「知らねえのか？自分の能力なのに？ププッ」

特異輝流士というのはトルージュリモデラーの改造主の様などれにも分類されない能力の事だ。

「てつきり武具士だと思ってたんだがな」

「そんな事はどうでも良いんだ。スラークは？」

リーフはクレーターを指差す。

その真ん中には黒焦げになったスライクが倒れていた。

「ド派手にやったもんだな」

「お前が来た理由ってのはあいつのスライク^{スライク}の処理か？」

レイルとシルゴートがロアールに近付く。

「どうせ暇だったからとか嘘なんだろう」

「そうですよ。暇だからってこんな所にわざわざあなたは来ないでしょ。大地を照らす13星座のリーダーにして最強の輝流士、獅子座^オのロアール・グノーツさん」

「「「ええええええ!!?」「」「」」

カイン、リーフ、エリサ、リルの四人は全く同じ反応を見せる。

「そついう事だ。以後よろしく!」

第34話 命の巨人（後書き）

（カイン）

「皆！久し振り！とまあ、それは良いが全然この話終わらねえじゃねえか」

（雪龍）

「うーん、そうだね」

（カイン）

「まあ、早く終わったからって良い事あるわけじゃないんだけどな」

（雪龍）

「うーん、そうだね」

（カイン）

「どうしたんだ？」

（雪龍）

「学校でテストがあったんだけど、自信が無くなってさあ」

（カイン）

「ふーん、次回もお楽しみに」

（雪龍）

「お楽しみに」

第35話 たった5文字の言葉

「起きてー、朝よー」

部屋の外から女性の声がする。

別に驚きはしない。

聞き慣れた声だ。

「リルー、朝だつてば」

女性が部屋に入ってくる。

リルはゆっくりと目を開けて女性を見る。

「…おはようございます。リリカさん」

「うん、おはよう」

リリカは挨拶を済ませると部屋を出て行った。

あの事件からもう三日経った。

カインもリーフも仕事には行っていない。

ずっと家にいた。

「早く起きないと…」

布団から出て部屋を出て下に降りる。

下には既にリリカとミラと誰かがいた。

（あれ…？）

その誰かはソファに座り何かの本を読んでいる。

「えーと…」
「リル…」

ミラがリルに近寄って小さい声で話しかける。

（あれカインとリーフの知り合いらしいけどリルも知ってる？）
（いえ…たぶん知りません）
「ういーす、おっ、二人ともおはよう」

後ろから挨拶してきたのはカインだった。
その後ろにはリーフもいる。

「あれ誰だ？」
「え？カインさん達の知り合いじゃ…」
「起きた？遅いなお前ら」

誰かは本を閉じてこちらを向く。
その人物の正体は――

「折角ロアール様が迎えに来たってのにお前らは何なんだよ」
「「何でアンタがつ！！」」

ロアールの顔を見てカインとリーフの二人は同時に叫ぶ。

「何でって魚座ビスケスに頼まれたんだよ」
「…何を？」
「何って…」

ロアールは満面の笑みでこう言った。

「黒髪左目と金髪の修行？」

「何故に語尾疑問形！？」

「とりあえずお前らは力の使い方の勉強をしないとならん訳だ」

ロアールはツツコミを完全に無視し説明を続ける。

「普通ならこんな事はしないんだがお前らの場合ちと面倒なんだ」

「面倒？　どういう事だ？」

「ちよつとー！　せつかく早く起きてるなら早くご飯食べてよ！」

一同の耳にリリカの声が響く。

とりあえずカイン、リーフ、リル、ミラの四人は椅子に座った。

「……俺は魚座の所にいつから。早く来いよ」

「あれ？　食って行かないんですか？」

「ああ、そんな事より良いのか？　急がないと置いて行かれるぜ？」

「リーフはそんな事はしません！！」

リリカは顔を真っ赤にして叫ぶ。

ロアールは笑顔で手を振りながら家を出た。

「リリカさんとリーフさんどこかに行くんですか？」

「ええ、ちよつとね。リーフ、あなたは遅刻を許すって」

「そうか」

そんな事言ってないけどね…。

「よし、行くか」

カインは手ぶらで家を出ようとする。

「何も持って行かないんですか？」

「大丈夫、大丈夫」

リルはカインの言葉に首を傾げる。

カインが出て行くと、今度はリーフがドでかいリュックにパンパンになるほどの荷物を入れたものを背負ってやって来た。

「あの…その荷物は？」

「俺とカインのだ」

「えっ！ちよつとカインさん！自分のは自分で——」

「いや、良いんだ」

リルの言葉を遮ったのはリーフだった。

「でも…」

「これは修行だ。修行だ…」

リーフは洗脳でもされたかのように修行と連呼しながら一歩、また一歩と歩く。

リリカはその後ろを歩いているがかなり不安そうだ。

「リーフさんとリリカさん…何処に行くんでしょうか」

「…さあな」

カインはそう言うリーフ達とは逆の方に歩き出した。

「カインさん！」

リルの声にカインが振り返る。

「行つてらっしゃい」

「…ああ、行ってくる」

カインは踵を返した歩き出した。

「あれか…」

リーフとリリカはどこかの丘に来ていた。
その丘には立派な墓石が二つ。
そしてその墓石には字が彫られている。

「久し振りだな。セルシア」

リーフ達から見て左側の墓石にはセルシアと彫られている。
セルシア、彼女はリーフとリリカの昔の友人で今はもういない。
明るく元気で、空のように澄み渡った色の髪の少女だった。

「リーフがこの場所を選んだんでしょ？」

「ああ、二人ともここが好きだったからな」

もう一つの墓石にはアシードと彫られている。

彼も二人の友人でセルシアと同様、今はもういない。

彼は少し内気だが優しい心を持った、雲のような銀髪の少年だった。

「二人とも久し振り」

リリカは二つ墓石に向かって笑顔で言う。

「もう一度で良いから皆と一緒にいたかったな」
「何言ってるんだ」

リリカはリーフを見る。

リーフは墓石の前にしゃがみ込み手を合わせ目を閉じる。

「アシード、セルシア。お前達の心は俺達が連れてってやる。だから……」

リーフは閉じていた目を開き言った。

「俺達の事、笑って見てろ。ずっとな」

「リーフ……」

リーフは立ち上がり踵を返す。

「また、来るからな」

リリカもリーフの後をついて行った。

二人は気付いていない事が一つあった。

それはあの墓石にもう一つ彫られているという事。

それは誰がいつ彫ったのか、彫った本人しか分からない。

しかも裏に彫られているのだ。
それはたった5文字の言葉だった。

——
ありがとう

第35話 たった5文字の言葉（後書き）

（雪龍）

「皆さん、今回はどうでしたか？」

（カイン）

「何で突然家に戻って来てんだよ。訳分かんねえ」

（雪龍）

「いやさ、どうせ帰る時の話なんて書いたって楽しくないじゃん」

（カイン）

「だから色々すっ飛ばして帰って来たと」

（雪龍）

「そゆこと」

（カイン）

「駄目だな。コイツ」

（リル）

「次回からは『アース』のメンバーの日常等です」

（リーフ）

「勿論カイン抜きだな」

（カイン）

「お前もだよっ！！てか、俺の出番がまた無くなる！！」

（雪龍）

「お楽しみに」

第36話 ある村の謎

今回集合場所に向かっているのは長い青い髪の女性——カレン・イルジーナだ。

遅れているわけではないので急いではない。
ただ集合場所に彼は来ているだろうが。

「久々に会うのに遅刻ですか？」

カレンが時間通りに集合場所に着くと少年がいた。

その少年は雪のように白い後ろが少しハネた髪に青い線が二本入っており、肌も白い。

そして、服は少し厚着で首にはマフラーをしている。

「時間通りに来て『遅刻』は無いんじゃない？」

「それはすいませんねえ」

「どうせ思っでなくせに」

少年の名はシュード・フリーザー。

彼も『アース』のメンバーだ。

因みに花見には来ていなかった。

「そう言えばアンタと仕事行くの」

「え？任務じゃないんですか？」

「どっちでも良いでしょう？」

「今後は紛らわしいんで仕事にしましょう」

雑談が入ったが話は仕事についての話になる。

「とある村で怪奇事件が起きているそうです――」

二人はとある村に来ていた。
その村に二人は入る。

「へえ、のどかな村ですね」

「本当にこの村なの？何も無さそうだけど」

「気付かないんですかあ？」

シュードは村人を見ながら言う。

村人は目が合うと即座に別の方向を見る。

「感じ悪いわね……」

二人は村の様子を見て回る。
特に変わった所はないがやはり目を逸らされる。

「こんなんじゃない話しようもないわね…」

「そうでもないよオ？」

突然二人の後ろから男の音がする。

男は銀髪で赤いニット帽を目が隠れるほど深くかぶっている。

「誰？アンタ」

「俺はただの一般人さ。それよりこの村最近おかしいんだよね」

ニット男はぺらぺらと話す。

「この村さあ、最近まで活気溢れる明るい村だったんだよ。それがさ、ついこないだ黒い煙が発生して皆おかしくなっちゃったんだ。そして誰も村から出れなくなった…」

ニット男は最後にこう言った。

「何でこんな事になったか知ってる？」

理由は恐らく黒い煙のせいだ。

前に来ていたヒルグが調べたところ、その煙は輝力で出来ていたそうさ。

だが、今は発生していない。

「何でこんな事になったかって？それを調べに来たんじゃない」

「いや、もしかしたら、どっかの誰かさんがその黒い煙をばらまいたとか」

そう言ってシユードはニット男を見る。

ニット男はニヤツと笑う。

「あれ？もしかして俺の事疑ってる？」

「誰もそんな事言ってる。ただ、どっかの誰かさんと言っただけ」
「それが疑ってるように聞こえんだって、の！！」

ニット男は懷からナイフを取り出し、シュードの腹に突き刺す。
シュードの腹からは大量の血が溢れ出る。

「シュード！！」

「あらあ、一人おーわりい」

そう言うとニット男は腕を上げる。

すると、村人が斧や鎌などを持ってカレンとシュードを囲んだ。

「アンタ…何者！？」

「俺はその少年の言うとおり輝流士さ」

「黒い煙つてのはアンタが…！！」

ニット男は後ろを向いて手を振る。

「さて、これで二人撃墜」

その言葉と同時に村人達が一斉に斧や鎌を振り下ろした。

——あれ？僕何処にいたっけ。

そう言えばあの人と仕事に言っただっけ。

じゃあこの真っ暗な空間は何だ？

何か頭がボーっとするなあ。

血も流れてる。

そう言えば昔もこんな風にたくさん血が流れてたような…。

あっ…思いだした。僕刺されたんだ。

じゃあ、僕は死んだのか？

おかしいな…。僕はもうだいぶ前に死んだじゃないか。

何を言ってるんだろっね。僕は。

ここは天国なのかな。

だとしたら居心地が悪いな。こんなものなのかなあ。

…あの光は何だ？

何か映ってる。

「シユード!!」

誰かが叫んでる。

あっ、あのニツト男。

さっき僕を刺した奴だ。

ていうか村人が襲ってきそう。

やばい。あの人が大変だ。
仕方ない。助けに行こう――

カレンは完全に自分の死を悟っていた。
目を閉じる。

だが、いつまで経っても死ぬどころか痛くもない。
恐る恐る目を開けると、そこには顔以外氷漬けにされた村人達
がいた。

「どうしたんですか？そんな顔して」

そう言っつてシュードは振り返る。

「ア、アンタ、大丈夫なの！？」

「何が？」

「お、お腹……」

カレンがシュードの腹を見ると既に血は止まっていた。
いや、血が凍っていた。

「だーいじょうぶですよ。止血しましたし」

「それにしても痛くないの？」

「痛い……」

シュードはニット男に近付きながら言った。

「痛いなんて感覚もう忘れましたよ」

シュードはニット男と対峙する。

ニット男はナイフを投げて来る。

シュードは手を前に出し寸での所でナイフを凍りつかせる。

「氷……そうか、君がああ『冷酷の死神』かい」

「そんな大層なものじゃないですよー」

シュードはニット男を指差す。

「ただ、ムカつく奴を凍て付かせたいだけ。それだけ」

「仕方ない……逃げろ！」

ニット男はダッシュでシュードから逃げる。

シュードも逃がさまいと走って追いかける。

「シュード！」

「あなたはそこでまた村人達が暴れないか見張っていて下さい」

カレンは追いかけようとしたがシュードの言葉でそれを止めた。

「……気を付けてね」

ただ、シュードもカレンも一人の男に見られているとは知らなかった。

第36話 ある村の謎（後書き）

（雪龍）

「今回新キャラ登場なのに面白くなかったな」

（シユード）

「急展開過ぎますよー。読者さんが置いて行かれちゃいますよ?」

（雪龍）

「ま、まともな事を言うキャラだ!」

（シユード）

「次回も僕が大活躍の予感」

（雪龍）

「今回『大』どころか活躍したっけ?」

（シユード）

「勝手に言ってて」

（雪龍）

「っ、冷たい…」

（シユード）

「ではお楽しみに」

第37話 氷の少年

「さて、追い込まれちゃったな」

シユードとニット男は村の外れの崖まで来ていた。

高さはおよそ200m。

登って逃げるといふのは無謀だ。

「どうしますか？今村人達を元に戻すなら氷漬けにするだけで許しますけど」

「その氷を俺が溶かしてやるってのは無いの？」

「はい」

ニット男は困ったように頭を掻いた。

その時後ろから黒い煙がシユードを襲う。

それをなんとか躲し、ニット男を見る。

するとニット男の足が黒い煙になっていた。

「どうこれ？カッコよくない？」

「趣味が悪いとしか言えないね」

「じゃあ、こんなのどうよ！！」

シユードを囲むように黒い煙が集まる。

黒い煙はシユードに近付いていく。

シユードは黒い煙を凍らせようと手を伸ばす。

しかし、黒い煙は凍らずシユードの体に巻きつく。

「こんなに簡単にいくとは思わなかったな。じゃ、サヨナラ」

黒い煙はシュードを潰そうと更に押し寄せて来る。
だが、シュードは地面から氷の槍を出し自分の体ごと黒い煙を切り
離れた。

「自分を傷つけるとはね……痛くないの？」

「痛いって感情は忘れましたよ。氷矢の爪牙」
アイスアロー

シュードは手を前に出し氷柱を何本か発射する。

ニツト男は浮遊しそれを躲す。

「気持ち悪い煙ですねー」

「おもしれえだろ。この煙って色んな能力があつてさ。一個目が『
人身支配』。これで村人達を操つてた訳……」

黒い煙を鎌の形にして両手で持つ。

それをシュードに向かって振り下ろす。

シュードは氷で受け止めるが簡単に砕け、右肩から腹にかけて斬ら
れる。

「そして二個目が『硬化』。俺の思い通りの硬さに変えられるんだ。
あともう一個が……」

シュードは氷で止血しておく。

「普通煙ってさ。物が燃えた時に出るじゃん？けどこの煙は違って
……」

黒い煙がシュードの左腕に付く。
すると煙が燃え上がった。

「この煙は燃えるんだ！おもしれえだろ」

「炎……僕の嫌いなものを出してしまいましたね……」

シュードの周りを冷気が漂う。

するとシュードの周りに生えている草や木、更には地面までが凍り出した。

腕の炎も消える。

「凍て付け……」

「清冷の氷塊で」

シュードが手を前に出す。

するとそこからとてつもない速さで氷の鎖が出る。

ニット男はあまりの早さに躲す事ができず、グルグル巻きにされた。

アイスキャッスル

「氷の冷死城」

ニット男の足元から氷が出てきてニット男を襲う。

鎖で縛られているため動けずニット男は氷漬けにされる。

アイスランス

「氷槍の葬送」

氷漬けにされたニット男の周りに七本の氷の槍が現れる。

シュードが手を振ると氷の槍は一斉に発射される。

その時ニット男が黒い煙を爆発させ氷を溶かす。

そして、矢を躲すが完全には躲せず、腕や腹、足などを貫かれた。

「っ……マジかよ。容赦ねえ……」

「容赦？」

ニット男が視線を上に移すとそこには氷の槍を持っているシュードがいた。

「そんな事する筈——！！」

シュードが後ろに跳ぶと元の場所に数本のナイフが突き刺さった。崖の上を見上げるとそこには肩にかかる位の黒髪に黒い団服を着た青年がいた。

「何をしている」

「あれ？隊長、来てたんですか」

ニット男は浮遊し、隊長と呼ばれた男に近付く。
だがシュードがそれを許す筈もなく、氷の鎖で縛る。

「ちよつ、隊長助けて」

「仕方ない……」

男は崖から飛び降りる。
だが傷一つなかった。

「どういう仕掛けですか？」

「答える気はない……」

男は素早い動きでシュードの前に移動し殴り飛ばす。
シュードは5mほど飛び、樹に当たって止まった。

「さっすが隊長！」

「いや、もう一人いる」

男の視線の先には炎を灯した槍を持って走ってくるカレンがいた。

「はあああああ！！！」

カレンは思い切り槍を振り下ろす。

男は難なく躲す。

「…何であなたがいるんですか？」

シールドはよろよろと立ち上がる。

傷は余りにも深く、立てるのが不思議な位だった。

「村人達が急に気を失ったからもう良いかと思った。それより…」

カレンは男を睨みつける。

「何か嫌な予感がした。だから来たの」

「お前では俺には勝てない。諦めろ」

「何だとコラ…！！」

カレンの怒りの言葉を無視し、男はカレンの後方にある気を見て言った。

「俺が気付かないとでも思ったか。出てこい」

「バレてたか。まあ、オレ的にはどうでも良かったんだが」

男が見ていた木の後ろから現れたのはスランだった。

「スラン貴様……何故我々を裏切った？」

「裏切った？何も知らねえガキが……なあ？ユ―レン君」

「……お前と戦うのは避けたいんだがな」

「そりゃオレもだ。退いてくれよ」

その時、ニツト男がスランを後ろから攻撃しようとしていた。だがスランは後ろを見ずに肘でニツト男の腹を殴った。

「お前じゃこいつには勝てない」

「そうみたいッスね」

ニツト男は浮遊し男の横に行く。

そして二人は黒い煙で姿が隠れていく。

「いずれ我々『聖冠団』とお前達は戦う事になるだろう。覚悟しておけ」

「覚悟すんのはそっちだ」

二人は黒い煙で完全に見えなくなり、黒い煙が晴れた時には二人とも消えていた。

「何でアンタがこんな所にいんのよ！」

カレンは少々怒っている。

見ず知らずの男に『お前では勝てない』と言われた事や、その男に何もできずに逃がしてしまった自分に腹が立っているのだ。

「ヒルグから話を聞いてな。ちょっと確認したい事があった」

「確認したい事って何よ」

「それは今は言えねえ。ただこれだけは言っておく……」

スランは真剣な顔でカレンとシュードに言った。

「今日あつた事は絶対にカインには言うな」

「入るぞ」

スランはスウエルの部屋に入る。

そこには椅子に座ってマンガを読んでいるスウエルがいた。

スウエルはスランに気付き、マンガを閉じる。

「どないしたん？そんな顔して」

「残念ながらいつも通りの顔だ」

スウエルは冗談冗談と言って笑った。

「で、ホンマに何があつたんや？」

「仕事でシュードが負傷、リリカに治療を受けてる」

スウェルはそれを聞いて不思議に思った。

そんな事ならよくあることだ。

仕事で傷付き、リリカに治療されるというのは一々報告されるまでもない事だ。

何故リリカに治療されるのかというと、リリカは治療専門の魔術士で、要するにそれが仕事だからだ。

「もつと簡潔に言わんかい。長話は嫌いやねん」

「シュードの相手は『聖冠団』の奴だ」

スウェルはそれを聞いて目を細める。

「アイツ……エエ加減止めさせなアカンな」

そう言うとスウェルは立ち上がり眼鏡を取る。
その瞬間部屋の空気が変わった。

「こんな所でそれ取んのやめてくれね？」

「スマンかったな……」

「ま、それだけ本気って事か」

スウェルは部屋を出ようとドアノブに手を掛ける。

「どこ行くんだ？」

大体答えは分かっていたが一応聞いてみる。

「直接行って文句言つたる!!」

そう言うとスウェルは勢いよくドアを閉めた。
誰もいなくなつた部屋でスランはと言うと…

「……これ面白れえのかな」

スウェルが置いていったマンガを読んでいた。

「あの人に伝えた方が良いかな…」

そう言いつつもスランはマンガを読んでいた。

第37話 氷の少年（後書き）

報告

7月、8月の投稿が中々出来ないかもしれません。
9月以降もあまり出来ないかもしれませんがご了承ください。
ですが、決して連載をやめるわけではありません。
そこは勘違いしないでください。

シュード・フリーザー

S u d e . F r e e z e r

【性質：冷氣／15歳／男162？／46？】

白髪に黒い線が二本入っていて、一年中マフラーをしている少年。
時々間延びしたような喋り方をする。

感情の変化が殆どと言うか無い。（本人曰くもう忘れた）

『冷酷の死神』と呼ばれる事があり、その呼び名通的には容赦をしない。

決め台詞は「凍て付け、清冷の氷塊で」

第38話 新たな13星座（前書き）

『フレイム』週間開始！

今回から数日間、正午に連続で投稿します！

8月に投稿できずすいませんでした！

第38話 新たな13星座

白髪青年は街の中を歩いている。
その横を女性が並んで歩いている。
二人は特に会話もせず歩いていたが、女性が耐えられなくなったのか青年に話しかける。

「シルゴート…」

「何ですか？」

青年の名はシルゴート・ファリス。
シャイニングソディアック
大地を照らす13星座の山羊座だ。
カプリコーン

「私は何の為にこうして貴様と歩かねばなんのだ？」

「聞いてないんですか？メイデイン」

女性の名はメイデイン・ロウル。

特徴は肩ほどまである黒髪で、前髪を十字架を模した髪留めで止めている。

少し目付きが鋭く、綺麗なのだが話し掛け辛い。

「聞いてないから貴様に聞いたのだ。さっさと言え、愚図が」

「聞いている立場なのに随分な良いようですね。斬り伏せますよ？」

二人の間に黒いオーラが流れる。

周りの人もなんとなく気付き近付かないようにする。

「僕達は迎えに行くんですよ」

「誰をだ？」

「新しい蛇遣い座ですよ」
オフィウクス

大地を照らす13星座はずっと同じメンバーなのではない。
何かしらの理由で変わる場合もある。
今まで変わったのは蛇遣い座と牡羊座だけだ。

「また蛇遣い座か…あれは今度で何回目なんだ」
「確か7回目です」

蛇遣い座だけは人が変わった回数が多い。
いつそ失くしてしまおうという声もあったがロアールが認めなかった。

「次のはどんな奴だ」
「18歳の女の子ですよ」
「何!？」

メイディンが何故これほどまでに驚いたのかというと、蛇遣い座は今までずっと男だったからだ。

それはロアールが決めた事で変わらない筈だったのだ。

何故そう決めたかというところ『え？何となくだよ。何となく』だそう
だ。

「何でも『女の子にしたら華が多くなるから』という事らしいですよ」

「……奴は本当に適当だな」

元の理由も適当なのだが…。

「それにしても僕達の世代になって今までメンバーは変わらなかったんですがね……」

「二年程だな」

メイディンの言うとおり、二年程メンバーは変わっていなかった。スラークになってからは安定していたのだ。

「次の子は長続きすれば良いんですがね」

「大地を照らす13星座の称号を得た所で良い事はあまり無いのかな」

メイディンがそう言うと、タイミング良く男達に囲まれる。

大地を照らす13星座は世間一般的には余り知られていない。知られているのはその人なのだ。

「メイディンは有名人ですからね」

「何者だ、こいつら。賞金稼ぎか？」

「でしょうね。皆さん逃げた方が良いですよ」

シルゴートの言葉に男達は笑いだす。

「てめえら二人で俺達に勝てると思ってんのかあ？」

「雑魚臭が半端ない常套句を有難う。ところで私に話し掛けたという事は殺されたいのか？」

メイデインは目を閉じて続ける。

「私にとってお前達を殺すのは造作もない事だ。しかし人を殺すなとロアールに言われている。だから今なら人として逃がしてやる。だがまだ私を狙うと言うならゴミとして処分するぞ」

その瞬間メイデインから冷たい空気が流れる。

「な、舐めんじゃねえぞお！！」

「そんなに死亡フラグを立てるような発言は止めてくれ」
「調子に乗んな！」

一人の男が武器を構えると、他の男も武器を構える。
武器は大抵剣か斧だ。

そして男達は一斉にメイデインに向かって走り出す。

「そうか、お前達はゴミ。だから処分する」

手を横に出すと突然5 m程の棺——アイアンメイデン鉄の処女が現れる。
それを見た瞬間男達は立ち止まる。

「どうした？私を殺るんじゃなかったのか？」

メイディンは黒い笑みを浮かべる。

その笑みを見た男達は背筋がゾツとする。

「もう一度言う。今なら人として逃がしてやる」

メイディンの手にはいつのまにか3m程の大剣を掴まれていた。

「お前達が生き残るには逃げるしかない。逃げないのなら鉄の処女エクスキューションで貫かれるか、この死刑執行剣で斬り裂かれるか……」

メイディンは黒い笑みを浮かべたまま最後にこう言った。

「……どうする？」

男達は最後まで言葉を聞かずに走って逃げた。

だがあの男達は武器を出されただけでは怯まないだろう。

何故逃げたのか。答えは簡単だ。

メイディンから放たれる殺気に誰も耐えられなかったのだ。

メイディンは会話の途中殺気をどんどん強くしていった。

そして最後の言葉で本気の殺気をぶつけたのだ。

「貴方も変わりましたね。昔なら問答無用で殺していたでしょう？」

「昔は昔だ。人は変わる」

メイディンは二つの武器を消し、歩き出す。

シルゴートはメイディンの後ろ姿を見て思った。

（獅子座レオは凄いですね……。あの命に無関心だった乙女座ヴァーゴをここまで変えてしまうとは……）

メイデイン・ロウル。

大地を照らす13星座の乙女座。

13星座の中で最も美しく、最も無情な処刑人。
それが彼女だ。

「そう言えば次の蛇遣い座はどんな奴だ」

メイデインはシルゴートに尋ねる。

シルゴートはロアールに渡された紙を見る。

そして紙に書かれてある事をそのまま言った。

「『地面に付きそうな位のとても長い水色の髪で身長は165位、
名前は……』」

シルゴートは名前の次に書かれている言葉を見てかたまる。

「どうした？名前は何なんだ」

「『本人に聞いてくれ』だそうです」

メイデインはどういうことだと尋ねるがシルゴートも分からないので答えられない。

「とりあえずここが家なんで本人に聞きましょう」

シルゴートは玄関をノックする。

それで出てこないののでチャイムを鳴らす。

数秒後、はい、という声がして黒髪の少女が出てきた。

「僕達は大地を照らす13星座から君を迎えに来たんだ」

「あー、じゃあ貴方達が山羊座さんと乙女座さんデスネDESUNE！」

「そういう事だ。これから獅子座に会って貰う。一緒に来て貰おうか」

少女ははい、と言って鍵を掛けた。

何も持たずに。

「えーと、荷物は？」

「獅子座さんからの手紙に手紙で来てくれって書かれてマシMASITタTA」

「そうですか」

ここでシルゴートはアレを聞く事にした。

「貴方の名前は？」

「meの名前ですか？アルティスで良いデスヨDESUYO。どうせ覚え

られませんし」

「覚えられない？そんな変わった名前なのか？とりあえず言ってみる」

メイデインが言つと少女——アルティスは息を大量に吸い込み言つた。

「meの名前はアルティス・ベグラ・クルメナ・ドルクス・エルシヤ・フィランダ・グライオス・ハーツ・イロウム・ジャルト・クラインス・ルー・マテルロイ・ナクミダ・オルミヤ・パクネス・クワイト・ライトール・スメラケネド・タイヨン・ウバイロス・ヴィアイオロット・ウィルカムネ・クスエル・ヨールメニア・ザイオラ
ンディア^{デス}DESU……」

それを聞いて二人は少しポカンとする。

どこをどうしたらこんなにも長い名前になるんだ。

「やっぱり覚えられない^{デシヨ}DESYO？」

「この程度覚えられないでどうするんですか」

「^エE！？覚えれ^{タノ}TANO！？」

「ええ、アルティス・ベグラ・クルメナ・ドルクス・エルシャ・フィランダ・グライオス・ハーツ・イロウム・ジャルト・クライネン・ス・ルー・マテルロイ・ナクミダ・オルミヤ・パクネス・クワイト・ライトール・スメラケネド・タイヨン・ウバイロス・ヴィアイオロット・ウィルカムネ・クスエル・ヨールメニア・ザイオランディアですよね？」

シルゴートはあの長い名前を全て覚えていた。
その事に感激し、アルティスは目を輝かせる。

「は、初めて名前を覚えてもらえT A……嬉しI！」

アルティスは頬を赤らめシルゴートに抱きつく。

シルゴートはバランスを崩しながらもギリギリ倒れない。

「永遠に貴方に着いて行きMASU！」

「……え？」

「早速後輩に好かれて良かったな。愚図」

「何でこうなったんでしょう……」

シルゴートは苦勞が絶えなくなるような気がする。

第38話 新たな13星座（後書き）

（雪龍）

「お待たせいたしました！」

（カイン）

「今回は俺達全然関係なかったな」

（雪龍）

「大地を照らす13星座の仕組み（？）っていうのを初めて書いた回だったかな」

（カイン）

「そうだな、13星座って入れ替わってたんだな。てかあの長い名前覚えれるってスゲーな」

（雪龍）

「確かに。13星座のメンバーは色んな意味で変人が多いから」

（カイン）

「ボスを含めて？」

（雪龍）

「そゆこと」

（カイン）

「まあ、俺にとってはどうでも良いけどな。次回も……」

（雪龍）

「次回もお楽しみに」

（カイン）

「……………」

第39話 ゲームをしようか

「ふっ、はっ……ふう、これで今度こそカインに勝てるな」

とある青年が竹刀で素振りをしていた。

普段は長い黒髪を後ろで括っているのだが、今はそれをしていない。彼の名は如月佐祢丸。

カインと同じ『アース』のメンバーだ。

「おやおや、いつもの事ながら精が出ますね」

佐祢丸がゆつくりと振り返る。

そこには壁にもたれ掛かって腕組みをしているデルスがいた。

「……何か用か？」

「いえ……まあ、あなたにも用があるのですがヤグモに用がありませんね」

「私に何か用か？」

突然デルスの首筋に刀が突きつけられる。

それはヤグモの物で、当然ヤグモが突きつけていたのだ。

二人は会った事がないので、デルスもそうだがヤグモは何者か知らないのだ。

「初めまして。私はデルス・エンバルザーという者です。貴方に用があつて来たんです」

「やめとけヤグモ。そいつには勝てん」

「それはどうい——」

ヤグモはその場を飛び退く。
デルスはクスツと笑う。

「残念ながら男性へのエスコートは苦手なんです」

デルスは手に電気を流す。

「今から私と貴方……あと、佐祢丸君の三人で……」

「拙者はついで!？」

「クラウンさんに会いに行きます」

その瞬間佐祢丸の肩がビクツと震える。

「せ、拙者はやめておこうかな……」

「いやあ、佐祢丸君も行きたいんですか。そうですね」

「いや、だから拙者は……」

「さて、行きますか」

「だから拙者は嫌じゃあああああ
あああああ……！！！！！！」

「何であんな奴に……」

佐祢丸はかなりゲツソリしている。

今三人はクラウンの家に向かっている。

クラウンの家は街から少し離れた所にある。

何故かというと彼がそれほど危険だからだ。

「恨むならスラン君を恨んでください」

「どういう事じゃ？」

「この仕事を頼んだのはスラン君ですから」

「あの音波男め……！！」

そんな二人、特にデルスをヤグモは睨みつけるように見ていた。

「先程はすいません。なのでそんなに睨まないでもらえませんか？」

「私はお主が信用できません」

「別に信用しろとは言ってませんよ。ただ睨むのをやめて頂きたいだけです」

デルスは笑顔でサラッと返す。

その笑顔のせいで余計に信用できなくなった。

「まあ、お喋りはここまでですよ。ここからは――」

デルスは手を横に出し二人を止める。

そして前を見るとそこには二人の少年と一人の少女がいた。

「すみません、クラウンさんに会いたいのですが」

「ざーんねーん、師匠に会うには私達を…」

「何をしているんだ？エルレンダ」

「わっ、ちよっ、師匠！出てきちゃ駄目！」

少女達の後ろの樹の蔭から出てきたのは、長い金髪の青年だった。

「おや、今はクラウン君でしたか」

「ハハハ、向こうのオレだったらお前死んでるよ？」

「良かった……あの姿じゃなかった……」

佐祢丸は少し安心した。

そんなにあの姿というものが怖いのだろうか。

「それで？オレに何か用？」

「ええ、ボスが『聖冠団』に殴り込みに行ってしまったんです」
「なっ！？」

クラウンは目を丸くして驚く。

「この事を伝えねばならないと思い来たわけです」

「あの……その前に良いか？」

ヤグモは小さく手を上げる。

デルスがどうぞと言うとヤグモは尋ねた。

「彼は一体何者なんですか？そして『聖冠団』に殴り込みに行ったとは一体……」

「そうですね……まずは彼の事を話しておきましょうか」

デルスが話そうとするとクラウンが近寄ってくる。

「自分の事位自分で話すさ」

「そうですか。では好きにどうぞ」

「オレの名はクラウン・ジョーカー。今はこんな姿だが本当は42歳だ」

「え……？」

42歳だ、その言葉に声も出なくなった。
どこからどう見ても20歳位だ。

「そして彼は『アース』でボスを抜いたら最も強い輝流士です」
「そういう事だ。よろしくな」

クラウンはニツコリと笑った。
その時ヤグモの心の中は

（やはり20歳だろ……）

とか何とか思っていた。

「^{ジエミ}双子座おるか!!」

スウエルは大きな扉を思い切り開ける。

部屋の中には顔を本で隠し、足を机の上に置いて椅子に座ったまま寝ている黒髪の青年がいた。

「うるさいなあ……誰？」

「あたしや! スウエルや!!」

「ああ、久し振り」

「こないだ会ったやろ!!」

青年は耳を塞ぐ。

「ちょっと、女の子なんだからもつと静かに出来ないの?」

「……分かったわ。ほんでアンタに話があんねん」

「一体何なのさ」

「アンタん所の団員がウチのものと戦ったらしいわ。アンタの命令
ちやうんか?」

青年は目を閉じて考える。

そして、そのまま寝てしまった。

「アホか!!」

「いだっ!!」

スウェルが青年の頭を思い切り叩く。
青年は頭を抑えて蹲る。

「どうなんや！アンタの命令なんか！？」
「いや、僕じゃないよ。第一僕放任主義だし」
「ようそれで団長出来るな」

そついうと青年はまあねと笑う。

「それはそうとどうやって入って来たの？」
「堂々と正面から空気で姿を隠して入って来た」
「誰も気付かなかったのかよ……」

スウェルは後もう一つと言って人差し指を立てた。

「カインはもう狙うな」

「……………」

「アンタも知つとるやろ。昔の『聖冠団』を」
「……良い事思いついた」

青年はニヤツと笑った。

「ゲームで勝てたらカイン君はもう狙わないよ」
「ゲーム？何やそれ」

彼は意地が悪い。

「『アース』と『聖冠団』の総力戦ゲームさ」

彼の名はウィンツ・ジェイレーン。

『聖冠団』の団長にして――

シャイニングソティアック
大地を照らす13星座の双子座である。

第39話 ゲームをしようか（後書き）

（カイン）

「そう言えば前回の新しい奴の名前スゲー長いよな」

（雪龍）

「え、またその話する？」

（カイン）

「だって佐祢丸とか興味ねえし」

（佐祢丸）

「何じゃと！？表に出えい！！」

（カイン）

「うるせえ。頼むから黙ってくれ」

（雪龍）

「ということで強制退場」

（佐祢丸）

「何iiiiiiiiiiiiiiii！！！！」

落とし穴発動

（雪龍）

「……次回もお楽しみに」

第40話 発端

カインとリーフが修行に行ってから早くも3ヶ月ほど経った。
何故もうそんなに経ったのだった？

まあまあ、そんな事は置いて。

「まだですかね……」

「まあ、今日もまだ始まったばかりだし」

そう、近々二人が修行から帰ってくるのだ。

「ちょっと気晴らしにお出掛けする？」

「でもカインさん達が帰って来た時に私達がいなかったら……」

忘れていたが先程から話しているのはリルとミラだ。

「大丈夫よ！それに何かプレゼントでもあった方が良いでしょう？」

「そう……ですね。行きましょう」

二人は早速外に出かけた。

これがこれから起こる出来事の発端だった。

「やっと帰って来れたな……」

「ああ、死ぬほどきつかったな」

「ロアールめ……」

カインとリーフはそう言いながらも家の前まで歩いてきていた。因みに行きと同様リーフが荷物を全て持っている。

「ただいまー」

「あつ、おかえりなさい」

中から出て来たのはリリカだけだった。

「リルとミラは？」

「なんかプレゼント買うとか言っただけで行っちゃった」

「そうか……」

とりあえず三人は家の中で二人を待つ事にした。

だが数十分待っても帰って来ない。

家を出てからで言うとおよそ二時間程だ。

「遅いわね……一体どこまで買いに行ったのかしら」

その時玄関が開く音がし、部屋にミラが息を切らして入ってきた。

何故かリルがいない。

「どうしたんだ？」

「リルが……」

カインの胸に不安が押し掛かってきた。

「リルが…どうしたんだ？」

恐る恐る聞いた。

聞いたのに答えを聞きたくない。

不安で胸がいつぱいだ。

こんな感じ初めてなった。

「リルが…攫われた…」

「なっ…！」

胸の中が真っ黒になった。

リルが仲間だからこんな気持ちになるのだろうか。

「攫ったのは誰だ……」

「……『聖冠団』」

答えはカインの予想を裏切らなかった。

その答えを聞いた時、カインの中で何かが切れた。

「間違えないのか…？」

「あの紋章を間違える筈がないよ……」

『聖冠団』の紋章は交り合う二本の剣の上に王冠が載っているデザ

インだ。

「そうか……」

カインは部屋を出て行こうとする。
それをリーフが腕を掴んで止めた。

「まずはボスに伝えんのが先だ。というよりテメエが行っちゃ駄目だ――」

「うるせえ……！」

リーフはカインの殺気に気圧される。
カインは振り返って言った。

「何を言われようと何されようと俺は行くぞ……」

「だけどな……」

「あいつ等だけは許さねえ……！！」

それを聞いてリーフは溜め息をついた。

「テメエを一人で行かせる訳にはいかねえ。俺も行く」

「……！！」

「一人でかつこつけんな。リルは俺達の仲間……いや――」

「俺達の家族だろ」

「……」

カインは何も言わずに外へ行く。

「わ、私も」

「お前らは来るな」

着いて来ようとするミラとリリカをリーフが止めた。

「大丈夫だ。リルは……俺達が連れ戻してくるから」

そう言うリーフも出て行った。

「ここか」

二人はエルバムという都市にやって来ていた。

ここはシゼルディアスの首都で、最も栄えている都市だ。

その中心部には堂々と城と『聖冠団』の本部が立っていた。
カインとリーフの二人はその本部の前に来ている。

「さて、行くか」
「まあ、待てよ」

後ろから二人を止める声がする。
二人が振り返った先には

「テメエらだけでケリつけようとしてんじゃねえ」

エリサ、イグルス、シュード、リアン、スラン、カレン、レックス、
佐祢丸、アイシュ、ヒルグの『アース』のメンバー10人がいた。
皆、手に手紙を持っている。

「何でお前ら……」
「これですよ」

そう言っでリアンが手紙を開く。
その手紙にはこう書かれていた。

《お前達の仲間、リル・コークレインは預かった。返して欲しければ『聖冠団』本部に來い》

「リルちゃんはお前達の仲間だし、家族みたいなもんだからね」
「家族を奪われたら黙ってられないッス！」

「てな訳でオレ達も連れてけ」

カインは驚いたふうに目を見開く。
そして誰にも見られないように振り返り、笑みを浮かべる。

「さっさと行ってさっさと取り返すぞ」
『おう！ー！ー』

第四章一部——総力戦ゲーム編、開幕！

第40話 発端（後書き）

（雪龍）

「次回からやっとな『聖冠団』が出ます！」

（カイン）

「けっ、俺あいつら嫌いなんだよ」

（雪龍）

「そう言つと思つたよ。近々イラストを載せてあげるから」

（カイン）

「いや、期待してねえから」

（雪龍）

「……やっぱり？」

（カイン）

「次回もお楽しみに」

（雪龍）

「強引に終わらせるの久し振りだね……」

第41話 総力戦ゲーム開始

門に兵らしき者はおらず、中にはすんなり入れた。

中にはいきなり階段があり、上には左目に黒地に？印のしてある眼帯をした赤い髪の男がいた。

「アルバシス……！！」

「久し振りだな、カイン」

アルバシスと呼ばれた男は一度溜め息をつき、煙草を吸い始めた。

「これから『聖冠団』vs『アース』総力戦ゲームを始める！」

「何のつもりだ……！！」

「質問は受け付けねえ。こつちだつてやりたくもねえのに無理やり団長の娯楽に付き合わされてんだよ」

アルバシスはまた溜め息をつく。

だがまた真剣な表情に戻し、話を続ける。

「ルールは簡単。お前達があの子を取り戻せたらお前達の勝ち、取り戻せなかったら俺達の勝ちだ」

「ただ取り戻しや良いわけじゃねえんだろ？」

スランの問いにアルバシスはフツと鼻で笑う。

「相変わらずお前は頭が切れるな」

「相変わらず？」

エリサがスランを見る。

スランは先程と変わらず無表情でアルバシスを睨んでいる。

「途中で第一から第六部隊の隊長と副隊長が待ち構えている」

「要するにためえら全員ぶっ倒せばいいんだろ？」

カインの言葉に『アース』のメンバーの全員の顔が真剣になる。

「……今からオレが適当にシャッフルする。誰かと戦いてえって奴いるか？」

「……ユーレン」

「「!!」」

カインとスランはカレンを見る。

カレンの目には怒りの感情が見て取れた。

「何でお前その名前を知ってた……？」

「ちよつとした因縁があんのよ」

カインの問いに平然とした態度で答える。

その時アルバシスは煙草の火を手で消した。

「あんま時間掛けたくねえんだ。他にはいねえか？」

もう誰も何も言わない。

「なら始めるぜ。シャッフルスタート」

そう言いアルバシスは眼帯を取った。

アルバシスの左目が赤く光り出すと全員が一瞬で消えた。

「はあ、俺はまだ出番ねえし歩いて行くか」
「やつほー」

アルバシスが歩こうとしたら目の前に黒髪の青年が現れた。

「何やってんですか。あの子の様子は？」

「ずっと寝てて暇なんだ。だからちょっと様子見に来ただけど…
…遅かったかな？」

「貴方に限ってそんな事ないでしょ。ずっと見てましたね？」
「バレたか。さすがアル君」

青年はテヘツと言いながら頭を掻く仕種をする。
童顔なので見る人が見れば可愛いと思うだろう。

「ま、貴方は部屋でノンビリしといて下さいよ」
「えー、暇じゃん」

アルバシスは溜め息をつき、左目に眼帯の上から左手をかざし、手を閉じる。

そして手を開くと手の中に黒いピン球程の球が現れた。

「コレを握りつぶせば画像が映るようになっています」
「おつ、サンキュー」

そう言って青年はこの場で黒い球を潰そうとした。

「ちょっと、部屋で見てください！」
「えー、仕方ないなあ……」

そう言っつと青年が一瞬光り消えた。

アルバシスはまた溜め息をつく。

「溜め息ばっかついてつと幸せが逃げちまっよな……」

アルバシスは煙草に火を付け吸い始めた。

「カイン……何でこんな事に……」

「ねえ、その眼帯君」

アルバシスは声を掛けた者の方に振り返る。

そこにはクラウンがいた。

「アンタ……ゲームに参加すんのか？」

「別にする気はないよ。ただここにうちのボスが来てないかい？」

「さあな、オレは知らねえがいるとすれば団長の所だろ」

「そうか」

そう言うクラウンは正面の壁に向かって歩き出す。

そして壁まで来ると手を当てる。

「おい、アンタまさか……」

「遠回りは嫌いなんだ。教えてくれてありがとう」

すると壁は大きな音を立てて爆発した。

「マジかよ……」

アルバシスは溜め息をついて自分のいるべき場所へと向かった。

（やっぱ意識しねえとクセは治んねえのかな……）

少し遠くで爆発音が聞こえた。

その時また溜め息をついてしまった。

（意識してもこんな状況じゃ一生治んねえか）

アルバシスは正直こんな面倒な事は早く終わらせたい。
こんな争いのゲーム等尚更だ。

（しかもよりによって『アース』とはな……）

その時のアルバシスはどこか悲しそうだった。

第41話 総力戦ゲーム開始（後書き）

（雪龍）

「この章は次回見せ場がある人呼びます」

（リアン）

「成る程。だから僕は呼ばれたんですね」

（雪龍）

「一番目なんだから頑張つてね！」

（リアン）

「やるだけやりますよ」

（雪龍）

「まさかあんな技があるなんてね」

（リアン）

「次回もお楽しみに」

（雪龍）

「えっ、無視？」

第42話 戦場は紅く染まる

ここは『聖冠団』本部にある12の演習場の内の8番目。
そこにリアンがいた。

「やつほく、君は初めましてだね」

シユードの前には金髪の清楚な雰囲気をする青年がいた。

「ていうか死神君は俺を選んでくれなかったのか。ざーんねん」

「一人でよく喋りますね。まあ死神の代わりにヴァンパイアが来た
わけです」

そう言っつてリアンは右手を噛み、血を出した。

「俺は『聖冠団』第四部隊副隊長、ロウ・ミルダエラ。よろしく」

「僕はリアン。リアン＝ヴァンパイアです」

ロウは右手から黒い煙を出す。

それを見てリアンは思い出した。

「黒い煙…死神……あなたがシユード君が相手した方でしたか」

「そゆこと！」

黒い煙はリアンの周りを囲む。

「こんなので……」

リアンが右手を横に振ると。リアンの周りに血の壁ができ、黒い煙

を防ぐ。

「俺を倒せると思ってんのか？」

（口調が変わった？）「思ってたねえよ！！」

ロウは手に黒い煙を集め、刀の形にして硬化させる。

それを見てリアンも血を剣の形に変え硬化させる。

二つが交わると金属音がした。

どちらも本物の刀剣並み、もしくはそれ以上の硬度を誇っているのがわかる。

ブラッディニードル
「純血の針」

剣の形をしていた血から突然針が突き出す。

ロウはそれを避けきれず頬を掠ってしまう。

（コイツ下手したら死神君より強いな……）
ブラッディチエーン
「純血の鎖」

リアンは左手を勘で新たに血を出し、鎖の形状にしてロウに投げつける。

ロウはそれを避ける。

ブラッディガトリング
「純血の連射砲！」

右手の人差し指を噛み切り、そこから血の弾をマシンガンの様に発射する。

ロウは黒い煙を足に纏わせ、浮遊して躲す。

シールドと戦った時と同様、足が黒い煙になっているように見える。

「あつぶねえ……殺す気かよ」
ブラッディウイング
「中々当たらねえな……純血の翼！」

リアンの背中から血で出来た翼が生える。
その時少しリアンがふらつく。

（さっさとケリつけねえと血がもたねえな……）

リアンはロウへ向かって飛んで行く。
走るより明らかに速い。

リアンは血の刀を逆手に持ち直す。

「速っ！」

リアンは通り過ぎる時にロウの左肩を斬る。
リアンは少し行き過ぎた所でUターンし、もう一度斬りかかるようにする。

しかし、ロウが黒い煙で自分の姿を隠す。

「目暗ましのつもりかよ……！」

「バーカ」

その言葉を不思議に思いつつもリアンは突っ込む。
しかし、黒い煙は壁の様に硬かった。

「カハッ！」

「そのまま燃えちまいな」

黒い煙は燃えだし、その炎がリアンのマントに移る。
リアンは急いでマントを脱ぎ捨て離れる。

「こう言つの……形勢逆転って言うんだっけ？」

「はぁ、はぁ……」（これ以上血を出したら体が危ないな……）

口ウは黒い煙を銃の形に変える。

「辛そうだねえ……血が無くなっちゃった？」

そう言いつつ、銃から黒い煙を固めた弾を発射する。

その弾はリアンの腹を貫通し、リアンはその場に崩れる。

「そろそろ終わりにしようか」

「なめるな……！！」

リアンは腹から大量の血を出し、地面を満たす。
血が足りなくなるととうとう地面に伏してしまう。

「何やってんの？」

「我が操る純血よ……」

リアンは苦しそうに呟く。

「舞え——」

そう言うのと地面に流れていた血が空中に浮かびあがる。
そして刃物の様に鋭くなる。

その時リアンが立ちあがった。

「あれ？立てちゃうの？」

フルブラッドモード

「無限純血状態を解放した」

リアンの目が鋭く光る。

「これで僕の血の量は増え続ける。故に血はなくなるない」(この後大変な事になるんですけどね……)

そう言うのと刃の様に鋭い血がロウを囲む。

「おい、まさかお前……！」

「畏怖せよ……純血の裁きを……！！」

「エンドレスフラッシュディレイン 永続せし純血の大射撃……！」

「なっ……！！」

リアンの言葉と同時に一斉に血がロウに飛んでいく。
ロウは多少躲したものの殆ど突き刺さった。

「ウソだろ……」

そう言っつてロウは倒れた。

リアンはフラフラと歩き出す。

その時、リアンの体が引き裂かれたかのように血が噴き出す。

「暴走が始まったか……！！」

これが無限純血状態の代償。

血が暴走しリアン自身にも止められなくなってしまう。

「くっ……」

リアンは5メートルほど歩いた所で倒れてしまった。

只今の『アース』vs『聖冠団』の戦績

0勝0敗1分け：0勝0敗1分け

残り人数：11対11

ここは第5演習場。

そこにアイシュと短い金髪の青年がいた。

その青年は右目が青く、左目が黄色い。

要するにオッドアイだ。

「初めまして。僕は第二部隊副隊長、ヤイト・ディリクタイです」
「あたしはアイシュ・タイレーン」

アイシュとヤイトは二人してニコニコしている。

「うーん…女の子と戦うのは気が引けるなあ」

「そつかあ、でもお姉さん相手にそんな事にしなくて良いよ」

「失礼だけでもしかして僕より年上ですか？」

「あたしは22歳だよ」

ヤイトは17歳。

しかしアイシュもその位の年に見える。

「若く見てくれてありがとね」

アイシュは上着の内ポケットから金槌を取り出す。

それに輝力を込めると大きくなる。

「……リルちゃんは返してもらおうよ」

「僕的には返してあげても良いんだ」

「じゃあ通してくれない？」

「それだとクビになっちゃうんだよ。だから……」

ヤイトの目が真剣なそれに変わる。

その時アイシュは威圧感に気圧された。

「女の子でも倒します」

アイシュの頬を嫌な汗が伝い、金槌を持つ手が震える。

それは紛れもない恐怖だった。

第42話 戦場は紅く染まる（後書き）

（アイシュ）

「ハロー！アイシュ・タイレーンだよ」

（雪龍）

「アイシュの名前はある偉人から取ったんだ」

（アイシュ）

「えっ、そうなの？てか何でこのタイミングで言ったの？」

（雪龍）

「ここ以外で言う機会が無さそうだったし」

（アイシュ）

「まあ、結構な人がわかってるかもだけど誰から取ったの？」

（雪龍）

「アイنشユタイン」

（アイシュ）

「だろうね」

（雪龍）

「ちっちゃい子がアイスの事をアイシュって言っていると笑えて来るんだ」

（アイシュ）

「それはあんま聞きたくなかったな……」

第43話 一発逆転の槌

（この子……ヤバい！）

アイシュは金槌を前に構える。

ヤイトはまたニコニコと笑っている。

「随分余裕だね……」

「あれ？そう見えますか」

アイシュは金槌を更に大きくし、ヤイトに向かって振り下ろす。
しかしヤイトが手をかざしただけで跳ね返された。

「えっ!？」

「金槌が武器なんて相性が悪かったね」

ヤイトが再度手をかざすと、今度は手に吸い込まれるかのように金槌が動き出した。

（まさかこの子の能力は……!!）

アイシュはヤイトの能力が少し分かった気がした。

アイシュは金槌を思い切り投げる。

するとアイシュは止まり、金槌だけが猛スピードでヤイトに飛んでいく。

「もう気付かれたか……ま、良いや」

突然金槌がアイシュの方に向きを変える。

「えっ、ちよっ、わわわわ」

驚いて思わずしゃがむ。

金槌は頭すれすれの所を通り過ぎた。

「あっぶな〜…」

気を抜いていると今度は目の前に鉄製の槍が飛んできて地面に刺さる。

「え、えーと……」

「そろそろお別れにしますか」

ヤイトから無数の槍が飛んできて、多少は躲すが肩や足などに傷ができていく。

一体どこにこれほど隠し持っていたのかわからないがとりあえず今は…

「逃げる！」

猛スピードで逃げた。

金槌を使う自分にとってヤイトの能力は相性が悪すぎるのだ。

「仕方ないなあ……鬼ごっこですか」

ヤイトも歩いて着いて行っただ。

アイシュは今何処かは分からないが演習場を出て、身を隠している。

「ふう……あの子の能力には勝てないかなあ……」

アイシュはそう言いながらも周りに使えそうなものが無いか探してみる。

色々な物が綺麗に並べて置いてある。

アイシュはあるものを見つけた。

「これ使えるけど……何でこんな所にあるの？ここは宝物庫か何か？」

アイシュは見つけた物を改造し始めた。

『聖冠団』本部の廊下

「はあ、昔から鬼ごっこはあまり好きじゃなかったな……かくれんぼもだけど」

「じゃあ遊びは終わりにしようか」

アイシュがヤイトの前に現れる。

手には透明な石で出来た槌を持っている。

アイシュはその槌を大きくし構える。

「何が来ても僕には……」

「君の『磁力』にはもう負けない」

「気付いてたんですか。でも過信は良くないですよ！」

ヤイトが手を前に出す。

先程までなら金槌が手に吸い込まれるように引き込まれたり、飛ばされるように離れたりしたが今はそれが無い。

「なっ……！」

「これは反磁性体のみで造られた槌。だから君の『磁力』の感傷を受けない」

「そう言う事ですか!」

ヤイトは先程使っていた槍ではなく懷から鉄でできた物を大量に取り出す。

「君実は暗器使いとかじゃないよね……」

「さあ…ね!」

一斉に鉄が飛んでくる。

アイシュは槌を自分が隠れるほどに大きくし、鉄から身を守る。

「アンマグネティックハンマー
反磁性の掃討槌、解放」

槌をヤイトの方に向ける。

「何をする気ですか?」

「それはお楽しみだよ」

ヤイトは冷や汗と少しの笑みをこぼした。

その時アイシュの槌の先に着いている棘の様な物が光り出した。

「吹っ飛べ……」

「希望の大槌で!!」

「高圧噴射！——水の巻！」

先端からとてつもない勢いで水が噴射された。

かなりの圧力を掛けた水は岩をも切断すると言う。

威力はかなり加減したが、ヤイトは10m程吹っ飛んだ。

「水も反磁性体なんだけど……この威力じゃあんまし関係無かったかな……」

只今の『アース』vs『聖冠団』の戦績

1勝0敗1分け：0勝1敗1分け

残り人数：11対10

「……あなたどこに隠れてました？」

「……宝物庫？」
（まさか……）

ヤイトの頭には一つだけ思い浮かべている事があった。

「かはっ……それはダイヤモンドですか……？」
「たぶんね」

その答えで確実に彼の物だと分かった。
『聖冠団』で最も怒らせてはならない者。

「早く逃げた方が良いと思いますよ……」
「えっ？」

その時アイシュに重圧が押し掛かる。
ゆっくりと振り返るとそこには紫色の長い髪と目で、黒いコートを
着た男が歩いてきていた。

「私のコレクション部屋に誰かが侵入したから見に来たが……まさ
か玩具にされてるとはな」

アイシュが構える。

しかし、そのたった一瞬の内に紫髪の男は目の前に移動していた。

「え——」
「私のコレクションを傷つけた罪……死んで詫びろ」

男は袖に隠し持っていた小刀でアイシュを切り裂いた。
その様子を『アース』メンバーの中でも最も見てはならない者が見
ていた。

その者とは――

「てめえ……よくもアイシユを……!!」

灰色の髪を持つ男、ヒルグ・エニージオだ。

只今の『アース』vs『聖冠団』の戦績
1勝1敗1分け：1勝1敗1分け
残り人数：10対10

第43話 一発逆転の槌（後書き）

（雪龍）

「次週はヒルグだよ」

（ヒルグ）

「やっと俺の初舞台か」

（雪龍）

「僕も楽しみだな。頑張れよ！」

（ヒルグ）

「ああ、あのクソ紫をぶっ殺してやる……!!」

（雪龍）

「ヒルグが本気だ……」

（ヒルグ）

「次回もお楽しみに」

灰色の想いと力

「何者だ？」

「てめえええええ！！！」

ヒルグの手から砂の様なものが大量に出てくる。

砂の様なものを紫髪の方は避けるが、その避けた先にヒルグがいて殴り飛ばされる。

「あと五分だ……」

「何がだ？」

ヒルグが男を指差す。

「てめえを殺すまであと五分だ！！」

男に一斉に砂の様なものが向かっていく。

しかし手応えは無かった。

「ふむ、
灰
か……」

!!

男はヒルグの背後に移動していた。

「私は『聖冠団』第五部隊隊長、メイゼル・セイホード」

ヒルグの灰が一斉に舞う。

そしてメイゼルに向かっていくが消える。

「なっ！」

「後ろだ」

その言葉通りヒルグの後ろに灰が降った。

一瞬にして移動したのだ。

「私に攻撃は効かない。無駄だ」

「知るか！！」

灰を操りメイゼルに攻撃する。

しかし全てがあらゆる場所に移動してしまう。

「くそっ！！」

「ふむ、私も他を潰さねばならん。終わらせよう」

メイゼルは一瞬でヒルグの目の前に移動し、アイシユの時の様に小刀で切り裂いた。

だがヒルグは倒れなかった。

それどころか力一杯メイゼルの腕を掴んだ。

「捕まえたぞ……！！」

「っ！おのれ……！！」

ヒルグは灰を操り、自分とメイゼルを囲んだ。

「てめえの能力はいまいち分かんねえけど物体を遠ざける。けど全方向から向かってきたら流石に無理なんじゃねえの？」

灰が集まって無数の針が二人を囲んだ。

「一緒に死ぬ気か!？」

「死ぬのはてめえだけで十分だ!!」

そして一斉にヒルグもろともメイゼルを突き刺した。

アイシュはうつすらと目を開ける。
そこには何かを灰が囲んでいた。

「起きましたか」

声の方を向くと壁にもたれ掛かって座っているヤイトが微笑んでいた。

「ヒルグが……戦ってるの？」

「名前は知りませんが灰色の髪の方でしたよ」

それだけでヒルグだと分かった。

『アース』のメンバーで灰色の髪はヒルグだけだからだ。

「メイゼル隊長の能力に勝てる者はそうそういません。恐らく彼も……」

「あいつの能力って……？」

「メイゼル隊長の能力は『空間転移』。目で見た空間を自由に転移させる事ができる。つまり能力ごと転移させる事ができるので彼に攻撃は当たりません」

「そんなのに勝てるわけ……」

「しかし自分以外の人がいる空間は転移することができません。更に一度に一つの空間しか転移する事ができません」

その時灰が針の様な形になった。

アイシュはそれを見て青ざめた。

「まさか……」

「一緒に死ぬ気か!？」

「死ぬのはてめえだけで十分だ!!」

その声と同時に灰の針は一斉に二人に突き刺さった。

「ヒルグッ!!!」

思わず目を覆いたくなった。

もし生きていたとしても無事では済まないだろう。

涙がこぼれる。

涙が止まらない。

「ヒルグ……!!」

「何だよ……」

アイシュの目の前には血だらけだが、確かにヒルグがいた。

「ヒルグ……」

「安心すんのはまだ早いんだけどな」

そう言っただけを見る。

そこにはメイゼルが苦しそうに立っていた。

「負けるわけにはいかん……」

「いや、チェックメイトだ」

ヒルグがそう言った瞬間メイゼルの足を灰が固定していた。

「クソがッ!!」

「口調が変わってるぜ。隊長さんよ」

灰を転移させるがその時にはもう遅かった。
ヒルグは今残る全ての輝力を右手に溜めた。

「消え失せよ……」

「焼失せし灰燼で!!」

「ぶっ飛べ。クソ野郎」

全ての力、全ての想いを込めた全身全霊の拳がメイゼルに炸裂した。
メイゼルは吹っ飛び、壁が挟れるほどに激突した。

「あーあ、軽く五分越してんな」

只今の『アース』vs『聖冠団』の戦績

2勝1敗1分け：1勝2敗1分け

残り人数：10対9

第44話 灰色の想いと力（後書き）

（雪龍）

「この章、短くても後10話位だな……長いなあ」

（レックス）

「まあまあ、そう言わずに頑張ろうよ」

（雪龍）

「次回はレッ君。頑張れよ！」

（レックス）

「お任せを」

（雪龍）

「では次回もお楽しみに」

第45話 闇を封ず鍵

「うーん、ここはどこかなあ？」

レックスは敵陣のど真ん中で道に迷っていた。
部屋に移動させられた時、敵はいたのだが寝ていたのだ。
起こすのも面倒なので外に出たら道に迷ったのだ。

「あそこに誰かいそうだなあ……」

レックスは部屋の中を覗く。

そこにはカレンと黒髪の男が向かい合って立っていた。

「うわあ、あんまり良い状況じゃないっぽいね」

レックスは黙って立ち去ろうとする。

しかし突然目の前の壁が何かによって壊された。

壊れた壁の穴から中を覗くと中にいる二人ともがレックスを見ていた。

「貴様も『アース』か」

「レッ君!？」

「えーっと、ははは……」

レックスは苦笑するしかなかった。

結構気まずい状況だったから逃げようとしたのに、まさか見つかったとは。

「ここにいるって事は……レッ君もう倒したの!？」

「いや、僕の相手らしき人は寝てたんだよね。で、あの人が一レンって人？」

カレンは頷いてユーレンを見る。

ユーレンは敵が二人になったにも拘わらず（レックスは戦う気は毛頭ないが）平然としている。

「ユーレンさん、僕の相手知りませんか？」

そう言いながら一人の青年が入ってくる。

青年は長い黒髪を後ろで括っており、何故か笑顔だ。

「あつ、寝てた子だ」

「彼が僕の相手ですか？それに寝てたんじゃなくてイメージトレーニングをしてただけです」

「よだれ垂らして？」

「……………」

青年は何も言わず頭を掻いた。

「というより元の部屋に戻りませんか？ここじゃユーレンさんの邪魔になっちゃいますし」

「いや、ここでやって！」

そう言ったのはカレンだった。

カレンはレックスが戦うという事に嫌な予感がしていた。

「俺は構わない。これと言って急いでいないからな」

ユーレンもそう言った事でレックス達はここで戦う事になった。

「僕は『聖冠団』第三部隊副隊長、メリクト・ロウダーです」

「僕はレックス・セルベシア。レッ君って呼んでね」

メリクトは「よろしく」と言った途端、何かを投げつけて来た。

レックスは大剣『破邪光神剣』でその何かを防ぐ。

落ちたその何かというのは『チャクラム』だった。

チャクラムというのは穴が開いた円盤の様な武器の事で、外側には歯が付いており斬れるようになってる。

「へえ、これを防ぎますか。でも甘く見ない方が良いでしょう」

メリクトの言葉と同時にチャクラムが浮き上がり動き出したのだ。

そんな事は予想をしていなかったレックスはチャクラムによって腹を横に斬られた。

腹から大量の血が溢れる。

すぐに大剣を振り、チャクラムを壊した。

「ふう……まさか突然動き出すなんてね。輝力で操ってるの？」

「ご明答です。しかし一つだけだと思ったら」

メリクトはどこからか大量のチャクラムを出して、投げつけた。

「百輪月花！」

一斉にチャクラムがレックスに向かう。

しかし、レックスは一瞬で『魔錬具強化改造』をし、防いでいく。

「この、量は、流石に、きつい……ねっ！」

頑張っでは見るものの、この数には勝てなかった。
次々とレックスの体に傷ができる。

（マズイ！あのままじゃ…！！）

その瞬間、レックスの体が一瞬ピクツと何か違和感のある動きをした。

（血…？誰の…？僕の…いや——）

（オレのだ！！）

レックスはニヤツと笑い、全てのチャクラムを叩き落とした。
今のレックスの表情は今までの優しそうなそれではなく、全てを殺
してしまいそうなものだった。

「久し振りに出て来れたなあ…！！この前はもう少しで出れそうだ
ったのに自分で抑えやがって！」

（急に口調が変わった…？）

「暴れるぜえ…！！切り刻む——」

レックスは文字通り目にもとまらないスピードでメリクトの横を駆
け抜ける。

メリクトがレックスが後ろにいる事に気付いた時にはもう遅く、左
肩から腹にかけて大量の血が噴き出した。

「なっ…！！」

「絶望の斬撃——！！」

レックスが言い終わる前にユーレンが袖から先が尖った鉄の棒を四本取り出し、レックスの両手両足を貫いて壁に縫い付けた。

「何だお前……」

ユーレンはもう一本取り出し今度はレックスの心臓を狙う。だが、レックスは右手に刺さっている棒を無理矢理力だけで抜き、ユーレンを殴り飛ばす。

「化け物め……!!」

鉄の棒を全て抜き、よろよろと近付いて来るレックスは本当に化け物にしか見えなかった。

「レッ君……やっぱりあの状態に……」

この状況でレックスを止められるのはカレンしかいなかった。流石に腕力では勝てないが、切り札を持っている。

「ああ？お前何だ？」

「ごめん、レッ君」

カレンは槍でレックスを貫いた。しかし傷はない。

「闇は光に力を鍵に、封!!」

カレンがそう唱えるとレックスが前に倒れる。

「ありがとね、カレン」

「ありがとうじゃない……！私は……！！」

「いや、ありがとうだよ。僕を救ってくれたんだから」
「けど！この封がある以上レッ君は……」

その先の言葉が出なかった。

否、出せなかった。

この封がある以上――――

レックスは輝流が使えなくなったなんて。

只今の『アース』vs『聖冠団』の戦績

3勝1敗1分け：1勝3敗1分け

残り人数：9対8

レックスは戦線離脱

第45話 闇を封ず鍵（後書き）

（雪龍）

「次回はやっとかレンだね」

（カレン）

「本当にやっとな」

（雪龍）

「レッ君が戦えなくなっちゃったね」

（カレン）

「レッ君の分も頑張るわ！」

（雪龍）

「頼もしいね。じゃあ頼んだよ！」

（カレン）

「次回もお楽しみに」

第46話 千手の真槍（前書き）

10日間も投稿できず、すいませんでした！
しかし今後もこのような事が続くと思います。
本当にすいません。

第46話 千手の真槍

カレンはレックスを壁に寄り掛からせて座らせて、ユーレンの居る方に向きなおす。

「アンタに会ったら言いたい事があったんだ」

カレンは槍を構えて言った。

「絶対倒す!!」

ユーレンは表情を全く変えず、無言で手袋をした右手を出す。そしてゆっくりと手袋をはずす。

「俺を倒す…か。やれるものならやってみろ」

手袋の下から出てきた手は、人間の様に肉や皮がついたものではなく、鉄で作られた義手だった。

「おい、どういうことだった？」

カインは誰もいない部屋で言う。

「何で誰もいねえんだ？」

本来なら誰かいる筈、いやこの際言ってしまうおう、アルバシスが
いる筈だったのだ。

今所用で居ないのだ。

カインは怒って部屋を出ていった。

その頃アルバシスはというと、

「ここで止まってもらおうか」

今アルバシスの前にいるのはクラウン。

「何？君には用ないんだけど」

「こっちはあるんですよ。これ以上壁壊されると困るんですよ」

「さっきも言ったよな？オレ遠回り嫌いなんだ」

アルバシスは「しかしね…」と溜め息をつく。

それを見てクラウンはというと、

「なら力ずくで止めてみなよ」

そう言つてクラウンは煙草を吸い始める。
それに反してアルバシスは煙草を消す。

「ここで戦うとまた壊れるんでちょっと移動させてもらいますよ」

眼帯を取り一瞬で先程までカインがいた部屋に移動する。

カインがいると思っていたアルバシスは少し驚いた。

「……そんな本気にならなくてもオレ位なら倒せるんじゃないんですか？」

クラウンが煙草の煙に包まれる。

そして煙が一瞬にして消えると中から、金髪オールバックの強面の男性が現れた。

「この姿に戻るのも何ヶ月ぶりだろうな」

「そんな何ヶ月ぶりのをオレなんかに使うんですか」

「オレなんかにか。テメエ第一部隊の隊長兼副団長だろうが」

「そうですね……」（果たしてどこまでやれるかな……）

「その手……アンタ……」

右手だけではなく、左手も同じく鉄で出来ていた。

「俺は人に作られた殺人兵器^{ヒューマノイド}。故に嬉しさ、哀しみ、怒り、楽しさ

等の感情や痛み等の感覚は持ち合わせていない」

それを聞いてカレンはクスクスと笑う。

「何がおかしい？ヒューマノイドが『聖冠団』の隊長をしている事か？」

「違うわよ……」

「アンタを倒すには動けなくなるまでボッコボコにすれば良いってことでしょ？」

「……感情が無い俺にでも解る。つまらない冗談だな」

カレンはユーレンに向かって駆け出す。

それと同時にユーレンは左手を筒の形に変える。

アームス・アーム キャノンタイプ
「武器手腕——筒型」

（自分の体を変形させた……！？）

「発射」

左腕から放たれる砲撃を躲すカレン。

カレンは『魔錬具強化改造』をし、炎を灯す。

ほうえんそつ
「砲焰葬——」

近付くのは難しいと思い、灯した炎を放つ。
しかし、左腕からの砲撃で撃ち落とされる。

「はああああ——」

「武器手腕——ソードタイプ 剣型」

今度は右手を剣の形に変え、槍を受け止める。
そして左手の筒で球を放つが、カレンはそれを上手く躲す。

「ふむ、そろそろ殺すか」

ユーレンが上着を脱ぐと、背中から大きな紫色の一对の翼が現れた。

「武器手腕——クロウタイプ 爪型」

ユーレンは凄まじいスピードでカレンに向かって飛んで行き、カレンの肩を爪で切り裂く。

カレンの肩から血が噴き出す。

しかしユーレンの脇腹からも血が噴き出した。

「へえ、ヒューマノイドでも血が出るんだあ……まさかオイルだと言わないわよね？」

「……下らんな」

ユーレンが目を閉じるとカレンの体に無数の切り傷ができた。

「なっ……！？」

「まさかとは思つが見えなかったか？」

「くっ……！」

カレンは槍を支えにして何とか持ちこたえる。
体は一瞬のうちにボロボロになってしまった。
全ての力を使ってアレをやるしか勝ち目がない。

(ふう…………よし!!)

カレンは集中し、深呼吸をしてこう言い放った。

「魔錬具破動改造!!!」

カレンの槍が光り出し、複数に分裂する。
その内の一本を掴み軽く振る。

「これが私の破動。その名も『ラスト・ランス千手の真槍』」

「…………ほう、破動を使えるとはな」

ユーレンは大して驚かず、両手を横に広げる。
すると顔が鉄の様になっていき、完全に人間の形をした機械となった。

「これで俺の全身が兵器となった。逃げ場は無いぞ」
「そんなの元からいらないわよ!」

カレンは槍を思い切りユーレンに投げつける。
振ったり、突き刺したりすると思っていたユーレンにとって、かなり意外な行動であった為、回避が遅れ肩に突き刺さる。

「まだまだあ!!」

カレンが別の二つの槍を一本ずつ両手に持ち、ユーレンに向かっていく。

ユーレンは無理矢理槍を引き抜き、へし折る。

オールアーム
「全身兵器———聖騎士型」

ユーレンの体が鎧のようになっていき、頭を兜で覆った完全防御の状態になる。

右手にはいつの間にか少し長めの剣が握られている。

ユーレンが変身して数秒後、金属がぶつかる音が幾度となく響く。目にも止まらぬスピードとはこういうのを言うのだろう。

二人は集中力を研ぎ澄ましているのでスピードについていけないが、周りで見ている者がいたとしたら全く見えないだろう。

「ここだあっ!!」

カレンが隙を見つけ、脇腹を突き刺そうとする。

しかし、鎧にはじかれ突き刺さらなかった。

代わりにユーレンがカレンを斬り上げる。

躲そうとするが頬に掠る。

カレンは一旦距離を取って態勢を立て直す。

(流石に強いわね……)

「中々にしぶとい奴だ」

「女の子にそれは無いんじゃない?」

「残念ながら俺にとって性別などどうでも良い」

「私はどうでも良くないっての」

カレンがジト目でユーレンを見る。

ユーレンはそれを見無視し、剣を自分の体に取り込み、今度は大鎌を出す。

「次で本当の終わりだ」

「アンタの、よね?」

カレンはニヤツと笑い槍を地面に突き刺す。
すると、その槍が宙に浮かび、分裂する。
その数は名の通り千はあるだろう。

「逃がさない。いや、逃がす隙を与えない。行け、『千手の真槍』」

カレンの言葉で千もの槍が一斉にユーレンに向かって飛んでいく。
カレンは勝利を確信した。

しかし、激しい金属音が響き槍が地面に落ちる。
槍の山の中から、鉄の壁が現れた。
その壁が消えるとその中には当然ユーレンがいた。

「全身兵器——シールドタイプ鉄壁の盾型。惜しかったな」
「いや、これで良いのよ」

そう言うとユーレンを中心として半径5m位の円が光り出す。
よく見ると、円周上には等間隔に7本槍が地面に刺さっていた。

「『千手の真槍』はただ槍が増えるだけが能力じゃない……」

「槍で囲んだ者を強力な力で破壊する」

「貫く……」

「鋭き槍術によって!!」

円の光が大きくなりユーレンを包む。
光の中では大きな雷が迸った。

ユーレンは仰向けで横たわっている。

「っ……動けん」

痛み等はないが流石に体が言う事を聞かない。
そう、カレンが勝ったのだ。

「ははっ……有言実行、ってね」

只今の『アース』vs『聖冠団』の戦績
4勝1敗1分け：1勝4敗1分け
残り人数：9対7

第46話 千手の真槍（後書き）

（雪龍）

「何か初めて戦闘らしい戦闘を書いた気がする」

（エリサ）

「アンタの技量でよくそんな事が言えたわね」

（雪龍）

「仕方ないじゃん！難しいんだもん！」

（エリサ）

「はいはい、わかったから。次回は私なのね？」

（雪龍）

「そう言う事。頑張ってたね」

（エリサ）

「では次回もお楽しみに」

（雪龍）

「感想待ってまーす」

（エリサ）

（久々に言ったわね……）

第47話 得意な相手と苦手な相手（前書き）

途中経過

『アース』 『聖冠団』

リオンーロウ

- アイシューヤイト●
- アイシューメイゼル○
- ヒルグーメイゼル●
- レックスーメリクト●
- カレンーユーレン●

第47話 得意な相手と苦手な相手

突然だが魔術師というのは前衛向きではない。

それは少し考えれば分かる事で、詠唱する時隙だらけになってしまうからだ。

故に一对一も向いていない。

そこでエリサは一つの考えに辿り着いた。

「逃げるしかない!!」

そう、逃げる事。

否、誰でも良いから仲間の居る所まで行く事。

だってエリサは一人では戦えないに等しいのだから。

「ちょっと!!カインも来てるんでしょ!!?」

「来てるけど!それが何!?!」

「居場所教える!!」

「私が知る訳ないでしょつ!!」

エリサを追いかけているのは、金髪ツインテールの少女だ。

恐らく歳はリルと同じ位。

可愛らしい笑顔を浮かべているが、エリサにとっては黒い笑みにしか見えない。

そして両手にはそれぞれ一本ずつ剣が握られている。

「誰か居ないの!?!」

同時刻、もう一人逃げている者がいた。
それは、

「正々堂々戦いなさい！男でしょう！！」

「あゝ、そう言う男女差別って良くないんですよ」

追いかけているのはシュード。
何故逃げているのかというと、

「女の子とは戦いにくいじゃないですか」

「……それは男女差別に入らないのですか？」

追いかけているのは肩にかかる位の緑髪で前髪を髪留めで止めている少女。

年齢的にはカインと同じ位だろう。

「待てと言っているでしょう！！」

「え？『正々堂々』とか『男だろ』とは言いましたが『待て』って言ったの今が初めてですよ？」

「一々細かいんですよ！空を裂け！虚空の荒波！プレジャーガモン
！！」

少女が詠唱を終えると、黒い塊がシュードに向かって飛んでいく。
シュードが避けて壁に当たると爆発を起こした。

「……流石にアレに当たるとやばいかな」

更にここにも一人逃げている者がいた。
誰かというと、

「誰かおらんのかーっ!!」

これで分かる人がいるかは分からないが、佐祢丸である。
それを追いかけているのは、赤髪で後ろがハネている青年。
何故逃げているのかというと、青年の能力を見たからだ。

「鬼ごっこは嫌いなんだ。
アクアセイバー 水漸狼牙」

青年の手から水の刃が放たれる。

佐祢丸がギリギリで躲すと廊下が決れた。

「……その刀は飾り物か？何故戦わない」
「喧しい!!濡れたら錆びるじゃろうが!!」

……拭けば良いのではなからうか。

「下らないな」

「もう！いい加減逃げるの止めなよっ！」

少女がジャンプし、エリサに斬りかかろうとする。

「ちよっ、待って！！」

そう言った瞬間、何かにぶつかった。

「いい加減終わりにしましょうか。空を裂け！虚空の荒波！プレジヤーガモン！」

「そろそろ逃げるのも辛くなってきた……」

シールドがそう言った瞬間、何かにぶつかった。

「ぬぬ……誰かおらんのか！！」

「もう終いにしようぜ。水漸狼牙」

青年から水の刃が放たれようとした瞬間、佐祢丸は何かにぶつかった。

ぶつかった拍子に後ろにこける。

起き上がり前を見ると、エリサとシールドがいた。

「おっ！丁度良い所に！」

「「「アイツ（彼女）を止めて（くれ）（ください）！！！！……へ？」「」」

三人の声が上手い事被る。

三人は困惑しているが、三方向から、斬りかかろうとしている少女、黒い塊、水の刃が向かってきている事によって、三人の頭にすべき事が浮かんた。

「重なる壁、我が身を護れ、五鳳壁！」

エリサが詠唱を終えると、三人は爆発した。

正確には爆発したように見えた。

黒い塊はエリサが魔術で呼びだした壁で防がれ、少女の剣は佐祢丸が防ぎ、水の刃はシールドが凍らせた。

「へえ、上手い事戦いやすい人達が揃いましたね」

「そうね、あの子も魔術師みたいだし」

「拙者は女子とは戦いたくないぞ！！」

「「……………」」

「無視するな！！」

反対側の『聖冠団』サイド

「あのチビ、俺の水漸狼牙を凍らせやがった。あのチビは俺が貰う」
「貴様、隊長を差し置いて勝手に決めていいとでも…っ!!」
「別にあたしは構わないよ。だってルアはあの金髪の子じゃないと戦えないでしょ？それにあたしはあのサムライ君と戦いたいし」
「決まりだな」

そう言つて赤髪の青年と緑髪の少女が一步前に入る。

「俺は『聖冠団』第五部隊副隊長、ブラウド・レシースだ。そのチビ、俺の相手しろ」

「私は『聖冠団』第六部隊副隊長、ルア・ノール。金髪の方、私の相手をしてください」

「……あたしの番？あたしは『聖冠団』第六部隊隊長、ミナス・タイク。サムライ君、相手してね」

それぞれが自己紹介し終わった後、エリサ、佐祢丸、シュードの三人が向かい合う。

「僕はシュード・フリーザー」

「私はエリサ・スレット」

「拙者は如月佐祢丸」

「『チビ（金髪の方）（サムライ君）って名前じゃない!!!」
「」

「ツッコむ所はそこですか!？」

「あははっ、面白い!……けど、カインは返してもらつよ」

ミナスが言つた言葉に三人は驚く。

そもそも『アース』メンバーが来た理由はリルを救うため。
カインを護るためではない。

というより『返してもらっ』という言葉が引っ掛かった。

「あれ？まさかカインから何も聞いてないの？」

「そう言えばアンタさつきからカインカインって馴れ馴れしいわね」

「そりゃそうだよ。だってカインは——ムグッ」

ミナスの口がルアに塞がれる。

ルアはニヤツと笑い、三人を見た。

「この続きは私達に勝てたら教えて差し上げますよ」

「……へえ、ならさっさと勝って聞き出しますか」

「いや、僕（拙者）は興味無い」

「……じゃあ、私だけ勝ったら聞かせてもらっわ」

こうして一気に三つの戦いが始まった。

「あっ、三つ一度には戦いにくいから別の部屋に移動しない？」

第47話 得意な相手と苦手な相手（後書き）

（エリサ）

「ちよつと待って！前回頑張れの事言っときながら一話使って相手交換しただけじゃない！」

（雪龍）

「大丈夫、次回こそはエリサのバトルだから」

（エリサ）

「……まあ良いわ。それよりカインって一体何者？」

（雪龍）

「それここで言ったら駄目じゃん」

（エリサ）

「引っ掛からなかったか」

（雪龍）

「とにかく次回もお楽しみに」

（エリサ）

「感想も待ってます」

第48話 普通を求めた天才

今ここにいるのはエリサとルア。

二人は少し広い部屋まで来ていた。

（『アース』のメンバーは誰もいない。これなら良いか）

「さて、始めましょうか。空を裂け、虚空の荒波！プレジャーガモン！」

「重なる壁、我が身を護れ、五鳳壁！」

先程と同じ技を同じ技で防ぐ。

「飛び立て、真紅の鳥！ロスト・バード！」

赤い炎の鳥がエリサに向かって飛んで行く。

エリサはそれを簡単に躲す。

「どうしたんですか？何故攻撃しないんです？」

「特に理由なんてないわ」

そう言いながらもちゃんとした理由はある。

それはルアの魔術を見る為。

エリサの術には中間の強さの物が無い。

初級の物と上級、超級のみ憶えている。

（はあ…。やっぱり中級も覚えとくべきだったなあ）

何故覚えていないのか。

それはエリサの性格故だった。

10年前。

エリサ・スレット8歳。

彼女には才能があつた。

彼女はこの頃から魔術を使えた。

そこまでは別段珍しくない。

しかし彼女は違った。

普通この頃の子供なら初級、もしくは中級魔術を使うのがやっと。

普通の子供が初級魔術を使う中、彼女は上級、更には超級魔術を扱ったのだ。

超級魔術は大人でも扱える者はそうそういない。

周りの人間はエリサの才能を見た。

エリサという人間としては見てももらえなかった。

「楽しくない」

「私だって皆と普通に遊びたい」

「そう、普通が……一番なんだ」

それから彼女は初級の術ばかり練習した。
普通になりたいが為に。

しかし彼女は魔術士と一対一で勝負した時、負けた事は今までに一度もない。

（けど本当はそれじゃ駄目だったんだよねあ……）

「勝負中に考え事とは余裕ですね！！飛び立て、真紅の鳥！ロスト・バード！」

「その地に祀られし聖なる水よ、アクアシュート！」

炎の鳥を水で相殺させる。

今のエリサは全くと言って良いほど集中できていなかった。

「……私を舐めているのか？」

「違う、私は本気を出したくない」

「なんだと……？」

ルアから輝力が大量に発せられる。

「自分で言うのもなんだが私は『聖冠団』の副隊長を任せられるほ

どだ。本気で来られても構わないぞ！」

その言葉にエリサはピクツと揺れる。

過去を思い出す。

本気でやればいつも恐れられるか、変な目で見られるかだ。

「もう良い、終わらせます！天空を揺るがす波紋の力、その身に刻め魔の刻印！ファイナリーエンブレム！！」

ルアが展開した黒い魔法陣から小さな魔法陣がエリサに向かって飛んで行く。

そしてエリサを覆った。

「ロックオン！」

「死の烙印、魔の系譜、妖の共鳴……」

魔法陣に力が溜められる。

「蒼穹に瞬く流星を見よ、遙か彼方の栄光を見よ！」

「3……2……」

エリサも大きな魔法陣を一つ作る。

「聞こえるか！渴望の序曲！！」

「1……終わりだ！発射あ！！」

黒い魔法陣から黒い波動が放たれる。

それと同時にエリサが展開した魔法陣の周りに小さな魔法陣が8つ出来る。

黒い波動が魔法陣によってかき消される。

「なっ……！」

「撃ち砕け、八つの生命、一つの創世……！」

「超級……魔術……！！！」

「エターナル・スペース・エレメンツ
八星と日輪の蒼穹撃……！！！」

「魔術士の名の下に沈め」

その言葉と同時に全ての魔法陣から白い光線が放たれ、ルアを呑み込んだ。

エリサはそれを見て溜め息をつく。

「やっぱり本気なんて出すもんじゃない」

「そんな事……無いですよ……？」

エリサがゆつくりと声のした方を見る。

そこにはボロボロのルアがいた。

「まだ終わっていませんよ……？」

（加減してないのに立てるなんて凄いわね……）

「飛び立ち羽ばたけ！業火の怪鳥！ロスト・フェニックス！」

今度はロスト・バードとは違いかなり大きい炎の鳥をエリサに放つ。エリサはギリギリ躲すが、ロスト・フェニックスは迂回して戻ってきた。

「ロスト・フェニックスは敵を燃やし尽くすまでその翼を休めませ
ん」

「我に水壁の防御を！純水牢壁！」
ウォーターウォール

エリサの背後に大きな水の壁が出来る。
それにロスト・フェニックスが激突すると一瞬で消えてしまった。

「くっ、私は、負けない…っ！」

「私だっけ負けたくない！……というより負けられないんだ」

リルを助ける為に。

エリサは何があっても負けられない。

「これで最後にしましょうか」

「ええ」

二人が構える。

「天空を揺るがす波紋の力、その身に刻め魔の刻印！ファイナリー
エンブレム！！」

「その爆撃は天下をも轟かす！その極光は地の果てまで照らす！オ
ーバーレイン！！」

エリサが上に光の弾を放つ。

少し上がると光の弾は分裂し、降り注ぎ、地面やルアに当たると爆
発した。

対するルアの攻撃はエリサに直撃し吹き飛ばした。

「いたた……」

エリサは壁を支えにして立ち上がる。

部屋の壁や床はクレーターが幾つも出来ていた。

「ちよつとやり過ぎちゃったかな」

エリサが周りを見るとルアがあおむけで倒れていた。

「……私の負けです」

「その格好で勝ったって言われても困るけどね」

エリサとルアは苦笑する。

「貴女は…その力を仲間に隠しているのですか？」

「……隠してるわけじゃない。ただ私は弱いだけよ」

「そんな事はありませんよ。貴女は…十分強いです」

「いや、私は弱い。正確には弱くありたかった」

ルアは黙ってエリサの話を聞いている。

「私は自分の才能が嫌でずっと弱いフリをしていた。そうすれば私も普通になれると思ったから」

「でもそうじゃなかった。私は結局普通になんてなれなかった」

「天才だと煽てられても嬉しくなかった。普通になりたかったただけなんだから」

そこまで言ってエリサはハッとした。

ゆっくりとルアの方を見る。

ルアは少し微笑んだ。

「私にもいますが貴女には仲間がいる。今はそれだけで良いのではないですか？」

「そう、ね」

エリサはもう、普通に憧れるのは止めた。

何故なら仲間がいて、守って守られる。

それが今のエリサにとっての普通だけど、とても大切なものだと感じていたから。

只今の『アース』 v s 『聖冠団』の戦績

5勝1敗1分け：1勝5敗1分け

残り人数：9対6

「まあ、勝負が着いた所で早速だけど聞かせてもらおう……」

「カインとあなた達について」

第48話 普通を求めた天才（後書き）

（雪龍）

「最初に言っときます。今回グツダグダでしたね」

（シユード）

「それがあなたらしさじゃないですか」

（雪龍）

「……嬉しくない」

（シユード）

「まあ、次回はグダグダ感控え目で頼みますよ？」

（雪龍）

「頑張ります！」

（シユード）

「では、次回もお楽しみに」

第49話 凍て付いている少年

「アクアセイバー
水漸狼牙！」

「――を凍らせる」

言葉通りブラウドの水の刃をシュードが凍らせる。
先程から何度これを繰り返しているだろうか。

「貴様、自分からは攻撃しないのか？」

「良く言ってくれますね。攻撃しようとすれば近付けないようにするくせに」

シュードはそう言いつつ、小さな氷の塊を大量に放つ。
それを水で壁を作り防ぐ。

「えーと……リルちゃんは団長さんの所にいるんですか？」

「さあ、どうだろうな」

「団長室の場所を教えてくださいませんか？」

「誰が教えるか」

ブラウドは地面に水を撒き散らす。

「大体俺を倒してもいねえのに何でそんな事を聞くんだ？」

「うーん、倒してから聞けないから」

「へえ、もう俺を倒す気にいるのかよ……」

ブラウドが撒き散らした水が、蒸発する。

シュードはもう一度氷の塊を放つが、ブラウドが出した水に触れるとすぐに溶けてしまった。

「てめえは血祭り決定だ……!!」

「何を怒っているんですか？カルシウム足りてないんですか？」

シールドは口では余裕ぶっているが、実際の所かなり不利な状況だ。相手は自分の攻撃を防げるが、自分は防げるかどうか分らない。それだけでも不利であるが、それ以上に今のブラウドが出している水が厄介だ。

（湯気が立っている……。熱湯か。それも尋常でない温度の）

そう、今ブラウドが出しているのは熱湯。温度はおよ200度。

触れたら火傷なんて生易しいものではないだろう。

「アクアソウ水葬煉摩!!」

大きな水の斬撃をシールドは躲した。

凍らせず、躲した。

「どうした？さっきみたいに凍らせてみるよ」

「結構無茶言いますね」

この高温の熱湯を凍らせる事自体は可能だ。しかし、どうしても時間が掛かってしまう。

凍らせても間に合わず、攻撃を喰らってしまう、それでは本末転倒だ。

「今なら半殺しで許してやるがどうする？」

「大差ない気がするんで一人で勝手に言っただけです」

「ぶつ殺す!!」

「あの『聖冠団』副隊長ともあるつお方がそんなに易々と殺すとか言って良いんですか？」

全くシユードの言う通りなのだが、今のブラウドにそんな事を聞く耳は無い。

「流石にこれ以上暑くなるのは嫌なんで冷やしますかね」

「やってみろ!!」

ブラウドが熱湯の波をシユードに浴びせかけようとする。まるで熱湯の津波の様だ。

「屑かどうかはこれを見て言っして下さいよ」

部屋の壁や床が凍りつく。

その後、熱湯の津波はシユードに近付くと一瞬で凍ってしまった。

「なっ!!」

ブラウドは本当に凍らされるとは思っていなかったのだから驚く。それもそうだ。

本来、あの高温の熱湯を凍らせるのは無理なのだから。

「どうやって…!!」

「凍らせたんだ、ですか？そんなの簡単ですよ」

「まさか、てめえ…っ!!」

アブリリット・オーバー

「無限凍宮。部屋を凍らせ熱湯の温度を下げ凍らせました」

「いつの間に…!!」

部屋が凍らされるという事は、室温もちろん下がる。
それにブラウドは気付かなかったのだ。
それは何故か。

「熱湯に囲まれていたから、だから室温の変化に気付かなかった」
「なんだと……!？」

「それに頭に血が上って水温の辺からも気付かないとは……驚きですよー」

「くそっ……!」
「まだですよ」

シールドが言うとブラウドが足元から凍り始める。
数秒後、首より上だけを残してブラウドは凍りついた。

「どうします？負けを認めて団長さんの居場所を教えてくれるなら
全身スタスタで許しますけど」

「はっ、誰が教えるかよ!」

「……別に僕は良いですけど、このままだと凍傷で死んじゃいます
よー?」

「誰が……死ぬって?」

ブラウドは全身から熱湯を放出して氷を弾き飛ばす。
そして凍りつく前にその場を離れた。

アクア・リッパー
「水突槍……!」

ブラウドは手から水を放出し、シールドに向かって走り出す。
放出されている水は走っている間に凍り、氷の槍となった。

「自分の能力と同じ氷で死ね……!」

その氷の槍をシュードの腹に突き刺した。

ここはとある廊下。

カレンは壁にもたれ掛かって少しずつ移動していた。

「いたた……」

カレンは壁にもたれ掛かって座る。

その時、何かを感じた。

「……シュード？」

カレンはシュードの事をよく知っている。
ある人物に聞いたからだ。

「まさか……!!」

シュードの腹を貫通し、氷の槍は血で赤く染まっていた。

「終わりだな」

ブラウドはシュードから槍を引き抜き、氷の槍を破壊する。
シュードはその場で動かず、俯いている。

「……立っただけ死んだのか？」

「……な訳ないでしょう？」

シュードもお返したと言わんばかりに、氷の槍を手に纏わせ、ブラウドを切り裂いた。

「がっ……!!」

「残念でしたね。もう傷口は凍っちゃいましたよ」

言葉通りシュードの出血は止まっている。

ブラウドの出血もすぐ凍って止まったが。

「もう交渉は無理そうなので倒しましょうか」

ブラウドは違和感を感じていた。

出血は止まったとはいえ、流石にあれだけの傷を負えば少なからず表情が変わる筈だ。

だが、シュードは全く表情を変えない。
まるで何も感じていないかのよう。

「まさかお前……痛覚が無いのか？」

「半分位正解です。正確に言うと感情が殆ど無いんです」

つまり、面白いと感じる事もなければ、悲しい、苦しい、痛いと感じる事もないのだ。

「どういう事だ？お前、人間か？」

ブラウドは自分の仲間人間ではない者を一人知っている。（その者をシールドも知っているが）

ただ彼はヒューマノイドだ。

「僕は人間ですよ。とある実験でこの力を得た代わりに、感情を失ってしまっただけです」

ある実験、それは『人工輝流士製造計画』と呼ばれている。輝流を得る代わりに自分の何かを失ってしまうのだ。

「僕に感情は無い。だから、自分が傷つくのも人を傷つけるのも怖くない……。いや、怖いという感情すら無いんでしょうね」

そこまで言うとブラウドの足がまた凍り始める。

だが先程と違ったのは既にシールドが動き始めているという事。

シールドはブラウドの下まで行くと、首を掴んだ。

そしてその逆の手には氷で出来たナイフが握られている。

「まずは一発」

そう言うと氷のナイフをブラウドの腹に突き刺した。

「ガハッ……!!」

「さて、苦しむのも嫌でしょうし、心臓を一突きに……」

「凍て付け……」

「清冷の氷塊で」

シールドがナイフを振りかぶる。
その時、誰かに腕を掴まれた。

「ふう〜、間一髪で間に合った」

シールドの腕を掴んだのはカレンだった。

どうやらボロボロの体を引きずって何とかここに来たらしい。

「てか、寒いから早く元に戻してくれない？ 君も負けたって事で良いよね？」

ブラウドは何も返さない。

氷が段々と溶けていく。

「とりあえず何故貴女がここにいるんですか？」

「デルスに頼まれてたのよ。アンタが人を殺しそうになったら止めるって。ったく、皆私に任せ過ぎなのよね」

先程のレックスの事と今の事をひっくり返して言っているのだろう。

「私はもう……することが無いから休むわ」

「それが良いでしょうね」

「言っとくけどアンタもよ」

「はいはい」

只今の『アース』vs『聖冠団』の戦績

6勝1敗1分け：1勝6敗1分け

残り人数：7対5

カレンとシュードは戦線離脱

第49話 凍て付いている少年（後書き）

（雪龍）

「はい、今回はちょっとした裏話です」

（佐祢丸）

「待て！次回は拙者じゃろ！？」

（雪龍）

「そうだけど一応言つとかないといけないことが一つあるんだよね」

（佐祢丸）

「一体何の事じゃ？」

（雪龍）

「レックスの事なんだけどさ。今回カレンが出てきてレックスが置いてけぼり状態になってるじゃん？」

（佐祢丸）

「確かにそうじゃな」

（雪龍）

「実はあの場にヒルグとアイシュが来てレックスを任せてシユードの下へ行つたのでした」

（佐祢丸）

「……あつそ」

（雪龍）

「あれ？興味なし？」

（佐祢丸）

「次回もお楽しみに」

（雪龍）

「そしてシカトっ！？」

第50話 如月流拔刀術（前書き）

すみません、投稿遅れました。
理由は活動報告を見てください。

それに50話と言う節目でまさかの佐祢丸って……。

（佐祢丸）

「それどついう事じゃ!？」

第50話 如月流抜刀術

「サムライ君、手抜いてない？」

ミナスは剣の切っ先を佐祢丸に向けて言う。
対して佐祢丸は片膝をつき、体の至る所に切り傷がある。

「もうちょつと楽しめると思ったのになあ」

「……………」

「黙ってないでなんか言つてよお」

「………… お主は第六部隊の隊長、だったな」

ミナスは笑顔でその通りと答える。

佐祢丸は立ち上がって続ける。

「お主を含め六人隊長がいるという事で良いのか？」

「うーん………… 正確にはもう一人いるけどこのゲームに参加してるのは六人だよ」

「そうか。と言う事はお主を倒せば隊長は後五人になるんじゃない？」

そんな事を一々尋ねないでも良いだろうに。

ミナスは「ちょつと待って」と言つて、大きな画面の付いている機械を見る。

「えつとね………… 隊長は残り四人、副隊長は一人。ちなみにそつちは後七人」

「こつちで残っているのは誰じゃ？」

「君とカイン、リーフ、エリサ、イグルス、スラン、ヒルグだよ」

とりあえず今の戦況は把握した。

この中で誰か一人でもリルの下に辿り着ければ『アース』の勝ちだ。数的には『アース』が有利だが『聖冠団』の残っている者は隊長ばかり。

佐祢丸は敵の数を一人でも減らしておきたいところだが…。

（何故拙者の敵が女子なんじゃ！！戦いにくくて仕方ないわ！！）

と、佐祢丸は考えているが実際の理由はそれだけではない。通常の女性相手なら何とか闘えるだろう。

問題はミナスのルックス。

そう、ミナスのルックスは佐祢丸のタイプと真ん中だった。

「ねえ」

（やばいぞ！このままではやばい！まともにも顔も見れん！）

「ねえってば」

（何なんじゃ！この胸が弾むような感覚は！！）

何か佐祢丸が言うとき気持ち悪い。

佐祢丸が色々と考えているとき、

「ねえって、言ってるでしょ？」

ミナスの刃が佐祢丸を捕えた。

…かと思われたがギリギリの所で防いだ。

「不意打ちとは卑怯じゃぞ！」

「いや、ねえって呼んだもん！それに戦闘中に考え事は良くないと思うなあ」

一流の剣士は戦いの最中何も考えずただ剣を振るらしい。
だが別に佐祢丸が三流だという事ではない。
恋する年頃なのだ。

にしても闘ってる相手に一目惚れって一体…。

「むむ……どうするべきか」

「闘ってるんだよね？あたし達」

ミナスの言っている事は正しいのだが、今佐祢丸はそんな事を言っているのではない。

どうやってこの状況を切り抜けるか、と言う事だ。

佐祢丸は女性を斬るつもりは毛頭ない。
かといって斬られる気もない。

（やはりアレしかないか……）

「魔道具強化改造……」

「……！！」

ミナスの右手に持っている剣が伸びる。

伸びると言っても数センチではない数メートルだ。

現在の長さは約5m。

対して左手の剣は少し短くなっている。

「サムライ君、君は改造しないの？」

「拙者は主を……女子を斬る気はない」

「そんな甘い事『聖冠団』には通じないよ」

「じゃろうな……来い」

佐祢丸は刀を鞘に納め、居合の構えをする。
そして目を閉じて集中する。

「これで終わりだよ」

ミナスは長い剣を佐祢丸に向ける。

その瞬間、一瞬で剣が伸び、佐祢丸の腹を貫く。

「ぐっ……!!」

「そしてこっちで……止め!」

(拙者は……死んではならん……奴を斬るまでは!!)

佐祢丸は目を開き、腹に刺さっている剣を抜いて投げ捨てる。
そしてまた居合の構えをする。

「如月流抜刀術——刀狩!!」

パキン——

鉄が碎ける音。

その鉄は剣、ミナスの剣。

「なっ……!!」

「剣が折れたんじゃないもう戦えんな」

「あたしはまだ……!!」

「ふむ、じゃあ引き分けで良いじゃろ？」

そう言つて佐祢丸は仰向けになつて寝る。
数秒後には眠りに着いた。

いくら相手の剣が折れたからと言って、敵の本陣で寝れる勇気を僕は称えたい。

ていうかの。太並みの速さだな。

「いやいや、何で寝てるの!？」

ミナスが叫ぶが佐祢丸は起きない。

只今の『アース』vs『聖冠団』の戦績
6勝1敗2分け：1勝6敗2分け
残り人数：6対4

カインは廊下を歩いている。

「いやいや、何で寝てるの!？」

「ん？この声は……」

カインは声のした部屋を覗く。

そこには倒れている（寝ているのだがカインにはそう見えた）佐祢丸を見覚えのある少女が指でつついている様子が見えた。

「やっぱミナスか……」

「この臭いは……カイン！？そこにいるの！？」

「お前は犬か！？」

ミナスは泣きながらカインに抱きつく。

「ひ、ひぎじ振りい！会えて嬉じつ、じい……」

「言いなおしても結局『じい』つつてるぞ」

カインはミナスの背中を撫でる。

数分してミナスが泣きやむ。

「さて、俺は行かなきゃなんねんだ。……リルは団長室か？」

「やっぱりカインだね……。昔と同じで仲間が大事なんだね」

「大事……俺はもう失いたくないだけだよ。で、団長室にいいのか？」

「うーん……あたしは知ってるけど教えられないんだ。ゴメンね」

「いくら元『聖冠団』第二部隊隊長でも、ね」

第50話 如月流抜刀術（後書き）

（雪龍）

「次回は回想に入るかと思いきや……」

（リーフ）

「次回は俺の番だ」

（雪龍）

「ふう、今回はベストオブグダグダだったね」

（リーフ）

「自分で言っな。自信を持て。お前は出来る奴だろ？」

（雪龍）

「リーフ……」

（リーフ）

「お世辞なんだが……もしかして信じてるのがコイツ」（ボソッ

（雪龍）

「聞こえてるぞバカ野郎」

（リーフ）

「まあ次回もお楽しみに」

第51話 その力、碎ける事なく（前書き）

戦績を変えました。

第51話　その力、碎ける事なく

「まったく、皆一瞬で消えるんだもんな……」

「デメエも今消えようとしてるだろ」

「あ？……いつからいたんだ？」

リーフのいる部屋にいるのは銀髪、釣り目、口が悪いという悪ガキ三拍子を兼ね備えたイカツイ青年だ。

まあこの三つでそう言うのは偏見以外の何物でもないが。

「オレは『聖冠団』第二部隊隊長、シン・エイルハーンだ」

（第二部隊隊長って事はカインの後釜か？てか急に何で名乗ったんだ？何かの作戦か？）

バカの心得その壱。

とりあえず色々考えてみる。

「考えても仕方ねえか」

バカの心得その弐。

考えてみるもののすぐ諦める。

「さて、そろそろ始めつか」

「デメエ自分も名乗ったらどうだ？」

「ん？名乗ってなかったっけか？」

バカの心得その参。

細かい事は忘れて次に行こうとする。

「俺はリーフ・クリーク。お前らが良く知ってるカインの弟だ」

「……そうか。まあ、相手が誰だろうと『聖冠団』に楯突くモンは消してやる」

「知るかよ。こっちは忙しいんだ。サクツと終わらせてやんよ」

リーフは銃を取り出し、右手で構える。

そう言えば初期にしてたゴーグルってしてないね。

「さあ、始めるぜ？」

「ああ、そうしよう」

「お前のその力、俺が預かるから」

「はあ？」

これは3か月程前、修行を開始してすぐロアールにこう言われた。

「説明は後だ。とりあえず」

ロアールがリーフの頭に手を置く。

リーフの体から力が抜けていく。

「こんなもんだろ」

ロアールは手を離す。

リーフはその場に崩れ落ちる。

「何…しゃがった…!!」

「お前から死力を抜き取った」

「はあ!？」

リーフはロアールに掴みかかろうとするが簡単に止められる。

「まあ聞けよ。あのまま力を持ってもお前は死んでたぜ。おそろくな」

「どういう事だ…？」

「お前は元々破動を使えたわけでもねえんだ。なのにいきなりあんな大きな力を手にしたら体が付いて行かなくなっちまう」

リーフは黙って聞いている。

「とりあえずお前の体がこの力に耐えられるようになったら返してやるよ。ま、破動は残しといたがな」

「……わかった。失くすんじゃないぞ？」

「任せときな」

リーフは実弾を放つ。

シンは軽く躲す。

「おいおい悲しいな。こんなに簡単に躲されるなんて」
「こんなもんじゃねえだろ」

リーフは表情を変えずに実弾を全て放つ。
しかしやはり躲されてしまう。

フラッシュショット
「閃光弾」

「！！！」

シンは動き出すのが一瞬遅れ、光の弾が肩に被弾する。
被弾した所が焼ける。

「輝力を装填し、放つのか」

「そうだ。テメエの能力は？」

「言う訳ねえだろ。クズ」

リーフはニッと笑い、銃に輝力を込める。

「誰がクズだ！空裂連射！」
スカイガトリング

小さい弾を大量に放つ。

シンは怯むことなく、手を前に出す。

「三点、赤青緑、闇」

赤、青、緑の点が混ざって広がり、シンの前に黒い壁を作る。
光の弾は黒い壁に呑み込まれた。

「何だ？それ」

「テメエみたいなバカでも色位知ってるよな？」

「当たり前だろ。俺を何だと思ってんだ」

「じゃあ炎は何色だ？」

リーフは少し考える。

大抵の者は『赤』と答えるだろう。

しかし引っかけかもしれない。

なんせカインの破動を見た事は青い炎なのだから。
そしてシンはカインの後釜。

つまり――

「青だ！！」

「赤だろ」

引っかけではなかった。

「……それでその炎が何だってんだ？」

「本当に色が解っているのかの確認だったんだが……やっぱテメエ
みてえなバカには難し過ぎたか」

（バカっていう方がバカなんだよ！バーカ！）

自分で言っているではないか。

「オレは原流士、能力は『色彩点』カラーピット」

「……？」

「色にはそれぞれ属性がある。赤なら燃え、青なら凍る」

つまり色彩点の色によって能力が変わるという事。

「黄色は――」

黄色の色彩点を自分の体に取り込む。
するとシンの体が光り出す。

「速くなる」

一瞬でリーフの目の前に移動する。

（なっ！速えっ！）

「遅えよ！」

一瞬で赤の色彩点を腕に取り込み、リーフを殴る。
そして殴った所が燃え、リーフは数メートル吹っ飛ぶ。

「っ！何だアイツ、急に速くなりやがった……！！」

「この程度か？」

「閃光弾……！！」

先程と同じ弾を発射する。

シンは少し面倒そうに躲す。

（……？）

「さっさと決めさせてもらっぞ」

リーフは何か違和感を感じる。

それが何なのかまではまだ分かっていないが。

シンは黄色の色彩点を体に取り込む。

「何回も喰らわねえぞ」

リーフは自分とシンの間の地面を撃つ。

シンは道を遮られ一瞬動きを止める。

その隙をリーフは見逃さなかった。

エンペラーキャノン

「帝王の断罪！！」

「っ！三点、闇！」

まるで大砲でも放ったかのような弾を黒い壁が呑み込む。

「面倒だな。やっぱここは――」

リーフはもう一つ銃を出し、シンに向ける。

「質より量か。空裂連射！」

先程の倍の量の弾を放つ。

シンは黄色の色彩点を取り込み、高速で避ける。

しかし全て避け斬る事は出来ずにいくらか喰らう。

その時、リーフは先程の違和感が何だったのか気付いた。

「はっ、どうしたんだ？さっきみてえに黒い壁で防いでみるよ」

「ああ？あんなの黄色だけで十分なんだよ」

「いや、違うな。もうできないんだろ？」

リーフの言葉にシンは何も言い返さない。

「テメエの色彩点は輝力を大量に使うのか知らねえけど、せいぜい後2、3個が限界なんだろう？」

「それはどうだろうな」

シンは二つの黄色い色彩点を取り込む。

「これは一つで10倍の速さになる。じゃあふたつだとどうなると思う？」

「……20倍？」

「100倍だ」

「なっ——」

リーフは声を上げる間もなく壁に叩きつけられる。
本当に一瞬で何も見えなかった。

「ぐっ……」

「まだだ」

見えないがシンが何度も殴っているのだろう。

一発の重みは普通の一発と大して変りないが、かなりの速さで、しかも連続で殴られている為、かなりのダメージが来る。
シンの拳が段々遅くなる。

「……もう終わりだな」

いくらか骨が折れているだろう。

リーフは壁に埋まっているようなものだった。

シンは踵を返し、部屋を出て行こうとする。

「待てよ……」

「！！！！」

ガラガラと瓦礫の落ちる音がする。
振り返るとリーフがよろけながらも立っていた。

「もう…使い果たしたみてえだな……」

リーフは銃を手放し、右手を前に出す。
すると右手に光が集まる。

「良いもん見せてやるよ」

光は形を変え、銃になる。

「これが……『アース』の力だ！！」

「ゴッド・オブ・デストラクション
破壊神の怒りの極刑！！」

銃から放たれた光の弾は形を変え、光の巨人となる。
以前、スラークに対して使ったものよりは小さいが、3m程あるだ
ろつ。

「撃ち放つ……崩壊の銃撃を」

リーフが言った瞬間、部屋を光が覆った。

只今の『アース』vs『聖冠団』の戦績
6勝1敗3分け：1勝6敗3分け
残り人数：5対3

第51話 その力、碎ける事なく（後書き）

（イグルス）

「終わり方雑っ！」

（雪龍）

「こんな感じの方がカッコいいだろ？」

（イグルス）

「……そうなんスカね」

（雪龍）

「まあ、前を振り返っても仕方ない！次回は頼んだよ」

（イグルス）

「了解ッス！」

（雪龍）

（コイツ誰だっけと思われた方は第11話をご覧ください）

（イグルス）

「？ 次回もお楽しみに」

第52話 危険と真実（前書き）

今回結構短いです。

第52話 危険と真実

「アンタ誰なんだって聞いてるんスけど……!!」

「……………ダ…エン……………」

そこでイグルスの堪忍袋の緒は切れた。

「だああもう!! 声小さいんスよ!! もっと大きい声で喋れ!!」

10分程前から同じような事を繰り返していたので、とうとうイグルスは言った。

相手は大声を出されて体をビクツと震わせる。

「お、大声を出さないでくれ……俺は耳が良いんだ。そんな大きな声を出されると耳がイカれてしまう」

「……ならこのボリウムで話す。改めてアンタの名前は？」

「ダルト・エンパラス……………」

ダルトは結構ガタイが良く、茶髪のオールバック。ただ黙って立っていれば途轍もない威圧感がある。しかし

「よし……………始めるか」

声が小さいのが玉に傷。

「グフツ……あゝ……痛え……ガフツ」

アルバシスは瓦礫に埋もれていた。
体中から血が溢れている。

「誰かと思えばお前か。良い様だな」

「……いつの間に、そんな……反抗的になったんだ？」

アルバシスの下に訪れたのはスラン。

「……オッサンにやられたのか」

周りを見渡してスランは言う。

もうそこに本当に部屋があつたのか疑ってしまうほどに破壊されている。

「やっぱあの人には、勝てねえな」

「容赦ねえからな。あの状態じゃ」

アルバシスは内ポケットからボトルを取り出し、中の液体を飲む。
すると普通に話せるほどまで傷が治る。

ただ、骨がかなり折れている、もしくは罫が入っているので立つ事は出来ない。

「さて、オレの相手はお前なのか？」

「いや、カインを転送したんだがクラウンさんを抑えに来たんだ」
「ふうん……」（じゃあオレの相手は誰なんだ？）

アルバシスはスランを改めて見てフツと微笑む。

「何だよ気持ち悪い」

「いや、昔を思い出していたんだ。まだお前が『聖冠団』第3部隊隊長だった頃の、な」

アルバシスは真剣な表情になる。

「『聖冠団』に帰って来い、スラン。いや——」

「スラニツク・シュランツ。オレの弟だろ」

スラン・フォン・フォニム。

本名スラニツク・シュランツ、アルバシス・シュランツの弟は元『聖冠団』第3部隊隊長だった。

「……少し、派手にし過ぎたか」

ダルトの前には血まみれで膝を付くイグルスがいた。

「何なんスか今の……」

「……君も召喚士だったんだね。でも、君にはこの力の才能が無いようだ……」

ダルトは部屋を出て行くこととする。

「待て……クソッ……!!」

イグルスは朦朧とする意識の中で、ダルトに向かって走り出す。そして拳を放とうとする。

「君では僕には勝てないよ」

ダルトの裏拳がイグルスの腹にめり込む。

イグルスは数メートル後ろの壁まで吹っ飛ぶ。

「殺しはしない。君はまだ強くなるだろうからね」

そう言つてダルトは部屋を後にした。

只今の『アース』vs『聖冠団』の戦績

6勝2敗3分け：2勝6敗3分け

残り人数：4対3

場所はまた戻ってスラン達。

「その名前は捨てたんだ。オレはスラン・フォン・フォニム」

「……そうか。なら一つ教えてやる。第一部隊副隊長には気をつけろ」

「副隊長？何でだ？」

副隊長と言う者は隊長より下。

と言う事は隊長達の方が気を付けた方が良い筈。

「アイツが興奮したら危険だ。だからアイツをオレの傍に置いて監視してるんだ」

「そうか。そいつはアレの事か？だとしたらその忠告はもう無駄なようだ」

スランが後ろを向くと、入口からダルトが入ってきた。

「隊長！？そいつにやられたんですか！？」

「いや、別の奴だ……」

「お前が副隊長さんで間違いないようだな」

スランは目を閉じて深呼吸する。

そしてゆっくりと目を開けて

「相手してもらおうか」

第52話 危険と真実（後書き）

（雪龍）

「イグルス……ドンマイ」

（スラン）

「お前がしたんだろ」

（雪龍）

「そうだけど……スラン！頑張ってくれ」

（スラン）

「頑張る、ね。オレにそんな事が出来ると良いんだがな」

（雪龍）

（ここまでクールだとやり辛いな……）

（スラン）

「まあ、次回もお楽しみに」

第53話 真空の管弦楽団

スランは相手の出方を見ようと先に動き出す事は無かった。
しかしダルトも動き出さない。

「そう言えば……君の名前は？」

「スラン・フォン・フォニムだ」

声が小さいがスランにとっては何ら問題は無い。
ヘッドホンをしていても通常の間人よりかは聞こえる。

「……来ないならこっちから行く事にするよ」
（それを待つてただけだな）

ダルトはポケットから石を取り出して放り投げる。
地面に落ちた所で石が光り出す。

「何だ……？」

「出でよ、豪王の魔神サタン」

石から真つ黒い巨人が現れる。

白い長い髪にゴツイ体、頭部には一本の角と見た目からしてかなり
強そうだ。

「イグルスと同じ召喚士か」

「行け」

サタンが右腕をスランに振り下ろす。
スランは音速で躲し、ダルトの背後に移動する。

「音導弾——回旋曲」
ソニック
ロンド

音の衝撃波が回転しながらダルトに迫る。
しかし何かに遮られる。

「今度は何だよ」

その何かと言うのは白い腕だった。

「出でよ、理念の霸王ルシファー」

今度現れたのはサタンの真逆で真っ白い体の巨人。
髪が黒いという部分を除いてサタンと同じ。

「こんな化物を同時に呼び出すとはな」

ルシファーとサタンがダルトを護るように立つ。
そして二体の巨人が同時にスランに腕を振り下ろす。

（今だ……！）

スランは音速で腕の隙間を掻い潜り、ダルトに接近する。
しかしダルトは何もしようとせず不敵に笑みを浮かべている。

「甘いよ」

「なん——！！」

スランは全身に激しい衝撃を感じた。
次の瞬間には壁に激突していた。

巨人二体に蹴り飛ばされたのだ。

（中々の反応だな。それに力も強え）

スランは口に溜まった血を吐きだし、立ち上がる。

「オレもたまには真面目にやるか」

スランが目を閉じる。

すると部屋全体が揺れ始めた。

「二匹の悪魔と眠りな。永遠の揺籃歌」
デス・ララバイ

大きな音の衝撃弾は二匹の巨人と共にダルトを包んだ。

オレは何を失ったろうか。
それすらも解らない。

暗闇に灯された真つ赤な炎。
その炎がオレの行く道を灯してくれていたのかもしれない。
オレは色んな事から目を背けてきたが、お前は全て受け止めた。

どうしてお前はそんなに強いんだ？
どうしたらお前みたいに強くなれるんだ？

なあ、カイン。

「倒したか？」

「スラン！！まだ終わってねえ！！」

「何…？」

スランが叫んだアルバシスの方を向いた瞬間、景色が変わり壁に叩きつけられた。

そして頭を掴まれ、持ち上げられる。

「何……だ…？」

スランは自分の頭を掴んでいる者の顔を見る。
その人物とはダルトだった。

「コイツ、こんな力があつたのかよ……」

「ちげえよ、ボケ」

「！？」

先程まで温厚だったダルトの口調が一変している。
それに二体の巨人もいない。

「これは俺の破動、『人獣融合』だ!!」

「召喚士の…破動だと…!？」

スランは今までそんな事を聞いた事が無かった。
故に召喚士に限って破動は存在しない物だと勝手に仮定してしまっていた。

「そう、召喚士の波動は呼びだした召喚輝獣と融合し、その力を自ら扱う事が出来るんだよ!!」

「……化物が」

「うるせえよ」

スランは蹴り飛ばされる。

あの巨人二体の力を扱っている為、力がかなり上がっている。

「ッ！音導弾——円舞曲」
ソニック フルツ

無数の音の衝撃波が放たれる。

しかし、ダルトはいとも簡単に全て避けた。

（音速以上の速さ…!?!）

「そろそろクタバレ」

ダルトはスランの前に移動する。

音速以上の速さで移動した為スランは目で追えない。

「死ねッッ！！！」

ダルトの突きがスランの腹に減り込む。

「ガハッ！！」

「……終わりだ」

「……ハッ、終わりじゃねえよ」

スランは何とか必死に立ち上がる。

「いや、テメエはもう戦えねえだろ」

「この部屋、さっきから揺れてると思わねえか？」

確にかすかに揺れている。

「それがどうした？」

「言ったる……。オレも真面目にやる、ってな」

部屋の揺れがますます強くなる。

「音は振動。その振動はさらに大きな振動を生む。振動は空気を尖らせる」

スランが言った瞬間、ダルトの頬に切り傷ができる。

振動は人体に多大な影響を及ぼす場合がある。

「なっ……！？」

「アルバシス、巻き込まれなくなきゃココを離れな」

スランは手に輝力を溜めている。

スランは少し笑っている。

アルバシスは何処かへ瞬間移動した。

「これが、オレの最強の技だ。室内専用だな」

「音速程度で俺を倒せるとでも思ってたのか!!」

「これは速さは関係ない。全方位無差別攻撃」

スランは手に溜めていた輝力を一気に放った。

ブローケン・オーケストラ
「真空の管弦楽団」

ダルトの腕に切り傷が出来る。

「奏でろ……」

その傷は一つ、また一つと増え、

「至高の旋律を!!」

全身に無数の切り傷が生まれる事となった。

「流石に……オレも、無理か……」

只今の『アース』vs『聖冠団』の戦績
6勝2敗4分け：2勝6敗4分け
残り人数：3対2

第53話 真空の管弦楽団（後書き）

（雪龍）

「次回はやつとこの男が登場だ！」

（カイン）

「よっしゃ！出番ねえのかと思ってたぜ！」

（雪龍）

「因みに次回とその次の回で『総力戦ゲーム編』は終了です。ああ、長かった」

（カイン）

「まだ終わってねえんだから。気拔くなよ」

（雪龍）

「ごめんごめん、だって10回位戦闘が続くのつてきついんだよ？」

（カイン）

「そうだな。それも俺で最後なんだから頑張ってくれよ」

（雪龍）

「うん、頑張る！」

（カイン）

「じゃあ次回もお楽しみに！」

今回の技は現実的にあり得ない技かもしれませんが。（今更？）

しかしそこは小説の中だから、と優しく見守って下さい。

……今回に限ってはありますが。

第54話 家族の為の最終決戦

「俺は『聖冠団』第3部隊隊長、ケイスト・リンク。お前はカイン・クリーク。間違いないな？」

「あ、ああ」

カインは第6演習場に来ていた。

あの後ミナスと別れたカインは団長室に向かっていたのだが、その過程でここに来たのだ。

「俺はお前を倒す。裏切り者のお前をな」

「随分な言われようだな。裏切り者って」

ケイストの容姿は、茶髪で前髪は目にかかる位、後ろは肩にかからない位の長さ。

そして目は青く、身長はエリサと同じ位。（エリサは165？）
見た目からして恐らく15〜16歳位だろう。

「俺はお前を排除する。『聖冠団』のために」

「ああそうか。なら俺もお前をぶっ飛ばす。リルを助ける為に」

カインは手に赤い炎を灯す。

「……破動は使わないのか？」

「やっぱ知ってんのか」

「そう言えば使えないのだったな。あの人を殺した時に付けられた
刻印でな」

カインはその言葉をバカにするように笑った。

「グダグダ言ってねーで来いよ。それともビビってんのか？」

「……面白い。完膚なきまでに潰してやる」

ケイストの手から手が伸びる。

解り難かったならもう一度言おう。

ケイストの手から手が伸びる。

「な、何だあ！？」

ケイストの出した手は光っており、ただの手で無い事は見ただけで解る。

「行け」

ケイストの命令で二本の手がカインに向かっていく。

迫りくる二本の手をカインは炎で燃やそうとする。

「そんな炎など無駄だ」

しかし二本の手は炎で燃え尽きる事なく、カインへと迫る。

「っ！！」

二本の手はそれぞれカインの肩を掴む。

「拘束完了」

「何だこの手、全然離れねえ！！」

「俺の能力は『ストレッチバンド光触手』。俺の思い描いた通りに触手は動き、形や色を変え、敵を殺す。半径5m以内ならどこにでも出せる。因みに

その触手は粘着性だ」

カインはそれを聞いて動くのを止める。
無理に動くと余計に絡みついて動けなくなると思ったからだ。

「お前を殺せば今捕まっている娘は何て言うだろうな」

「そうだ、聞き忘れてた。リルは無事だろうな？」

「俺は知らないが恐らく大丈夫だろう。団長はゲームが好きでな。
ルールはちゃんと守る」

そう言うときエストのいる場所の間横の地面から一本の光っている棒（？）の様な物が現れた。

「……何だそれ？」

「触手だ」

「嘘つくなあ！どう見ても手じゃねえだろ！！しかも手から出てねえぞー！！」

「さっき自由に形を変えられると言った筈だが……」

その言葉にカインはビクツと震え、冷や汗が頬を流れる。

実は肩に付いた触手を取ろうとして話を半分も聞いていなかったのだ。

聞いていたのは能力が触手という部分と、肩に付いている触手が粘着性という部分だけ。

だがカインはなめられる訳にはいかないのだ。

相手が『聖冠団』というのもあるが、何より年下になめられるというのは絶対に嫌らしい。

「あ、ああ、聞いてた。メツチャ聞いてたよ。ただそういうアレはソレだと思ったから……」

「聞いてなかったなら聞いてなかったと言えば良いだろ。情けない」
カインの超が付くほど下手な演技にケイストは呆れる。
結局カインの努力（？）も水の泡となった。

「まあ良い。お前は……死ね」

地面から現れた光の棒が鋭くなり、カインを貫こうと向かっていった。

「ん、ここは……」

「目が覚めた？」

「きゃっ！」

ここは『聖冠団』団長室。

リルはソファに寝かされていた。

いきなり青年が目の前で話しかけてきたので驚いていた所だ。

「あ、あなたは誰ですか？それにここは……」

「僕はウィンツ・ジェイレーン。『聖冠団』団長にして大地を照らす13星座の双子座さ」
シャイニング
ソディアック

その言葉にリルは驚く。
目の前にいる青年が大地を照らす13星座で『聖冠団』の団長だとは。

「……って、『聖冠団』？」

「あれ？知らない？うーん……ん？」

ウィンツが後ろを振り向く。

するとボロボロのアルバシスがドアの前に瞬間移動で現れた。

「どったのアル君。そんなボロボロになるような相手いたっけ？」

「クラウン・ジョーカーがスウェルを捜してやってきた。……スウェルは？」

「え？来てないけど」

「何だって……！？」

ウィンツはそんなアルバシスに笑顔でこう言った。

「まあ、ちよつと休みなよ。丁度”蒼き炎の悪魔”と恐れられた元『聖冠団』第二部隊隊長の本気が見れるからさ」

そう言つて宙に浮いている画像をアルバシスに見せる。
それをリルも見る。

そこには今にも何かに貫かれそうなカインが映っていた。

「カインさん……！」

「まあまあ、お姫様は王子様が来るまで大人しくしててよ」

バツと立ち上がるリルをソファに座らせてウィンツは微笑んだ。

カインはどうするか悩んでいた。
あと3秒ほどで貰かれるだろう。

（仕方ねえ。修行の成果、見せてやろうじゃねえか）

カインは目を閉じる。
すると蒼い炎がカインを包んだ。

ブルーメール
「蒼炎の羽衣」

そう言うときカインは蒼炎を纏い、肩に付いている触手を燃やす。
そして蒼炎が勢いよく発射され、向かってくる鋭い触手を燃やしつくす。

「触手が燃えただ！？」（それにあの炎……何故操れる！？）
ブルーフレイルム
「蒼穹の炎の特徴は全てを燃やし、造型しやすい。後、何でを操れるのかって思ってるだろ」

カインの背中に蒼炎の翼が現れる。
そしてケイストに向かって飛んでいく。

「くっ！八神楽！」
やかぐら

ケイストの周りの地面から先程の鋭い触手を八本出す。
そしてその全てがカインに襲いかかる。

「俺は優秀な先生の下で修行してきたんだよ。マンガの主人公風に」

カインは全て避けながらケイストに迫っていく。

「クソッ！」

「だからデメエなんざ俺の敵じゃねえ！！」

グサッ

「っ！？」

カインは自分の腹を確認する。

そこには自分を貫いている真っ赤に染まった触手があった。

「いつ、の間に……！！」

「俺の触手は色も変えることができる。色を失くす事も出来る」

（透明な触手があったってのかよ……！！）

「終わりだ」

その言葉を聞いてカインはニッと笑う。

「はっ、ここはもう俺の間合いだ」

カインはケイストに右手を突きだす。

する体に纏われていた蒼炎が右手に集まる。

「遅い。ひゃくれんじん百蓮刃」

地面から百もの触手が現れ、先端部分が刃物の様になる。
そしてそれが全てカインに向かっていった。

（終わったな）

ケイストは完全に油断していた。

しかし幾つもの切り傷が出来ていたものの致命傷は避けられていた。

「バカな!!」

ケイストはカインを見て驚く。

それもその筈だ。

カインの身体には赤い炎が纏われているのだから。

炎で少しだけ軌道をずらし、致命傷を避けたのだ。

「原流と破動を同時に使ったと!? そんな事出来る筈が……」

「さっき言っただろ。優秀な先生の下で修業したってな」

右手には既にカインが持つ殆どの輝力が込められていた。

「ブルー・ドラグーン蒼穹の大炎砲!!」

カインの右手から大きな蒼炎の弾が放たれる。

「燃え尽きる……」

「灼熱の火炎によって!!」

ケイストは蒼炎に包まれる。

しかし、少しすると蒼炎は消えた。

「消え、た…？輝力が尽きたのか？」

「ちげえよ、バカ。ただ優秀な先生にもう人を殺すなって言われちまっただよ」

カインはケイストの方に手を置き言った。

「じゃあ、行かせてもらっわ」

「……クソッ……」

立っているのもやっとだったのか、ケイストはその場に崩れ落ちた。

只今の『アース』vs『聖冠団』の戦績

7勝2敗4分け：2勝7敗4分け

残り人数：3対1

第54話 家族の為の最終決戦（後書き）

（雪龍）

「次回で終了だい!!」

（カイン）

「良かったな。因みに次回の投稿は25日だ。予告しておこう」

（雪龍）

「珍しく予告なんてしたら雨降っちゃうよ」

（カイン）

「降るなら降れよ」

（雪龍）

「天気に対して何故か強気なんだね」

（カイン）

「まあな。では次回もお楽しみに」

（雪龍）

（そう言えば最近大人しくなったなあ…）

第55話 過去物語、はじまりはじまり

「ここだよな……」

カインは団長室の部屋のドアの前まで来ていた。
カインはよし、と意気込むと手に炎を灯す。

「リル大丈夫かッ!!!」

そしてドアを破壊した。
その中の情景を見て驚いた。

「あ、カインさん」

リル、ウィンツ、アルバシスの三人でトランプをしているのだから。

「カイン君、おめでとう。君の、君達の勝利だよ」

カインが「コイツ誰だ？」と聞いたのでリルにした時と同様にカインにも自己紹介した。
するとやはりカインはリルと同様に驚いた。

「それで、ちゃんと帰らせてくれるんだろーな」

「当たり前前のクランクだよ」

正直古いです。

「でもま、その前にリルちゃんには君の過去を全部教えちゃおうと思ってるんだ」

「え…？」
「……………」

カインは何も言わずただウィンツを睨む。

「団長良いんすか？シャイニングソディアック大地を照らす13星座に怒られません？」
「大丈夫、大丈夫。ちゃんとロアールにも許可取ってっから」

恐らくロアールは適当に了承しただろう。

彼の性格からしてまともな判断は下していない…だろう。

「えっと、その前にカインさんに渡したいものがあるんです」

リルはソファの後ろから箱を持って来る。

拉致したにも拘らずちゃんと荷物も持ってきてくれるとは中々に優しい。

「コ、コレなんですけど……………」

箱の中身は赤いマフラーだった。

そう、カインの炎のように真っ赤なマフラー。

「スウエルさんに聞いたんです。その首巻は破動の暴走を抑える為の物だって」

「何でまたそんな事言っただんだ？あの人」

「わ、私が聞いたんです。でも修行をしたら首巻が無くても大丈夫なようになるだろうって」

確かに、今となってはこの首巻はただの飾りとなっている。

「その……えつと……」

リルは意を決して言った。

「おかえりなさい」

「…ああ、ただいま」

カインは自分がしている首巻を取って貰ったマフラーをする。
結構似合っていると思う。

「うん、良い感じな所悪いけどまだ仕事が残ってるんだよね」

そう言うときアルバシスがカインの前に来る。

そしてカインの頭に手をかざす。

もちろんカインはその手を掴んで止める。

「何する気だ？」

「さっき団長がお前の過去を伝えるって」

「何でリルだけなんだ？」

カインの聞いている事はもつともだ。

リルに伝えるなら、『アース』の全員に伝えても良い筈。

「君が今一番近くににいる人に秘密は良くないと思うだけだよ」

ウィンツはそう言っているが明らかに何かを隠している。

「早速だが、すまねえな」

アルバシスはカインの頭に手を置く。

すると魂が抜けたように倒れた。

「カインさん!!」

「すまねえな」

アルバシスは自身の眼帯をしている左目に手をかざし、手を閉じる。そしてその手を開くと黒い球体があった。

タイムトリップ
「過去旅行へご案内だ」

その黒い球体をリルの頭に当てる。

黒い球体はそのままリルの頭に吸い込まれるように入っていく。

「一体何を……うつ」

リルは頭を抑える。

激しい痛みと共に意識がシャットアウトした。

—— よお！カイン元気か？

それはかつての友の声。

——貴様はガサツ過ぎるのだ。

懐かしきあの日々。

もう帰ってくる事は無い。

——良いから全員走れえ！！

友はその時何を思っていただろうか。

今となつては解らない。

考えれば考えるほど、虚しくなるだけ。

——何故、何故貴様はっ……！！

友は囚われる。

しかし、その後彼の姿を見た者はいない。

——オイ、ここから出したら手伝つてやる。

そこで出逢うは光が闇か。

——ゴミが処分できたんだ。これ以上の事は無いだろうか？

その時、彼の中に、何かが生まれた。

次の瞬間には周りは火の海。

——クズは燃やしつくしてやる。

少年には誰の言葉も届かない。
そう思われていた。

——君、あたしのセーブに入らない？

——『アース』にようこそ。

その言葉を、聞くまでは…。

これは三年前のお話。

「おい、カイン！起きろ！」

今の時刻は朝7時。

少年は重い体をゆっくりと起こしていく。

「ふわぁ～……もう朝かよ」

「何してるんだ！早く起きろ！」

「起きてるよ。ったく」

「貴様は『聖冠団』第二部隊隊長なのだぞ！」

「わぁってるよ」

少年は部屋に入ってきた少年に言った後、着替え始めた。

「まったく…準備が済んだら団長室に來い」

「朝飯は？」

「起きるのが遅い奴に飯は無い」

「7時は早えっての」

「文句を垂れるな！カイン」

カイン・クリーク15歳

『聖冠団』第二部隊隊長

第四章二部——炎の子の過去物語編、はじまりはじまり

第55話 過去物語、はじまりはじまり（後書き）

今回からカインの過去の話です。

予定では5〜7話位。

長くても8話だと思います。

一応予定なんでね？

因みに今日はクリスマスなのでプレゼントのくだりがあつたんですよ。だから前回投稿した時にはもう予告してたんですよ。

最近言ってなかったんで言います！

感想くださいッ！！

第56話 覚悟を決めて

カインは廊下をトボトボと歩く。

容姿は18歳の時と大した変化はなく、背が少し低いという所以外は全く一緒と言っても良い。

「ふわあゝ……あー、眠い」

「第二部隊隊長がそんな事を言うな。下の者に示しが付かんぞ」

カインが欠伸をして言うと、前を歩いている青年が言った。

青年は白い長い髪に、整った顔立ち。因みに先程起こしにきた者ではない。

「良いじねえか。大体いつつも起こすの早えんだよ。後、3時間は寝てても大丈夫だろ」

「大丈夫な訳が無いだろうが」

二人は団長室の前まで来る。

青年がノックをして扉を開く。

中には既にカインを除く第一から第六までの隊長達がいた。

「あつ、カイン！おはよー！」

「ああ、あはよう」

カインに挨拶し、飛びついて来たのは第六部隊隊長、ミナス・タイク。

当時14歳。

「お前はいつも遅い。いい加減にしろ」

「へーへー、悪かったな」

そう言ってきたのは当時第五部隊隊長、ユーレン・セルシリー。
当時15歳。

「オレだつて眠いんだからさつさとしろよ」

「俺がさつさとしても寝れる訳じゃねえぞ」

カインに不満を漏らしたのは当時第四部隊隊長、シン・エイルハーン。
当時17歳。

「……何だコレ」

「身代り人形だつてさ」

「何でコイツはこれで許されんの!？」

身代り人形を使ってサボっているのは当時第三部隊隊長、スラン・フォン・フォニム。本名スラニック・シュランツ。
当時19歳。

「そいつのサボり癖は死んでも治んねえから仕方ねえ」

「オイ、バカ兄貴ならどうにかしろよ」

スランを庇った(?)のは第一部隊隊長、アルバシス・シュランツ。
当時20歳。

「さーで、一人を除いて全員揃った所で用件を伝えようかな」

イスに座っている青年は当時団長、フライス＝テンペスト。
短い白髪に蒼い目、しかし、左目の色素が少し薄く水色。

左目の下には蒼い牙の様な模様がある。
当時23歳。

「……何の話だっけ？シエン」

「私が答えられる訳がないだろう。知らん」

カインを連れてきた青年は当時副団長、シエン・パルミア。
当時21歳。

「えーっと………あつ、あの事だ」

「長かったな、オイ」

「今日呼んだのは他でもない。次期団長の件についてだ」

「……は？」

ここにいるフライス以外は何を言ってるんだ？という目で見る。
当のフライスはハッハッハッと笑っている。

「何で次期団長なんて決めるんだ？」

「良い事聞いたな、アル」

フライスは笑うのを止め、真剣な表情でアルバシスを見る。

「この前正式に（バカ）王様から辞令が来た」

小さくバカと聞こえたが誰も聞かないフリをした。
それにしても突然辞令とは何事だろうか。

「どうやら王様には息子が三人いるらしいんだが、その末っ子に団長をやらせるおつて言われてさ」

「ああ？そいつ呼んで来い。『聖冠団』舐めてんじゃねえぞ」

「オレに言つなよ。オレは断ろうと思つてんだがな」

「だが良いのか？それを許す程甘くないだろう？」

「そこなんだよ」

フライスはあ、と溜め息をつき背もたれに体を任せる。

そして何か言い案はないか、と目で訴えかけてくる。

しかし、ここの隊長達からはまともな答えは期待できない。

「その王子ボコれば良いんじゃない？」

「全員討ち首になんだろーが」

「……暗殺は？」

「絶対駄目だろ」

「なら城ごと全員燃やすか」

「お前ら思考が野蛮過ぎるだろ！！出来るわけねーだろツ！！」

ここは食堂。

時間は後数分で正午になる。

あの後ずっと良い案は無いかと頭を捻らせたが、結局出て来なかった。

というのも、頼りの綱であるアルバシスとシエンですら何も出て来なかったのだから仕方ない。

「ああ、腹減った……」

「あたしもペコペコだよ……」

「ふん、テメエらまともに頭を使っただけに」

「お前もだろうが。てか俺は朝飯も食ってねえんだぞ」

「それはカイン、お前が起きるのが遅かったからだ」

「だから7時は早えんだよ」

カイン、ミナス、シン、ユーレンの四人は昼食を取り、その後自室に帰っていった。

正確に言うとミナスはカインの部屋に行ったのだが。

仕事をしないのか、という疑問についてはこう答えるしかない。

『今現在、彼らに仕事は無い』と。

本来、『聖冠団』は国の治安を守るのが仕事なのだが、大抵の事は下っ端達が済ませてしまう。

隊長及び副隊長の仕事は、『対輝流士の戦闘』である。

「ねーねー、カイン、何して遊ぶ？」

「んー、そうだな……外にでも行くか？」

「うん！」

だが、ここまで自由な隊長達は『聖冠団』に今までいなかったらしい。

これでは緊急の時に大変だろう。

「よお！カイン元気か？」

「元気かって昼までずっと一緒に居たる」

廊下を歩いていたカインとミナスの向かい側から来たのはフライス。因みにフライスは誰にでもこのように接するので、男女両性に人気がある。

「これからどっか行くのか？」

「ああ、外に行こうと思ってな」

「カインとデートなんだあ」

「おつ、羨ましいな。オレもこれから遊びに行くんだ」

それは団長としてどうなんだろうか。

隊長が遊びに行くというのは格が違うだろう。

「たまには息抜きも必要だしな」

「お前は息抜き過ぎて酸欠になっても知らねえぞ」

「ハッハッハッ、お前が言うなよ」

どっちもどっちである。

というよりこんなので『聖冠団』が成り立っているから凄いと思える。

「じゃあな、楽しんで来いよ」

そう言ってフライスは去っていく。

玄関は三つあるのだが、街に行くならカイン達が今から行く所が一番近い。

「あの人いい加減玄関の場所位覚えれば良いのにな」

「だよーね」。でもああいう所が良いんじゃない？」

「そう………なのかな？」

カインには良く分からないが女子から言つとそうらしい。

二人はそんな事は置いて外へ向かった。

フライスは廊下を歩いていった。

先程カインに言ったのは殆どウソだ。
本当は城に行くのだ。

「オレも覚悟を決めにやならんな」

フライスは出入り口の前に立つ。

そこは城に行くのに一番近い玄関だった。

第56話 覚悟を決めて（後書き）

ついに始まりましたカインの過去編。

まずはキャラとか紹介とかその他諸々です。

次回から急展開に次ぐ急展開！

…になると良いなあ。

感想待ってます。

第57話 窮地

「断る…だと？」

「はい」

ここは城の中のとある一室。

フライスはそこで王と直接話をしている。

たった今、あの話を断った所だ。

「勿論オレの意思は『聖冠団』全員の意思だと思って下さい」

「……王である私を脅しているのか？」

「いえいえ、そんな訳ではありませんよ」

フライスは笑顔で言うが心から笑っている訳ではない。

突然、息子にやらせるからお前は辞めろ、と言われて憤りを全く感じない者はいないだろう。

「言つときますけどオレ達、結構短気な奴らばかりですから。オレも含めてね」

ここまで来たらもう立派な脅しだろう。

通常の間人ならこれだけで討ち首かもしれないが、そこは『聖冠団』の団長だ。

王も簡単に殺そうとはしない。

というより、団長が殺されでもしたら『聖冠団』全員で反逆するかもしれない。

そうなれば一日でこの国は堕ちる。

（オレも人に野蛮とか言つてらんねーか？）

「……もう良い。下がれ」

「解りました。失礼します」

そう言うとフライスは部屋を出ていく。

フライスが部屋を出ていって数秒すると、天井から長身痩躯の男が降りてくる。

長い白髪で、前髪を隠れていて、くねくねと動いている。

俗に言う、”気持ち悪い奴”だ

「キヒヤツ、アイツ、殺して良いのかア？」

「ああ、だが城内で殺すな。私が奴らに依頼を出す。その行った先で殺せ」

「チツ、メンデエなア」

男はそう言うジャンプして天井に張り付いて移動する。
まるでトカゲのようだ。

「ふむ……あのような奴が^{シャイニングソディアック}大地を照らす13星座の蛇遣い座とはな^{オフイウクス}」

当時大地を照らす13星座の蛇遣い座、ソールⅡS。

これから起こる事件の発端であり、その後の事件にも拘わってくる事になるのだが、それはまだ先の話。

数日後。団長室

『聖冠団』に国王直属の依頼が来た。

内容は『脱獄囚の捕縛』である。

先日、城の牢に閉じ込めていた犯罪者が逃げ出してしまったらしい。

「何でも相当危険な奴らしくてな。オレに行って欲しいそうだ」

「確実に何か裏があるぞ、それ」

シエンが苦笑しながら言う。

この間頼みを断ったフライスをわざわざ指名するというのは、裏があると考えて当然だろう。

「そう言うと思った。だからスランと一緒に連れて行くかと思ってる」

「それは良いんだがアイツが何処にいるか解っているのか？」

「それなんだよ。あのサボリ魔を見つけるのはいっつも苦労すんだよ」

「苦労しているのは私達なんだが」

「あん？そうだったっけか。お前は細かいな」

「貴様はガサツ過ぎるのだ」

フライスが愉快に笑っているが、シエンは溜め息を吐いている。

一通り笑い終えると、フライスは立ち上がった。

「ま、今回だけはオレが探しに行くよ」

「……？」

「見つかったら直ぐ行くわ。じゃあな」

シエンは何か違和感を感じた。

それと同時に不安の様なものも感じた。

シエンの勘というのは良く当たる。

今回ばかりは叶って欲しくないとただただ願うしかない。

——もう……見る事は無いのか？

フライスは廊下を当ても無く歩いていた。

適当に搜した所で見つかる筈も無い。

『聖冠団』のメンバー全員に見かけたら団長に伝えるように、とま
で言われるほどだ。

「はあ、何処にいんのかねえ」

「誰を搜してんだ？」

「……お前だよ、スラン」
「知ってるよ」

いつの間に居たのか、スランが壁にもたれかかり腕を組んでいた。

「知ってるってまさか……」

いつもはしているヘッドホンを外して、首にかけている。
このヘッドホンは特注品で、通常の間人なら付けていると何も聞こ
えなくなる程の物だ。

「盗み聞きは趣味悪いぞ」

「人聞きが悪いな。聞こえてきたただけだ」

「ってことはもう準備はできてんのな？」

「オレの隊の奴には既に言ってる」

「よし、なら30分後に出発するぞ」

スランはそれを聞いて黙って何処かに行った。

案外早く見つかった事でフライスは少しホツとした。

「脱獄囚一人捕まえるのにこんなにいらなかったかな」

今回連れてきた人数は軽く100人を越えている。

脱獄囚が居る場所はこの先の丘らしい。

というより何故脱獄囚の居場所が書かれてあるのだろうか。

「やっぱ怪しいんだよなあ」

色々と怪しい所はあるが、問いただしたところで「知らない」の一点張りだろう。

それが面倒で何も言わずフライスは出てきたのだ。丘の上に人の姿が見える。ソールⅡSだった。

「ヒヤハ、残念だったな、お前ラ」

「何がだ？」

「オレは脱獄囚なんかじゃねエ。お前ラは騙されてたんだヨ!」
「やはりな」

フライスはそうだと思っていたが、まさか向こうからバラしてくるとは思わなかった。

何か様子がおかしい。

「まア、オレもあのクズに騙されたんだけどヨオ」

「何だって…?」

その時、スランは何かを感じ、ソールⅡSの背後を見る。

「何だよこりゃあ……」

「どうした?スラン」

スランはフライスに向き直り言った。

「騙された…!!」

「一体何がある……なっ!？」

フライスはその光景を見て驚いた。
数百人の兵がいたのだから。

「ちっ、そう言う事かよ！全員逃げろ！！」

「し、しかし！」

「良いから全員走れえ！！」

「そうではなく——」

「全方位を囲まれています！！」

フライス達は全方位を囲まれていた。

兵の数、およそ五千人。

「だから言った口？オレたち騙されたんだよ！あのクソ野郎によオ
！！」

第57話 窮地（後書き）

急展開過ぎますね。

ちなみに後書きでカイン達が出て来ないのは、何となくです。
過去編終わるまで出てきません。

では、次回もお楽しみに。

第58話 L O S T

「全員、スランを逃がす事を第一として考える」

フライスは全員の前に立ち、言った。

この中で音速で移動できるスランが一番逃げるのが可能な上、冷静な為状況を正確に伝えられると思ったのだ。
横でソールⅡSが怪訝そうに見ている。

「オレも協力してやんヨ」

「はあ？お前は逃げねえのか？」

「ジョーダンかましてんじゃねえヨ。誰が逃げるカ」

ソールⅡSの表情には怒りが見て取れた。

「オレ様を駒にした拳句、使い捨てにしやがるとハ……どう刻んでやるウカ……!!」

「それよりまず命を守れよ」

スランはフライスの後ろ姿を目に焼き付けて音速で走り出した。
自分がまた戻って来た時、彼はまだ――

「くそっ！考えるな！」

目の前に兵が立っていた。

「邪魔だあああああああ……!!……!!……!!」

スランは自分の持てる力を全て拳に乗せ、兵を殴り飛ばした。

そして一心不乱に走る。

スランが本部に帰って来れたのは走り始めて15分後だった。流石にずっと走るのは無理だったので休憩しながらだったが、かなり早く帰って来れた。

「おい！シエン！！どこだ！！」

「珍しく五月蠅いな。というより貴様依頼に行ったんじゃなかったか？」

シエンが耳を抑えて近付いて来る。

「その事なんだが……嵌められてたんだ！！」

「……やはりか。だが、それを承知で貴様を連れて行ったのだろう？」

「そうなんだが数が問題外だったんだよ！！」

シエンはどの位だったのか尋ねる。

「約五千だ……！！」

「五千だと！？アイツ一人の為にそんなに……」

「とにかく全員連れて早く行こう！」

「……ああ」

その後、シエンは今本部に居る者全てを引き連れて丘へと向かった。隊長、副隊長、その他約三千人全てを引き連れて。

丘に付いたのはおよそ50分後。

つまりスランがここを発つて1時間と少し経っていた。

「何だ、これは……」

シエンが着いた時には血溜まりしかなかった。

生きている者どころか、死んでいる者すらいなかったのだ。

「おいおい！どうなってんだ？団長はどこ行ったんだ！？」

シンが周りを見渡して言う。

流石に死体一つ見当たらないというのは不自然過ぎる。

「既に処理されたのか……？そうだとしたら誰に……」

「処理されたって言うても何千人もいたんだろ？そんな数をたかだ

か1時間でどうにか出来ねえだろ」

全員冷静を装っていたが、内心かなり焦っていた。
フライスの強さを信じているからこそ、生きているだろうという希望。

死体一つ見つからない不自然さから来る不安と絶望。
その感情が入り混じっていた。

「……ここに居ても仕方ない。帰ろう」

「おい！団長はどうすんだよ！！」

カインがシエンの胸倉を掴む。

「見つからないんだ。それなのに居ても仕方ないと言ったんだ」

「テメエ……！！少し遠い所に居るかもしれねえだろ！！」

そこまで言うと、カインの腕をアルバシスが掴む。

「お前も解るだろ。近くにアイツの輝力どころか気配すら感じないのを」

「それは俺達を感じれてないだけで——」

「いい加減にしろ！！現実を受け止めるよ！！アイツはもう死んだんだよ！！」

「……テメエ、今何だった……？」

カインはシエンを離しアルバシスに向き直る。

「死んだ？アイツが？ふざけんなよ」

カインは踵を返し、歩いていく。

少し歩くとカインの身体から炎が溢れてきた。
赤い炎ではなく、青い炎でもなかった。
その炎はどす黒い炎だった。

「カイン、お前その炎は…！？」

アルバシスが言うと、黒い炎は消えた。

「この依頼、王からの直々のモンだと言ってたよな？」

「あ、ああ。そうだ」

「カイン…。貴様まさか」

カインは何も言わず歩いていく。
そのカインの方をシエンが掴む。

「王を殺す気か？」

『！！！』

シエンの言葉に全員驚愕する。

「離せよ」

「話す訳がないだろうが。王の下へは私が行く」

「うるせえよ…！！テメエらじゃもう信用なんねえ。俺が行く…！！」

「……………落ち着け」

シエンは輝力で鎖を作る。

その鎖がカインに巻きついていく。

「おい！ほどけよ！シエン！！」

「少し寝てろ」

シエンが言うと、そこでカインの意識が途切れた。

「帰ったらカインを部屋に入れて出すな。もし出たら『聖冠団』総出で捕えろ」

「何もそこまでしなくても……」

「そこまでしないと本当に王を殺しに行くだろうが」

シエンはカインをアルバシスに任せて歩き出した。

「話は私とスランで付けに行く」

ここは城の一室。

「ええ、『聖冠団』が乗り込んでくるでしょう。その時は…頼みますよ？」

「かしこまりました。この――」

「ブライソル・サムレンクスにお任せを」

第58話 LOST（後書き）

皆さん、この急展開に付いて来れてます？

ここに出てきたブライソル・サムレンクス。

…誰？って思った人、前の方を読み返してみようか。

ところで今回の最後、城の一室とかで話をしている描写があります
が、あれはカインとリルには見えていません。

見えているのは『聖冠団』のメンバーが居る所だけです。

今回はこの辺りで終わります。

では、次回もお楽しみに。

感想待ってまーす。

第59話

BROKEN JUSTICE

シエンとスランは城の門に来ていた。
そこで兵に止められる。

「王に話がある」

「幾ら『聖冠団』副団長といえど会いたいで会わせる事は――

――

「つべこべ言わずに会わせろ」

シエンが言うと同時にスランが兵の首に手を突きつける。
通常の間人なら何をしている、で済むのだろうが、スランは手を高
速振動させている。

このまま振りければこの兵の頭と胴体が離れることになる。

「私達は気が長くないぞ？」

「そーそ。今にも首すっ飛ばしそうだ」

「き、貴様ら、こんな事してただで済むとでも――――」

その瞬間、シエンが兵を殴り飛ばした。

兵は吹っ飛び、門に激突し、動かなくなる。

「五月蠅いんだよ」

そのまま二人は門を壊して入っていった。

『聖冠団』の副団長と隊長だと言っても、流石にこれは反逆罪とと
られてもおかしくない。

だが、これがカインだったら城ごと燃やしているかも知れない。

「……出せよ。もう暴れたりしねえから」

カインは外に居る人物に話しかける。
しかし外に居る者は何も言わない。

カインは窓がないドアがあるだけの独房の様な所に閉じ込められている。

「お前だつてことは解つてんだよ、アルバシス。ここから出せ」
「副団長命令でお前を出すなつて言われてんだよ」

外に居る人物とはアルバシスだった。
アルバシスはカインが出て来ないように外で見張っているのだ。

「本当に何もしねえよ」
「何もする気がねえならここに居ても良いだろ」
「こんな暗え所、息が詰まってやってられるかよ」
「火で明るくしたらどうだ？」

カインはどうにかして出れないかと考えていた。
ここを出たら真っ先に王の下へ行く。

「言つとくけどここから出ても『聖冠団』総出で捕えろつて副団長命令だ」

「そうかよ」

カインの中で怒りが溜まっていく。

この怒りが爆発しないうちはまだ冷静でいられる。

自分は昔から感情の抑制があまり出来ない。

そんな自分がここまで暴走しない事に一番驚いているのはカイン自身だ。

（アルバシスがここから離れたら……一気に抜けよう）

アルバシスではまだ勝てないだろう。

しかし、彼以外ならまだ勝てる可能性がある。

その時を狙っている。

その時、カインが何かに気付いた。

（ん……？何だ？）

床のブロックが少し動いた。

（これは……！！）

シエンとスランは廊下を歩いていった。
彼らを止めようとしてくる兵達を倒しながらここまで来ていた。
その証拠に彼らが進んで来た廊下には兵達は何人、何十人と倒れていた。
もちろん殺してはいない。

「……ここだな」

今二人は玉座の扉の前まで来ていた。
入って来た時からそうだが、もう捕まっても言い逃れはできない。
スランが扉を蹴破る。
玉座には王が堂々と座っていた。

「こんな所までやってくるとは……死にに来たのか？」

「いえいえ、そんな訳ではございません。先日頂いた依頼の依頼先
で兵の軍団に襲われたそうなんです」

「それを私が命令したとも言うのか？」

「はい」

「はっ、馬鹿馬鹿しい！何故私がそんな事を」

「団長が貴方の誘いを断りましたよね？」

「ああ、断られたな。まさかそれで私が殺したとでも？」

「……私は”襲われた”と言いましたが”殺された”とは一言も
言っていないですよ？」

スランが音速で王の下に移動し、首に手を突きつける。
先程と同じように高速振動をさせている。

「デメエがしたって事は解ってたんだよ」

「……それがどうした？」
「ああ？」

王はハッと笑い飛ばした。

「そうだ。私が命令した。それがどうしたと聞いているんだ」
「テメエ……自分が何言ってるのか解ってるのか……？」
「ああ、解っているさ。だがそれを知ってどうする？私を殺すか？」
「っ！テメエ……！！」

スランが手を振り切ろうとする。
しかし、途中で手に力が入らなくなる。
腕を見ると三本ナイフが刺さっていた。

「なっ……に……？」
「王を手を掛けようとする等……やはり野蛮な連中ですねえ」
「ブライソル……サムレングス……！！」

壊れたドアからブライソルが入ってくる。
手には数本のナイフが。

「貴族である貴方が何故ここに？」

ブライソル・サムレングスは高級貴族である。
白髪で片眼鏡をしており、気品が漂う格好をしている。

「輝力封印の枷^{チェイン}」

ブライソルが言うと、シエンの腕に枷が嵌められる。

「しまった…!!」

「シエン!!」

「今の内にそいつを捕えてください」

何処に隠れていたのか、兵がスランを囲む。

片腕が使えない上に、人質を取られている為、何もできず、スランも捕まってしまった。

「団長と副団長、更に第三部隊隊長を抑えました。これで私を『聖冠団』の団長にして頂けますね？」

「は…？何言つてんだ…？」

「ああ、あんな屑共の集団などくれてやる」

「ありがとうございます」

「何故貴様が団長に…!？」

「連れて行け」

王が命令するとスランとシエンは連れて行かれる。

「それでは副団長、いやもうあなたはただの人間だ」

「何故貴様が団長に…!!」

「さようなら。もう会う事は無いでしょう」

「何故、何故貴様はっ…!!」

スランは牢へ、シエンは別の場所へ連れて行かれた。
この時『聖冠団』は一度、崩壊した。

第59話 B R O K E N J U S T I C E (後書き)

えゝ、どうもです。

またまた急展開ですがちゃんと付いて来れますか？

ちなみに僕が置いて行かれそうです！（何でだよ）

タイトル、二話連続英語でしたがこれにはちゃんと意味があります。
それが解るのは数話後です。

次回もお楽しみにゝ。

あ、あとこれだけは言わせて下さい。

感想、求ム。

第60話 PARTING（前書き）

祝60話記念！

なんてものは無いよwww

第60話 PARTING

アルバシスはかれこれ3時間ほど無言で椅子に座っていた。
カインが何も喋らなくなり少しおかしいと感じたが、大人しくする
ならそれで良いと思った。

（……寝てんのか？）

アルバシスは何も気づいていなかった。

『聖冠団』の危機にも、カインが既にこの部屋に居ない事も。

カインはどこかの地下室の様な場所に居た。

監禁されていた部屋に抜け道があったのだ。後ろの壁が出口になっ
ていた。

因みにこの抜け道はサボリ癖のあるスランが作ったものである。

いつもここから逃げ出して何処かに行くのだが、誰もそんな事は知
らなかった。

「ここはどこだ？どっかの牢屋みてえだな」

途中で分かれ道がいくつかあったが、ずっと真っ直ぐ進んだ。

「この声、カインか…？」

「スラン？おい、どこだスラン！」

カインはスランの声のした方に走る。

スランは牢屋の中で手枷を嵌められていた。

「一体何があつたんだ！？」

「それより前に何故お前がここに居るんだ？」

質問に質問で返すスラン。

カインはここに來た経緯を話した。

その時スランが「思わぬ所で役に立ったな……」と呟いていた。

「俺はこれから王の所に行こうと思ってんだが……ここは城だろ？」

「そうなんだが王の所に行くのは見当違いだ。アイツを裏で操ってる奴がいたんだ」

スランはその者が『聖冠団』の団長になる事も言った。

カインは驚きもあつたが怒りの方が大きかった。

「……………！！」

怒りのあまり声も出なかった。

カインは走り出そうとする。

しかしスラン「オイ」が呼び止める。

「ここから出したら手伝ってやる」

スランの笑みは天使の物が、悪魔の物か。

「カイン、飯の時間だ。入るぞ」

アルバシスが夕食を持って入る。
しかし、そこには誰もいなかった。

「いない……！？クソッ！」

アルバシスは眼帯をしている左目に手を添える。
そして出てきた黒い球を握り潰す。
頭の中に映像が流れ込んでくる。

「……！！マジかよ」

アルバシスは走り出した。

カインは炎を灯した手で門を破壊する。

ここはサムレングス家の屋敷だ。

かなり広く、この中からブライソルを見つけ出すのは難しいだろう。だがここにはスランがいる。

「スラン、屋敷の状況とアイツの居場所は？」

「……ブライソルを含めて32人。奴の居場所は……こつちだ」

スランはブライソルの居る方に走り出す。

カインはそれに付いていく。

途中で雇われている傭兵らしき者達が来たが、スランが意識を奪い取っていく。

標的はブライソル唯一人である為、他の人物は殺しはしない。

ブライソルがいるであろう部屋の扉を破壊する。

中には二人が探していた人物がいた。

「ブライソル……!!」

「おや、誰かと思えば脱獄囚と私の部下ではありませんか」

「誰が部下だ……!」

「カイン、オレは外から来る奴の相手をする。コイツはお前に任せ
る」

そう言うとスランは部屋の外に出る。

「さて、一体何の用ですか？」

「解つてんだろ。テメエを殺しに来た……!!」

「……本当に野蛮ですねえ。やはり団員は全て変えねばなりません
か」

「安心しろ。テメエは今から死ぬんだよ」

「何を安心すればいいのやら」

カインは一度深呼吸し、心を落ち着かせようとする。

「一つ聞かせる。何故団長を殺した」

「私は殺していませんよ。ただ命令しただけです」

「……じゃあ聞き方を変える。何故『聖冠団』を乗っ取るうとした
んだ？」

「ゴミが処分できたんだ。これ以上の事は無いだろう？」

その瞬間、カインの中で何かが切れた。

最も切れてはいけない物だ。

それはカインにとって切れてはいけない物ではない。

世界にとって切れてはいけない物だ。

「クズは燃やしつくしてやる」

カインの髪の色が白く変色していく。

その時点でカイン自身の意識が途切れた。

「何だ……？」

「I burn it exhaustively（燃やしつくし
てやる）……！」

カインの体から溢れ出るのは黒い炎。

禍々しく、決して果てる事のない闇の炎。

「な、何者だ貴様——!!」

「The waste disappear quickly（クズはさつさと消えろ）……」

「くつ、輝力封印の枷^{チェイン}」

「It is useless（無駄だ）」

黒い炎は枷を燃やしつくした。

「なつ、何なんだその炎は……!!」

「Burn out（燃え尽きる）」

カインは焼け焦げた家の残骸の中心に立っていた。

先程までの記憶はおぼろげにしか残っていなかった。

ブライソルの死に際に放った技のせいで力が使いにくくなった感覚がある。

「俺は……」

「カイン——!」

アルバシスが走ってくる。

だが時は既に遅い。

「お前……」

「団長の…敵は取った……」

「……『聖冠団』は一週間後からお前を要注意重罪人として指名手配する」

カインは一瞬目を見開いたが「わかった」と返事をした。
アルバシスも言いたくて言ったわけじゃない。
どんな理由があるにせよ、人を殺めたのだ。
これはもう仕方ない事だ。

「なら、オレもだな」

「スラン…！お前まで」

「オレはカインに付く。文句は言わせない」

アルバシスは奥歯を噛みしめる。
そして踵を返して歩き出した。

「早くこの街を離れろ」

「……ああ、今までありがとう」

こうして、カインとスランは『聖冠団』から離れて行った。

第60話 PARTING（後書き）

タイトルが英語だったのはカインの力が目覚めようとした時からでした。

そして今回覚醒！黒い炎。

これが後々の物語にどう影響するのか！

次回からは『聖冠団』を出て『アース』に入るまでの話と殆ど、カイン達が抜けてからの『聖冠団』の話が少しあります。

ここまでだいぶ急展開でしたがどうでしたか？
是非感想をください。

では、次回もお楽しみに。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2196q/>

Sacred Flame of Darkness

2012年1月13日06時45分発行